

2.3m。柱穴掘形の直径は0.3~0.7m、深さ0.3~0.5mで、柱の痕跡は直径0.15m程度のものが多い。また、切り合いのある柱穴が数箇所見られるが、他の掘立柱建物の柱穴とは繋がらないため、この建物の柱を改修したものと考えられる。

建物の中には、北から3列目の梁行柱穴列に中間の柱穴がない箇所があり、この部分は土間にあたる可能性がある。

建物の東側約半間の位置に、4本の柱穴列が存在する。この柱列は後述するSB102との間にあたる。掘形・柱痕跡も他のものより小さく、その深さも浅い。また、柱穴のない部分も存在する。以上のことから、SB101とSB102を繋ぐ軒または縁の柱の可能性がある。

柱穴には、完形やそれに近い形の土器が入れられていたものが数基存在した。SP1146では、土師器の小壺を土師器の甕の破片で蓋をしたもの、掘形の上層から出土している。小壺は正置の状態で置かれ、破片はその内面を上に向け蓋としていた。SP1150では、土師器の椀1個と小皿2枚が掘形上層より出土している。SP1151では、土師器の椀1個が掘形上層より出土している。SP1168では、底部に穿孔のある土師器の小皿1枚が掘形上層より出土している。SP1120では、須恵器の鉢が伏せた状態で1個と、須恵器の椀、土師器の椀、皿がそれぞれ1個出土している。また、SP1145からは、凝灰岩製の砾石が出土している。これらの遺物の出土状況は、柱穴の掘形上層のものと、柱痕跡の上から出土しているものがあり、その状況から、前者は建物の柱を立てた際、掘形に最後の土を入れる段階で行われた祭祀に伴う遺物であると考えられる。また、後者は、建物を廃棄する際、その柱を抜いた後に行われた祭祀に伴う遺物であると考えられる。

また、合計5基の柱穴では、板材を基礎として掘形底に置かれていたもののが存在した。材の残っているものを、樹種同定した結果、SP1117・SP1120ではコウヤマキ、SP

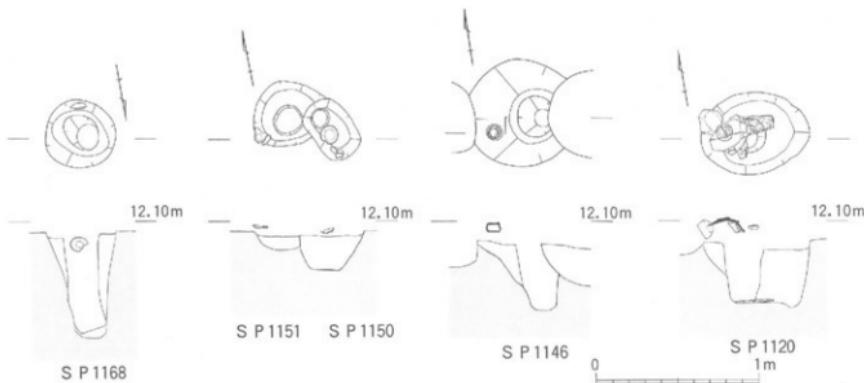


fig.90 SB101柱穴遺物出土状況

1122・S P 1176ではクリ、S P 1093ではモミ属の板材が使用されていた。

また、S P 1154では柱材が残っており、樹種同定の結果、コナラ属コナラ節であることが判明している。

S B102 S B102は東西2間以上、南北6間の建物である。東側は調査区外に延びる可能性がある。南北軸の方向はN20°Eである。建物規模は東西5.0m以上、南北13.9mで、柱芯間の距離は東西方向で2.1~2.3m、南北方向で2.1~2.4m。柱穴掘形の直径は0.3~0.6m、

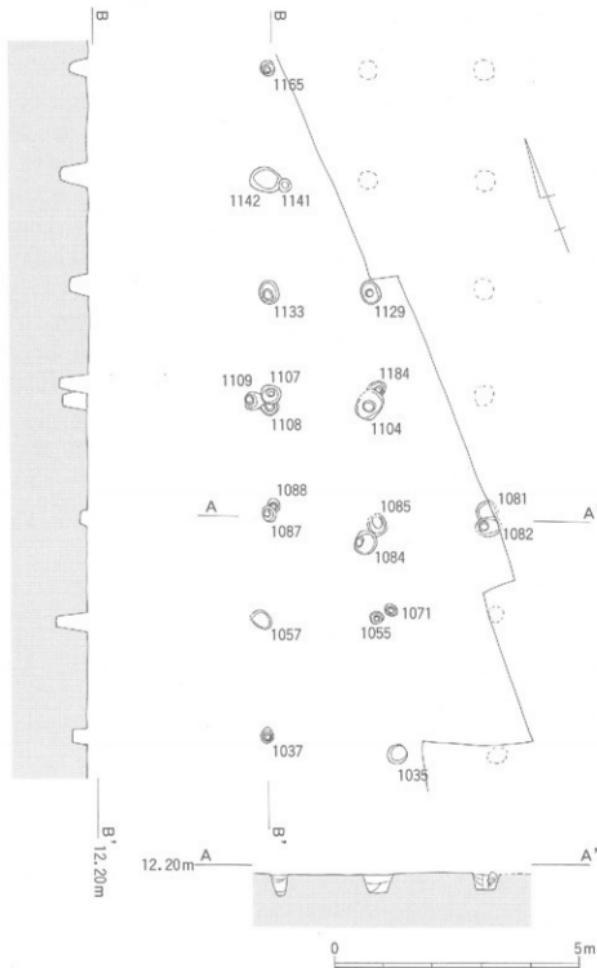


fig.91
S B102

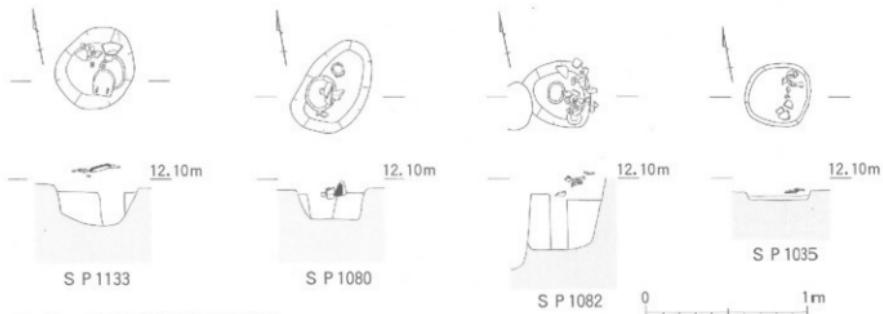


fig.92 S B102柱穴遺物出土状況

深さ30~60cmで、柱の痕跡は直径0.15m程度のものが多い。また、切り合いのある柱穴が数箇所見られるが、他の掘立柱建物の柱穴とは繋がらないため、この建物の柱を改修したものと考えられる。

また、最も南の梁方向柱列は他のものと比して、その深さが浅いため、軒または縁の可能性がある。

柱穴には、S B101と同様、完形やそれに近い形の土器が入れられていたものが数基存在した。SP 1133では、須恵器碗と土師器碗がそれぞれ1個と須恵質の風字硯1個、銅製の鉗（こはぜ）1個が柱穴上から出土している。風字硯は、伏せた状態で出土した。SP 1082では須恵器碗2個、土師器碗2個、土師器皿2枚、須恵器耳皿1枚、灰釉陶器碗1個が掘形上層より出土している。SP 1035では、須恵器碗の数個体分が掘形上層より出土している。これらの遺物の出土状況はS B101と同様、柱穴の掘形上層のものと、柱痕跡の上から出土しているものがある。SP 1082・SP 1035は前者にあたり、SP 1133は後者にあたる。

また、SP 1142では、板材を礎盤として掘形底に置かれていた。この板材は、樹種同定した結果、クリであることが判明している。

また、SP 1057・SP 1084では柱材が残っており、樹種同定の結果、SP 1057ではツブラジイが、SP 1084ではマツ属複雜管束亞属が使用されている。

S B103 S B103は東西4間、南北5間の建物である。南北軸の方向はN20°Eである。建物規模は東西11.2m以上、南北11.5mで、柱芯間の距離は東西方向で2.0~2.5m、南北方向で2.2~2.3m。柱穴掘形の直径は0.3~0.6m、深さ0.3~0.5mで、柱の痕跡は直径0.15m程度のものが多い。また、切り合いのある柱穴が数箇所見られるが、他の掘立柱建物の柱穴とは繋がらないため、この建物の柱を改修したものと考えられる。

建物の中には、北から3列目の梁行柱穴列に中間の柱穴がない箇所があり、この部分は土間にあたる可能性がある。

また、柱穴間の半間の位置に小型の柱穴が存在する箇所がある。この柱穴は、他の柱穴



fig.93 S B 103および掘立柱建物に伴う柱穴

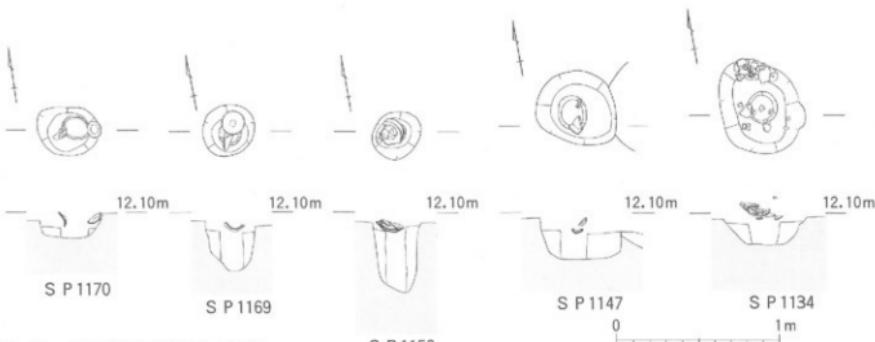


fig.94 S B 103柱穴遺物出土状況

に比して深さも浅いことから、床を支える束の可能性がある。

柱穴には、S B 101やS B 102と同様、完形やそれに近い形の土器が入れられていたものが数基存在した。S P 1134では、土師器の鉢とその内面に付着した銭種不明の銭貨と、碁石と考えられる黒色の石が掘形の上層から出土している。S P 1111からは、完形の土師器の椀1個と小皿2枚の他に須恵器の碗片と白磁ならびに越州窯製の青磁碗が掘形上層より出土している。S P 1152では、土師器の椀2個と皿1枚を重ね、その上に土師器の皿を伏せた状態で柱痕の上層より出土している。S P 1169では、須恵器の椀2個が柱痕上層より出土している。S P 1170では、土師器の椀と皿が各1個、掘形上層から出土している。これらの遺物の出土状況は他の建物同様、柱穴の掘形上層のものと、柱痕跡の上から出土しているものがあり、S P 1111・S P 1134・S P 1170は前者、S P 1152・S P 1169は後者にある。

また、S P 1064・S P 1069では、板材を礎盤として掘形底に置かれていたものが存在した。材の残っているものを、樹種同定した結果、S P 1064ではカヤ、S P 1069ではマツ属複維管束亞属の板材が使用されていた。

また、S P 1061では柱材が残っており、樹種同定の結果、マツ属複維管束亞属であることが判明している。このS B 103は柱穴の切り合いから、S B 101とS B 102を廃絶した後、その2棟

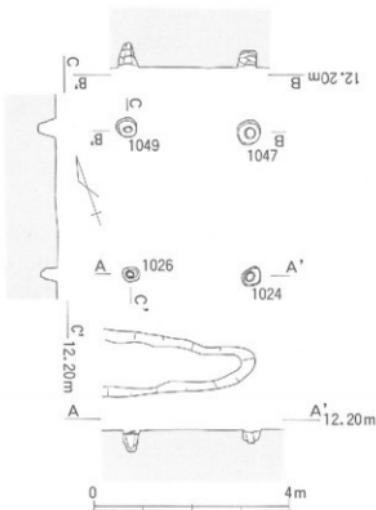


fig.95 S B 104

分の規模で、建て直したものと考えられる。

S B104 S B104はS B103の南に接して配置されている東西1間、南北1間の建物である。南北軸の方向はN 20° Eである。建物規模は東西2.8m、南北3.1mである。柱穴掘形の直径は0.3~0.45m、深さ0.3~0.4mで、柱の痕跡は直径0.15mである。この建物は東の柱列が、S B103の東の柱列と直線で並び、S B103との間隔も1m以下と非常に接近していること、また、その南では建物群を区画する溝S D140に接していることなどから、S B103に付属する構造物の可能性もある。

S P1024とS P1026には柱材が残っており、樹種同定の結果両者とも、マツ属複雜管束亜属である。

S B105 S B105は最も南に配置されている建物である。東西2間以上、南北2間の建物で、東側は調査区外に延びる可能性がある。南北軸の方向はN 20° Eである。建物規模は東西4.8m以上、南北4.6mで、柱芯間の距離は東西方向で2.3~2.4m、南北方向で1.9~2.5m。柱穴掘形の直径は0.3~0.4m、深さ0.4~0.5mで、柱の痕跡は直径0.15m程度である。

S P1017・S P1180では柱材が残っており、樹種同定の結果、S P1017ではツブライギイが、S P1180ではマツ属複雜管束亜属が使用されている。

S B106 S B106はS B103・S B104の東側で、

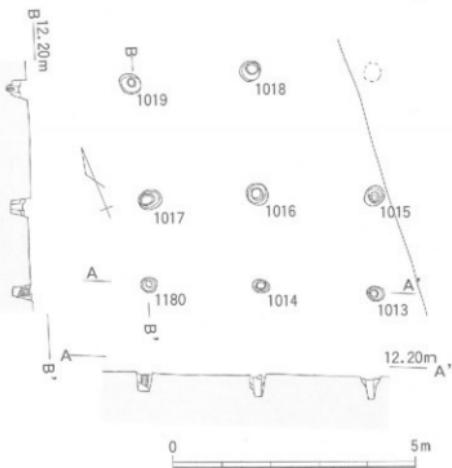


fig.96 S B105

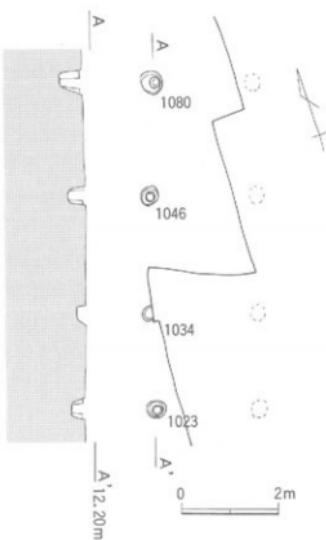


fig.97 S B106

柱穴列が1列確認されたのみのものである。そのため、堀などの可能性もあるが、柱穴も他の建物と同規模であり、遺物の多く出土したものもあることから、掘立柱建物とした。建物とすると東西1間以上、南北3間の建物である。南北軸の方向はN 20° Eである。建物規模は南北6.9mで、柱芯間の距離は南北方向で2.0~2.3m。柱穴掘形の直径は0.3~0.4m、深さ0.2~0.4mで、柱の痕跡は直径0.15m程度である。

S P 1080から、土師器の椀と須恵器の壺が、掘形の上層から出土している。

ii) ピット

S B 101ないしはS B 103の北西コーナー付近で、土器が多く入った5基の柱穴（S P 1158・S P 1159・S P 1160・S P 1162・S P 1164）が存在した（fig. 93）。これらの柱穴は、建物としてまとまらなかつたが、柱の痕跡も確認できることから、上記のいずれかの建物に付随する柱穴と考えられる。

S P 1158 S P 1158は直径0.48m、深さ0.2m、柱痕の直径0.2mの柱穴である。掘形上層で、柱痕を囲むように、土師器椀4個、土師器皿1枚と灰釉陶器壺の破片が出土している。

S P 1159 S P 1159は直径0.38m、深さ0.18mの柱穴である。掘形上層で、須恵器椀2個、須恵器壺2個、土師器椀1個、土師器壺1枚、土師器皿2枚が出土している。

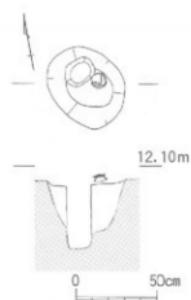


fig.98 S B 106柱穴 (S P 1080)
遺物出土状況

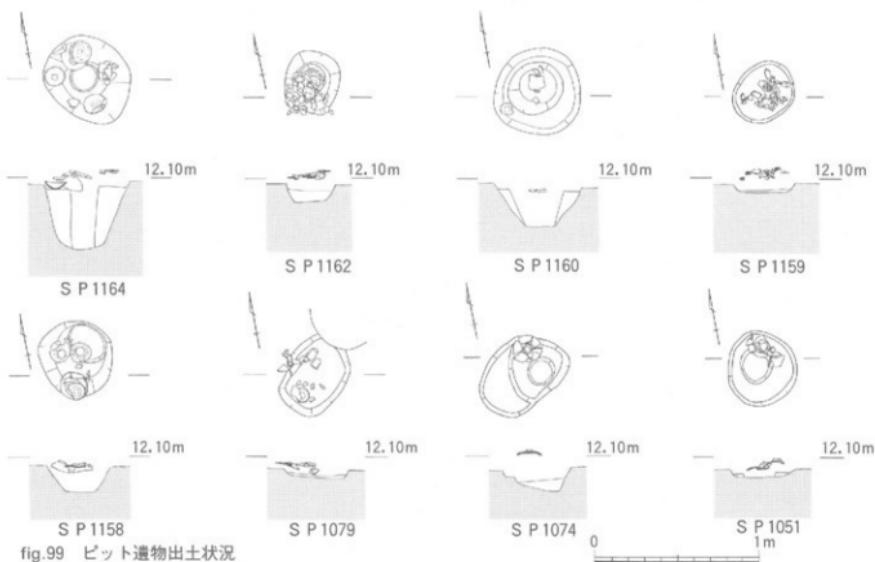


fig.99 ピット遺物出土状況

S P 1160 S P 1160は直径0.52m、深さ0.25m、柱痕の直径0.16mの柱穴である。掘形上層と柱痕上層から、須恵器壺1個、土師器皿1枚と黒色土器椀1個が出土している。

S P 1162 S P 1162は直径0.40m、深さ0.20m、柱痕の直径0.15mの柱穴である。柱痕の上から、須恵器壺2個、土師器椀1個が出土している。

S P 1164 S P 1164は直径0.52m、深さ0.49m、柱痕の直径0.15mの柱穴である。掘形上層で、柱痕を囲むように、土師器椀3個、土師器皿1枚、土師器の脚付皿2枚が出土している。

上記の5基の柱穴以外に、建物としてまとまらなかったが、完形に近い土器が掘形に埋められていた柱穴が数基存在した。

S P 1051 S P 1051は直径0.42m、深さ0.14m、柱痕の直径0.16mの柱穴である。掘形上層で、柱痕を囲むように、須恵器壺1個、土師器椀1個が出土している。

S P 1074 S P 1074は直径0.40m、深さ0.40m、柱痕の直径0.15mの柱穴である。掘形上層で、柱痕を添えるように、土師器椀1個が出土している。

S P 1079 S P 1079は直径0.45m、深さ0.15mの柱穴である。柱痕は確認できなかった。掘形上層で、土師器椀2個以上の破片が出土している。

S K 104 S K 104はS B 103の西側柱列上に存在する土坑である。平面の形状は、長径1.55m、短径0.85m、深さ0.32mの楕円形で、断面は緩やかなU字形を呈す。埋土の上層からは、土師器椀3個、土師器皿1枚、土師器脚付皿2枚が出土している。土坑の底では、柱穴が存在し、上記の土器類もその多くが柱穴の位置の上から出土したことから、柱を建て替える際に柱を抜くために掘られた土坑の可能性がある。よって、土坑底に見られた柱穴はS B 103に伴う柱穴の可能性がある。

iii) 建物北方の溝

S D 140 S D 140は建物群を囲む溝のうち、南側を区切る東西方向の溝である。幅1.4m、深さ0.18mを測る。断面の形状は緩やかなU字形を呈する。調査区西側で、S D 155と繋がるものと考えられる。埋土は暗灰色疊混じりシルトで炭が混じる。溝内の埋土より、須恵器壺・甕・椀と須恵質の瓦片が出土している。

S D 155 S D 155は建物群を囲む溝のうち、西側を区切る南北方向の溝である。幅1.3m、深さ0.10mを測る。底はほぼ平らである。埋土は灰色疊混じりシルトである。S D 156・S D 159と繋がっている。出土遺物は、須恵器、土師器の細片のみである。

S D 158 S D 158は建物群を囲む溝のうち、北側を区切る東西方向の溝である。幅1.2m、深さ

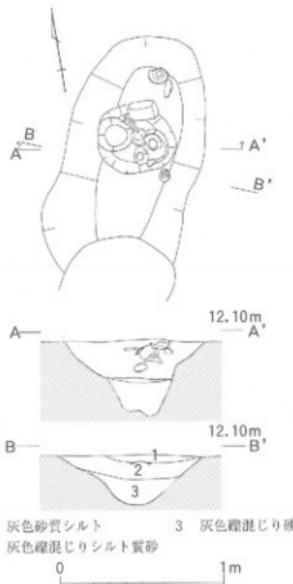


fig.100 S K 104

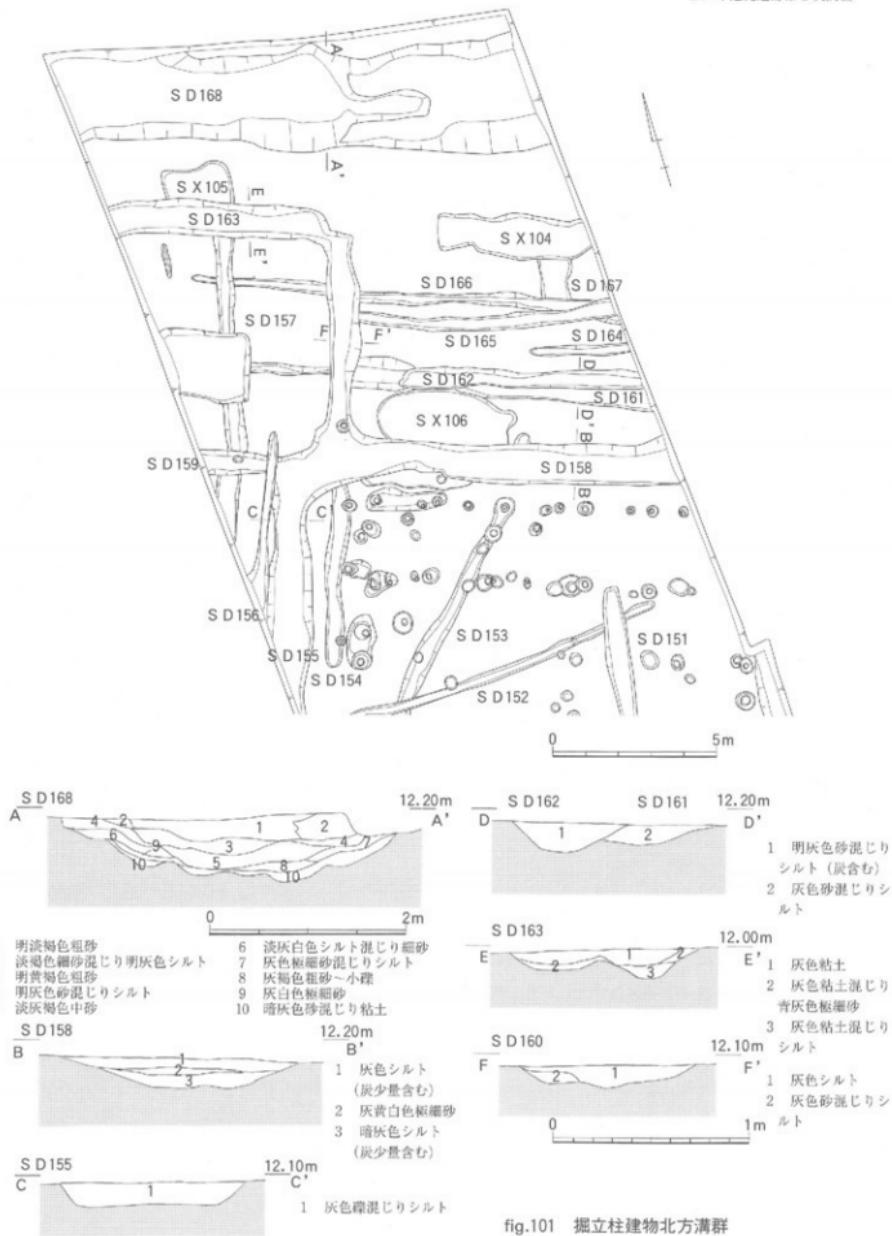


fig.101 掘立柱建物北方溝群

0.17mを測る。断面の形状は緩やかなW字形を呈し、掘り直されている可能性がある。埋土は灰色シルトが中心で、炭が若干混じる。須恵器碗・土師器碗・壺・皿・小壺などが出上している。

S D 159 S D 159はS D 155に繋がる東西方向の溝で、断面は2段掘りとなっている。幅0.7mで、深さは深い部分で0.20m、浅い部分で0.12mを測る。土師器碗などが出土している。

S D 160 S D 160はS D 158に繋がる南北方向の溝で、断面は2段掘りとなっている。幅0.9mで、深さは深い部分で0.15m、浅い部分で0.10mを測る。土師器碗などが出土している。

S D 163 S D 163はS D 160に繋がる東西方向の溝で、断面の形状は緩やかなW字形を呈す。幅0.9mで、深さは深い部分で0.23m、浅い部分で0.06mを測る。須恵器碗・土師器碗などが出上している。

S X 104 S X 104はS D 163の東側の延長上にある東西方向の溝状の落ち込みである。上部は削平されているようで、深さ0.09cmと浅い。しかし、その方向や埋土の状況から、上記の溝と同様のものと考えられる。

以上の7条の溝は掘立柱建物群を囲む溝とそれに繋がる溝である。それらは、方向も同様で、掘り直されているものが多いことや、埋土に炭を混じるなど、共通する部分が多い。このことから、建物群の外側で何らかの区画を示す溝と考えられる。

S D 161他 S D 161・S D 162・S D 164・S D 165・S D 166は建物群北方で東西方向に平行する溝である。すべてS D 163に切られていることから、S D 163以前の溝である。S D 161とS D 162は重なっており、S D 165とS D 166はほぼ同位置である。この両者の間隔は約2.7mで、1間半の間隔である。建物の方向とも同じであることから、S D 163が造られる以前にあった、建物北側を東西通る通路の側溝の可能性もある。

S D 168 S D 168は調査区の北端で東から西方向に流れる溝である。平成4年度調査の第1次調査の際見つかっているS D 401⁽²⁾と同じ遺構と考えられる。幅3.4m、深さ0.7mと他の溝よりも規模が大きい。埋土は中砂～粗砂礫が中心で、ある程度の流量があったようである。また、遺物も完形品が多数含まれている。この溝の北側にある現況水田の畔は、現在地表面で見られる明石郡条里の1町界であることから、敷地を大きく区画する溝と考えられる。

iv) 調査区南半の溝群

5区以南の調査区南半部では、東西方向に平行する約40条の溝が検出された。溝は掘立柱建物群を区画する溝S D 140より南に、ほぼ1.5m間隔で並んでいる。これらの溝の方向には2種類あり、N62°Wの一群（A群）とN70°Wの一群（B群）が存在する。A群の溝は南側に集中しており、幅約0.20m、深さ0.10m前後と細く、浅い。B群の溝は幅0.40～0.60m、深さ0.20m前後とA群に比して広く深い。A群はB群に切られていることから、A群がB群に先行すると考えられる。また、B群の方向は建物群の方向と一致し、現況の水田（条里）方向とも一致する。これらの溝はその形状より、建物群の南側に造られた耕作地の鈍溝と考えられる。但し、B群の溝の内、S D 133は他の溝より深く、深さ0.45m、幅0.90mと規模が大きいことから、鈍溝とは考えがたく、水路もしくは、耕作区域と居住区域を区切る溝と考えられる。現況の水田遺物はほとんどが、須恵器・土師器の細片であるが、S D 127とS D 133から土師器皿の完形品が出土している。

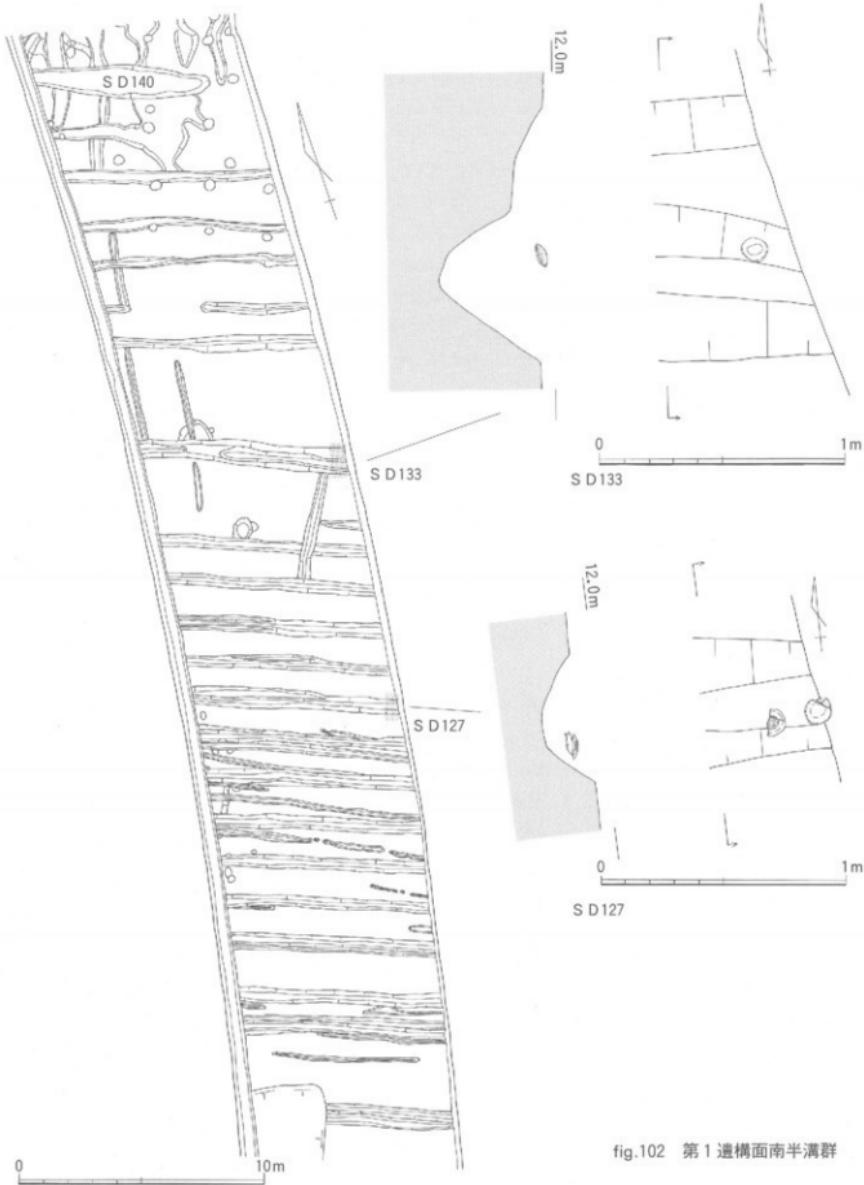


fig.102 第1遺構面南半溝群

(2) 遺物

i) 土器類の分類

今回の調査では、多種類の平安時代後期の土器類が出土している。以下、記述するにあたって、下記の通り分類し、記述を進める。

須恵器

- 椀A** 底部が円盤状の平高台のものを椀Aとする。ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、回転糸切りである。体部は内湾し、口縁端部は若干外反ぎみに終るものが多い。底部内面の見込みの窪みは顕著である。法量は口径14.0cm以上、器高5.0~6.0cmの大型品と、口径12.0~13.9cm、器高5.0cm前後の中型品、口径12.0cm未満、器高4.0~5.0cmの小型品に分かれるが、ここでは、口縁径12.0cm以上のもの中・大型品を椀Aaとし、12.0cm未満の小型品を椀Abとする。また、体部外面下半に沈線を廻らすものには1を付し、沈線を廻らさないものは2を付す。例えば、椀Aのうち、大型で沈線を施すものを、椀Aa1とする。
- 椀B** 底部が貼り付け輪高台のものを椀B類とする。ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、全て回転糸切りで、ロクロより切り離した後輪高台を貼り付ける。体部はやや内湾し、口縁端部は若干外反ぎみに終るものが多い。底部内面の見込みは窪まない。椀Aと同様、体部外面下半に沈線を廻らすものには1を付し、沈線を廻らさないものは2を付す。法量は口径14.0cm以上に限られる。
- 坏** 平らな底部に、内湾ぎみに外方に立ち上がる。ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、全て回転糸切りである。法量は口径11.0cm前後、器高3.0cm前後である。古代の坏Aの系譜を引くものであり、坏としての最後の段階にあたる。この段階以降はより小型化し、小皿と変化していく器種である。
- 盤** 平らな底部から、丸みをもって立ち上がり、体部から口縁部は直立する。口縁端部は面を持ち、若干窪む。ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、静止糸切りである。器皿は他の供膳具に比して厚い。法量は口径18.0cm程度、器高4.5cm程度である。
- 耳皿** 底径5.0cm、高さ1.0cm程度の中実の高台に、口径9.0cm程度の皿部をロクロ成形する。回転糸切り技法によって切り離した後、皿部の両端を押さえて立ち上げる。
- 鉢A** 片口部を有するものは出土していないが、鉢は全て片口鉢と思われる。口縁部の形態によって2種類に分類する。鉢Aは、ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、回転糸切りである。平らな底部から、丸みをもって立ち上がり、口縁端部下で内側に緩やかに屈曲した後、口縁端部を外方に短く折り返す。口縁端部上面はナデでくぼみを持つ。
- 鉢B** ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、回転糸切りである。平らな底部から、やや丸みをもって立ち上がり、口縁端部下で「く」の字形に内側に屈曲した後、口縁端部は外反する。口縁端部上面はナデで若干くぼみを持つものが多い。鉢Aが、鉢Bより古い形態と考えられる。
- 壺A** 平らな底部に直線的に立ち上がる体部を持つ。今回の調査では、底部しか出土していないが、肩部に突帯を廻らし、耳を持つ双耳壺と考えられる。ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、静止糸切りである。

須恵器

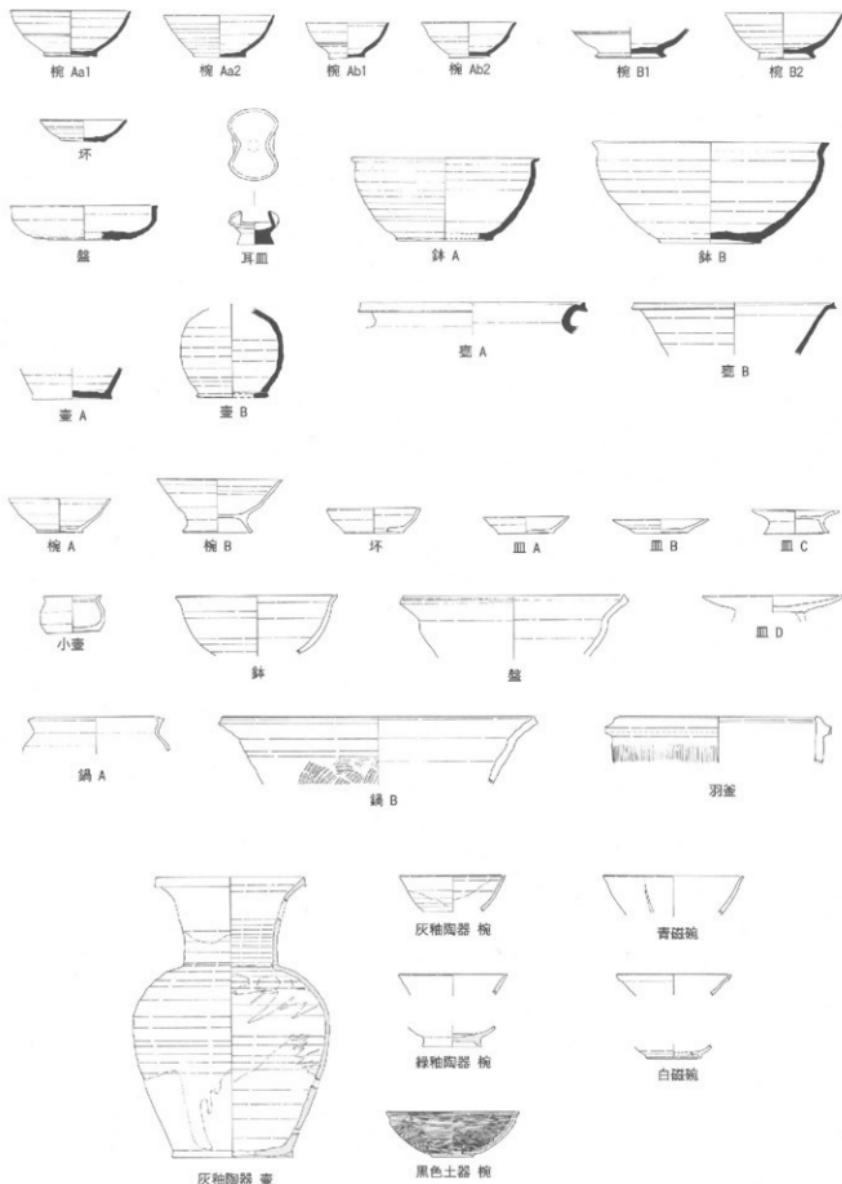


fig.103 平安時代後期の土器分類

- 壺B** 平らな底部に丸みを持った体部を持つ。壺Aに比して器壁は薄い。頸部は細くすぼまる。ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、静止糸切りである。
- 甕A** 甕は口縁の形状で分類する。甕Aは、体部から、短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は面をもち、上方につまみ上げる。
- 甕B** 体部から、外上方に直線的に広がる長い口縁部を持つものを、甕Bとする。口縁端部は面をもち、上方につまみ上げる。

土師器

- 椀A** 須恵器の椀A同様、底部が円盤状の平高台のものを椀Aとする。ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、全て回転糸切りである。体部は内湾し、口縁端部は若干外反ぎみに終るものと、直線的に終るものがある。底部内面の見込みの窪みは顯著である。須恵器の椀Aよりも体部外面のナデによる凹凸が強い。法量は口径12.0cm前後、器高4.5cm前後のものがほとんどである。
- 椀B** やや高く、外方に聞く貼り付け輪高台のものを椀Bとする。ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、全て回転糸切りである。体部はやや内湾し、口縁端部は直線的に終る。底部内面の見込みはやや窪む。法量は口径14.0cm以上に限られる。
- 杯** 口径10.0cm以上で、器高2.5cm以上のものを杯とする。平らな底部に、内湾ぎみに外方にたちあがる。ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、全て回転糸切りである。
- 皿A** 器高2.5cm以下のものを皿とする。そのうち、平らな底部に、体部が外方に立ち上がるものを皿Aとする。ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、全て回転糸切りである。
- 皿B** 器高が1.5cm前後で、平らな底部から、体部は直線的に大きく外方に広がるもの皿Bとする。
- 皿C** 高く、外方に聞く脚部を持つものを皿Cとする。ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、全て回転糸切りである。皿部は、平らな底部から直線的に大きく外方に聞く体部を持つ。
- 皿D** 口径17.0cm前後で、浅い皿部に、脚部を持つものを皿Dとする。ロクロによって成形され、底部の切り離し技法は、回転糸切りである。
- 小壺** 口径7.0cm、器高4.5cm程度の小型の壺である。平らな底部に丸みを持った体部で、口縁部は短く外反する。
- 鉢** 丸みを持った体部で口縁部は外反し、丸く收める。
- 盤** 丸みを持った体部で口縁部下で「く」の字に屈曲して外反する。口縁端部は面を持ち、若干上方に摘み上げる。器壁はやや厚い。
- 鍋A** 丸みを持った体部から、ややすぼった頸部をもち、屈曲して口縁部は直線的に外方に聞く。口縁部は肥厚し、端部に面をもつ。端面をナデて、若干上方につまみ上げる。体部外面はタタキの跡が残るものもある。
- 鍋B** 体部は、直線的に外方に聞く、口縁部下で、一旦折れ曲がって聞く。端部に面を持ち、若干上方につまみ上げる。体部外面は平行タタキの跡が残る。
- 羽釜** 体部から口縁部まで直線的立ち上がる。口縁部直下に、太く短い鍔を貼り付ける。体部

外面は縱方向のハケメで調整する。胎土は他の土師器と異なり赤褐色を呈す。搬入品の可能性がある。

灰釉陶器

- 椀** 丸みを持った体部下半から上半は直線的に開く、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は尖り気味に收める。ツケカケによる淡灰白色の釉が内外面ともに体部上半に薄くかかる。
- 盃** 平らな底部の外縁部に退化した高台を貼り付ける。体部は直線的にやや開いて立ち上がる。肩部は丸みを持つ。口縁部は頸部から垂直に立ち上がり、上方に向かって外反して開く。口縁端部は肥厚し、外面に平らな面をもつ。端部は尖りぎみに收める。淡緑色の釉が口縁部下半から体部上半にかけてハケによって塗られている。

綠釉陶器

- 椀** 素地については、硬陶のものと、軟陶のものがある。硬陶のものは口縁部の破片のみの出土で、全体の形状は明らかでない。深緑色の釉がかかる。軟陶のものは、底部の破片のみの出土で全体の形状は明らかでない。底部は、断面三角形の貼り付け輪高台で、内面見込みに凹線による囲線を廻らす。淡黄緑色の釉が薄くかかる。

黒色土器

- 椀** 内外面とも黒色のいわゆる黒色土器B類の椀である。底部は断面台形の低い輪高台を貼り付ける。体部は丸みを持ってやや開く。口縁外面下をヨコナデして口縁部を外反させる。口縁端部内面には段を有する。内外面とも横方向の細かいミガキが施されている。

輸入磁器

- 青磁碗** 丸みを持った体部に、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は尖りぎみに收める。体部外面には縱方向のヘラによる沈線が刻まれている。その上部の口縁端部は欠損しているため、明らかではないが、口縁部には輪花を施すと考えられる。釉調は淡緑色である。越州窯製と考えられる。

- 白磁碗** 口縁部と底部の破片が出土している。口縁部は薄い正縁を持ち、釉調は澄んだ白色である。底部の破片は断面三角形の輪高台を貼り付けるものである。高台の端部外側は釉が強き取られている。皿の可能性もある。

ii) 挖立柱建物出土遺物

S B101出土遺物

- S P 1120 239～242はS P 1120出土の遺物である。239は須恵器椀Bの底部の破片である。外側に踏ん張る貼り付け輪高台を持つ。240は土師器皿Aである。241は須恵器鉢Bである。口縁端部は面を持ち、ほぼ水平である。242は土師器椀Aである体部は直線的に外方に開く。内外面ともロクロナデで成形している。胎土他の土師器に比して精良である。
- S P 1146 243～245はS P 1146出土の遺物である。243は須恵器椀Ab1である。体部外面下半にヘラ状工具による段に近い沈線を廻らす。244は土師器椀Bである。245は土師器小壺である。
- S P 1155 246はS P 1155出土の土師器椀Aである。
- S P 1150 247～249はS P 1150出土の遺物である。247は土師器椀A、248・249は土師器皿Aである。
- S P 1157 250・251はS P 1157出土の遺物である。250は土師器椀Bの体部より下半部の破片、251

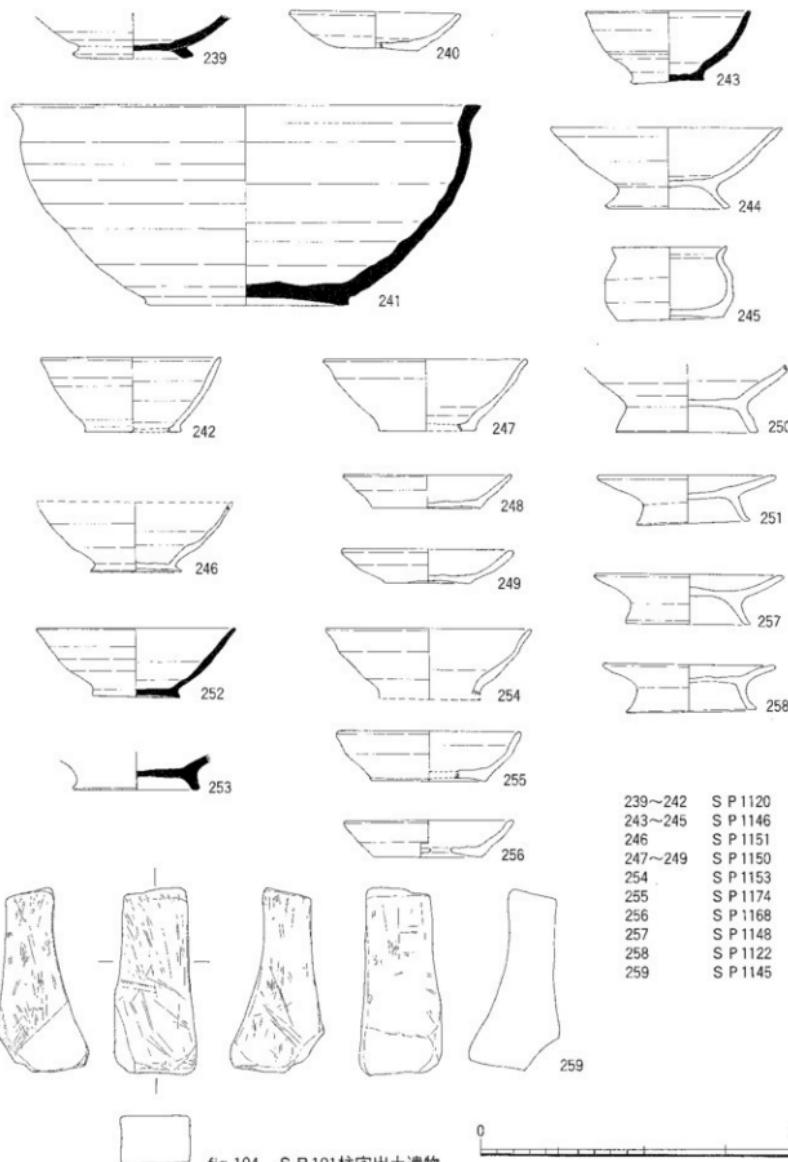


fig.104 S B 101柱穴出土遺物

は土師器皿Cである。

- S P 1112 252はS P 1112出土の須恵器椀Aa2である。
- S P 1069 253はS P 1069出土の須恵器椀Bの底部である。
- S P 1153 254はS P 1153出土の土師器椀Aである。
- S P 1174 255はS P 1174出土の土師器壺である。
- S P 1168 256はS P 1168出土の土師器皿Aである。体部は直線的に外上方に開き、底部中央に穿孔がある。
- 257はS P 1148、258はS P 1122出土の土師器皿Cである。
- S P 1145 259はS P 1145出土の凝灰岩製の砥石である。一部欠損している。断面は長方形で、下の面はよく使用され窪んでいる。

S B102出土遺物

- S P 1082 260~267はS P 1082出土の上器である。260は須恵器椀の体部より上部の破片である。その形状から椀Aa2と考えられる。261は須恵器椀B2である。261・263は土師器椀Aである。264・265は土師器皿Cである。264は体部が外反して聞くタイプで、265は体部が内湾して立ち上がり、やや器高の高いタイプである。266は東海系の灰釉陶器椀である。体部下半は内湾し、上半は直線的に立ち上がる。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は尖り気味に收める。体部上半に、ツケガケによる淡灰色の釉が薄く掛かる。狼投窯編年の百代寺窯式⁽³⁾のものと考えられる。267は、須恵器耳皿である。ロクロ成形し、回転糸切り技法で切り離した後、両部の両端を押さえてたちあげる。見込み部は若干窪む。神出古窯址群昭和59年度調査の第3トレンチピット内⁽⁴⁾より、類似品が出土している。
- S P 1084 268~270はS P 1084出土の上器である。268は須恵器椀Aa2である。269は須恵器椀Bの底部である。やや高い輪高台が付く。270は土師器皿Aである。
- S P 1141 271・272はS P 1141出土の土器である。271は須恵器椀、272は土師器皿Aである。272は、口径11.5cm、器高2.4cmとやや大きめの皿である。
- S P 1035 273はS P 1035出土、274はS P 1081出土の須恵器椀である。273は体部より上部の破片であるが、その形状から椀Aa2と考えられる。
- S P 1083 275はS P 1083出土の土師器椀Aである。体部は直線的に外上方に聞く。
- S P 1142 276・277はS P 1142出土の遺物である。276は土師器盤である。体部は内湾ぎみに立ちあがり、口縁部下で「く」の字に屈曲して直線的に聞く。口縁端部は2段の強いナデを施し、上方につまみ上げる。体部内外面はヨコナデ調整である。277は土師器皿Aである。内面にスヌが付着する。
- S P 1133 278・279はS P 1133出土の遺物である。278は須恵質の風字硯である。全面ヘラケズリで成形されている。上面は緩やかに湾曲し、先端部は尖り気味である。陸と海の境は明確でない。陳側の下面に三角形の脚を貼り付け、陸の傾斜をつけている。上面はよく使用されている。
- 279は長さ2.0cm、幅1.1cm、厚さ0.5cmの双孔の青銅製品である。白色がかかった青緑色をしており、鉛の多い青銅と思われる。外形1.1cm、内径0.6cmの算盤玉形のリングを2個接したものである。両リングとも斜面には1.0~1.5mm間隔で、刻みが施されている。その

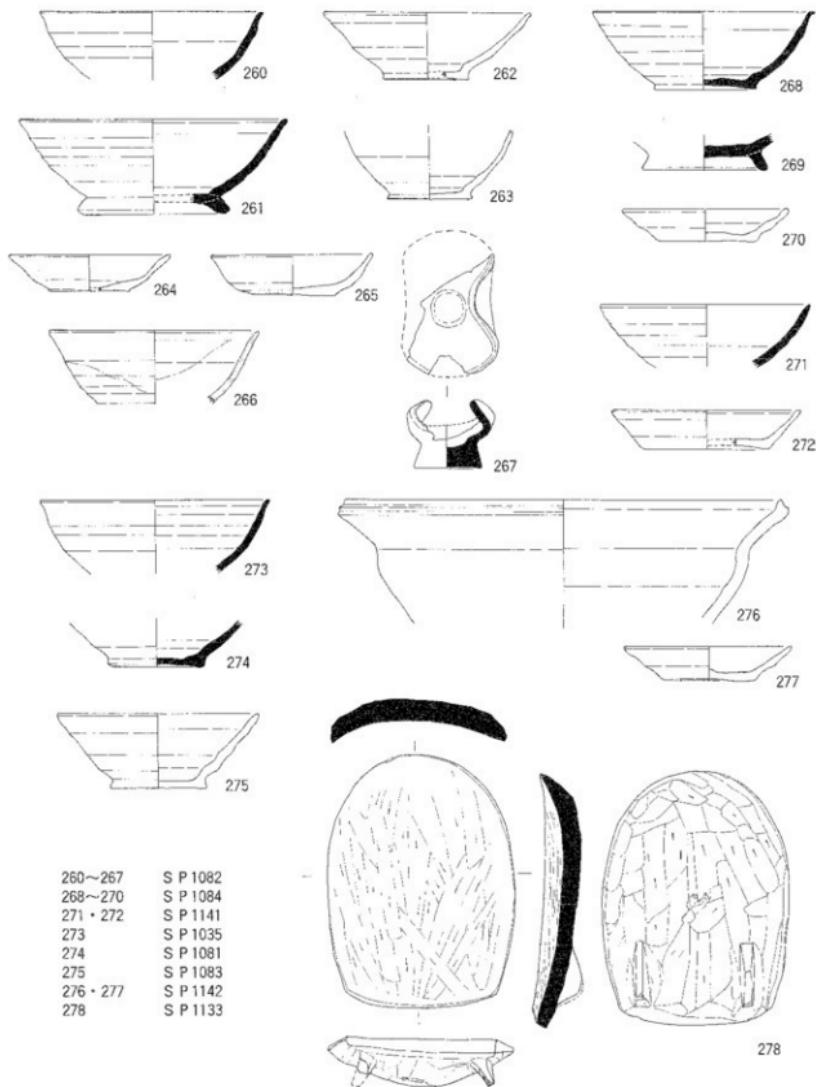


fig.105 S B 102柱穴出土遺物

形状より、紐を通して止める鉢(こはせ)と考えられる⁽⁵⁾。

S B103出土遺物

- S P 1111 280~286はS P 1111出土の土器である。280は須恵器碗である。体部下半に沈線を廻らす。281は須恵器碗B 2である。282は土師器碗Bである。体部は直線的に外上方に開く。283・284は土師器皿Aである。283は口縁端部が内湾してたちあがるが、284の口縁端部は外反し、小さな玉縁状を呈す。内面の一部にスヌが付着する。285は青磁の碗である。丸みをもった体部に、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は尖りぎみに收める。体部外面には縱方向のヘラによる沈線が刻まれている。その上部の口縁端部は欠損しているため、明らかではないが、口縁部に輪花を施すと考えられる。釉調は濃緑色である。越州窯製と考えられる。286は白磁の碗である。口縁部は折り返した薄い玉縁を持つ。釉調は澄んだ白色を呈する。山本信夫氏による分類のX I類⁽⁶⁾にあたる。
- S P 1152 287~290はS P 1152出土の土器である。287は土師器碗Bで、体部は直線的に外上方に開く。高台は高く、その邊部は外方に踏ん張る。288は土師器碗Aである。口径15.7cm、器高5.3cmと土師器碗Aとしては唯一大型品である。289・290は、土師器皿Aである。290は器高1.6cmと比較的浅いタイプである。
- S P 1169 291・292はS P 1169出土の土器である。291は須恵器碗Aa2、292は須恵器碗の上半部であるが、その形状より碗Bと考えられる。
- S P 1186 293~295はS P 1186出土の土器である。293は土師器碗A、294は土師器碗Bである。294の底部外面には、ヘラ記号の「×」が書かれている。295は黒色土器碗である。内外面ともに黒色の黒色土器B類にあたる。体部は緩やかに内湾してたちあがり、口縁部下外面を強くナデて、口縁部が若干外反する。口縁端部内面に若干段を巡らす。内外面ともに横方向のヘラミガキが施されている。
- 296はS P 1026出土の須恵器碗Aa2、297はS P 1070出土の須恵器碗B 2である。
- S P 1147 298はS P 1147出土の須恵器盤である。平高台の側面から体部はたちあがり、口縁端部は若干肥厚して水平な面を持つ。端部の面は若干空む。他に類例は見当たらない器形である。
- S P 1170 299・300はS P 1170出土の遺物である。299は土師器碗Aで、内面全体に炭化物が付着している。300は土師器皿Aである。
- 301はS P 1121出土の土師器皿A、302はS P 1143出土の土師器皿C、303はS P 1058出土の土師器皿C、304はS P 1113出土の土師器皿Dである。302の上面にはスヌが付着している。
- S P 1134 305・306はS P 1134出土の遺物である。305は土師器鍋Aである。丸みを持った体部に、頸部から屈曲して口縁部が開く。口縁部は肥厚し、上方につまみ上げる。体部内外面はヨコナデ調整である。この体部の破片内面に付着した状態で、銭種不明の銭貨が出土している。306は淡黒色の砂岩製の石製品である。直径2.2cm、厚さ0.6cmで、断面の形状は緩やかな山形を呈す。底面はほぼ平らである。基石または双穴の駒と考えられる。

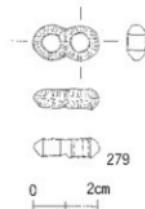


fig.106 S P 1133 (S B102)
出土鉢

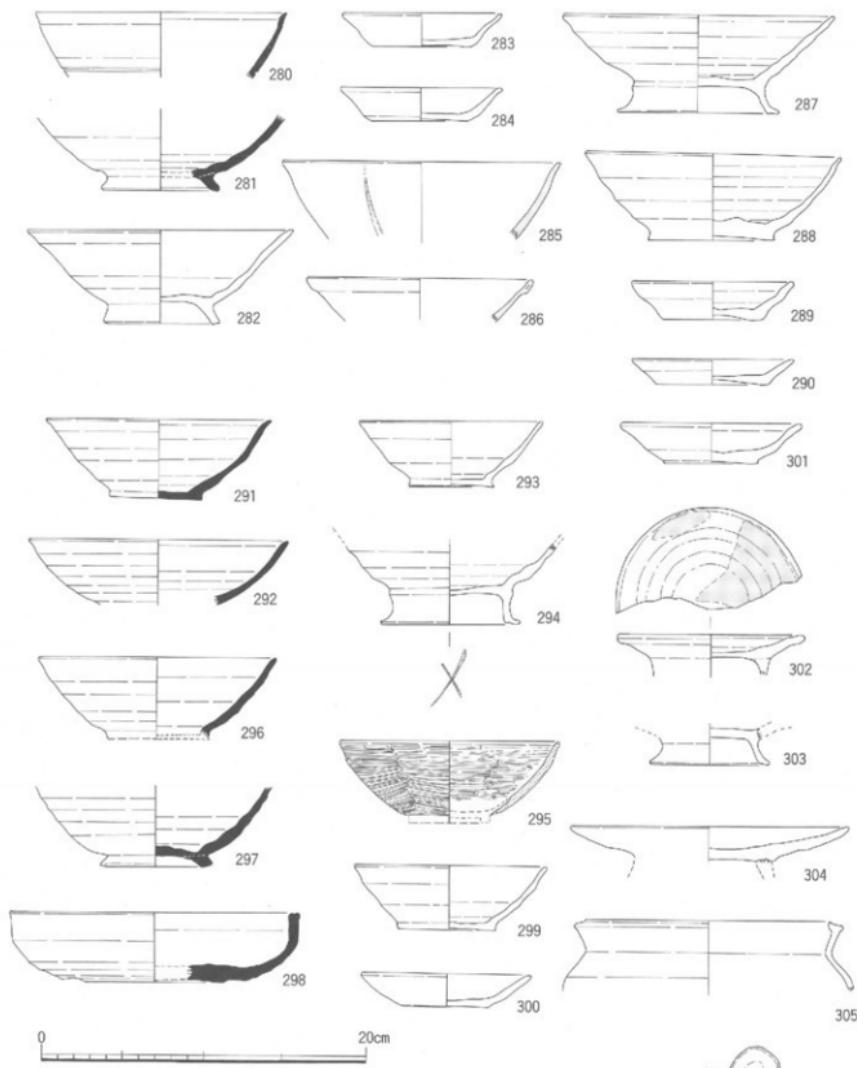
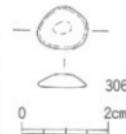


fig.107 S B 103出土遺物

280~286	S P 1111	299~300	S P 1170
287~290	S P 1152	301	S P 1121
291~292	S P 1169	302	S P 1143
293~295	S P 1086	303	S P 1058
296	S P 1026	304	S P 1113
297	S P 1070	305~306	S P 1134
298	S P 1147		



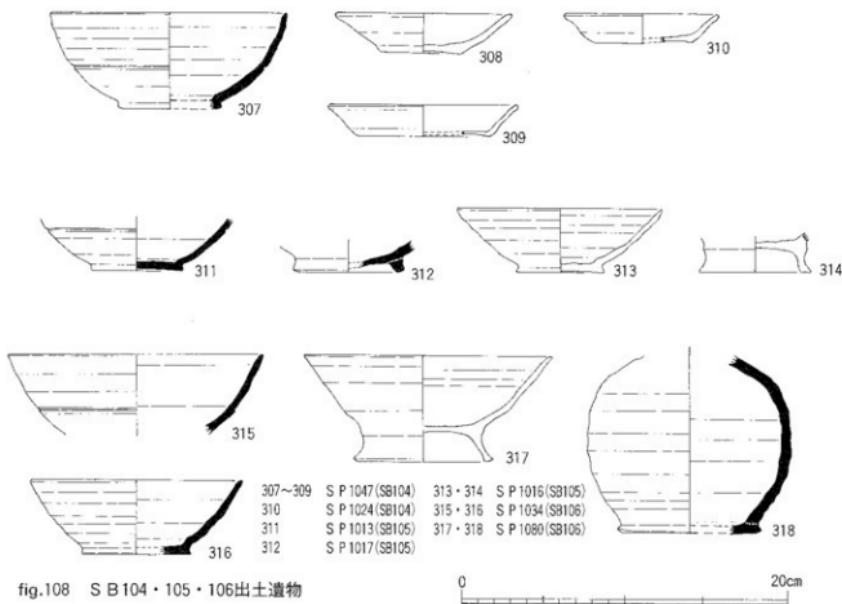


fig.108 S B 104・105・106出土遺物

S B 104出土遺物

S P 1047 307～309はS P 1047出土の土器である。307は須恵器碗Aa1、308・309は土師器皿Aである。

S P 1024 310はS P 1024出土の土師器皿Aである。

S B 105出土遺物

S P 1013 311はS P 1013出土の須恵器碗Aa1、312はS P 1017出土の須恵器碗B 2である。

S P 1016 313・314はS P 1016出土の土器である。313は土師器碗A、314は上師器皿Cである。

S B 106出土遺物

S P 1034 315・316はS P 1034出土の遺物である。315は須恵器碗Aa1、316は須恵器碗Aa2である。

S P 1180 317・318はS P 1180出土の遺物である。317は土師器碗Bで、高い輪高台をもつ。318は、壺Bである。底部は粘土の円盤を置き、その上端から体部を立ち上げる。体部は丸みをもち、頭部は細くすぼまる。体部の内外面はロクロナデの痕が顕著で、凹凸が著しい。底部の切り離しは静止糸切り技法である。

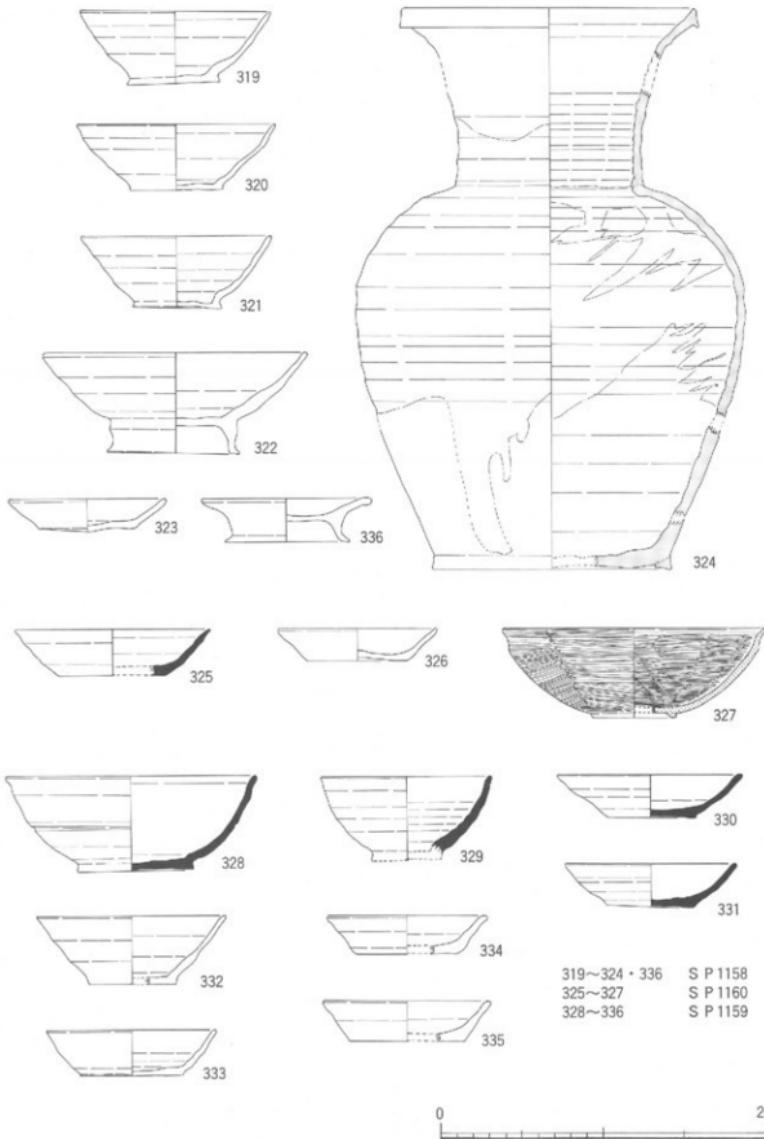


fig.109 S P 1158・1160・1159出土遺物

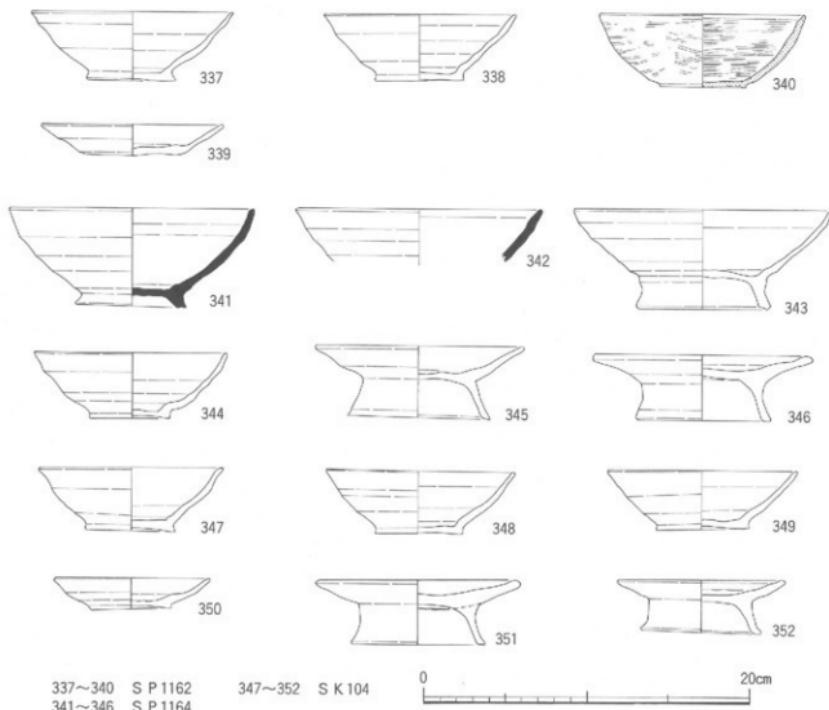


fig.110 S P 1162・1164 S K 104出土遺物

iii) ピット出土遺物

S P 1158 319～323・336はS P 1158出土の遺物である。319～320は土師器碗Aである。322は上師器碗Bである。高い輪高台をもち、高台の外面のロクロナデによる凹凸が顕著である。

323は土師器皿A、336は土師器皿Cである。324は東海系の灰釉陶器の壺である。接点のない破片数片から、図上で復元した。口径18.0cm、器高34.5cm、底径14.5cmに復元される。底部は平らで、体部との境付近に断面台形状低い高台を貼り付ける。体部下半は直線的に外上方に開く。肩部は丸みを持って頸部となる。筒状の頸部から口縁部は外反して開く。口縁端部は上下に拡張し、外側に面を持つ。内外面ともに、ロクロナデによる凹凸が顕著である。外面は頸部から体部上半にかけて、内面は口縁部から頸部にかけてと体部下半に、濃緑灰色の釉がハケで塗られている。狼投窯縚年の東山72号窯式⁽⁷⁾に類似した製品がある。

S P 1160 325～327はS P 1160出土の遺物である。325は須恵器坏、326は土師器皿Aである。327は黒色土器碗である。内外面ともに黒色の黒色土器B類にあたる。体部は緩やかに内湾し



fig.111 S P 1022・1079・1074・1051出土遺物

てたちあがり、口縁部下外面を強くナデて、口縁部が若干外反する。口縁端部内面に若干段を廻らす。底部には断面台形の低い高台を貼り付ける。内外面ともに横方向のヘラミガキが施されている。

S P 1159 328～335はS P 1159出土の遺物である。328は須恵器椀Aa1、329は須恵器椀Aa2、330・331は須恵器坏、332は土師器椀A、333は土師器坏、334・335は土師器皿Aである。

S P 1162 337～340はS P 1162出土の遺物である。337・338は土師器椀A、339は土師器皿A、340は黒色土器椀である。

S P 1164 341～346はS P 1164出土の遺物である。341は須恵器椀B 2、342は須恵器椀、343は土師器椀B、344は土師器椀A、345・346は土師器皿Cである。

S K 104 347～352はS K 104出土の土器である。S K 104は土坑であるが、造構の項で説明したように、他のピットと同様の性格であるため遺物はここで説明する。347～349は土師器の椀Aである。350は土師器の皿Aである。351・352は土師器皿Cである。

S P 1022他 353はS P 1022出土の須恵器椀B 1、354はS P 1179出土の土師器椀A、355はS P 1074出土の土師器椀Bである。356・357はS P 1051出土の遺物で、356は須恵器椀B 2、357は土師器椀Bである。

iv) 溝出土上遺物

S D 158 358～364は建物群の北側を画する溝S D 158出土の遺物である。358・359は須恵器椀Aa 1、360は須恵器椀B 2である。361は土師器椀A、362は土師器坏で、体部は直線的に外上方に開く。363は土師器皿Cである。364は土師器小壺の体部以下の破片で、S B 101出土の245と同様の形態のものと考えられる。

S D 140 365～368は建物群の南を画する溝S D 140出土の遺物である。365須恵器椀Aa1、367は須恵器壺Aである。底部の切り離しは静止系切り抜法による。内外面は丁寧なロクロナデで仕上げられ、凹凸がほとんどない。366は壺Bで、口縁部は頸部から長く直線的に開き、口縁端部付近で外方水平方向に屈曲する。口縁端部は、上下に拡張し、端部外面に面をも

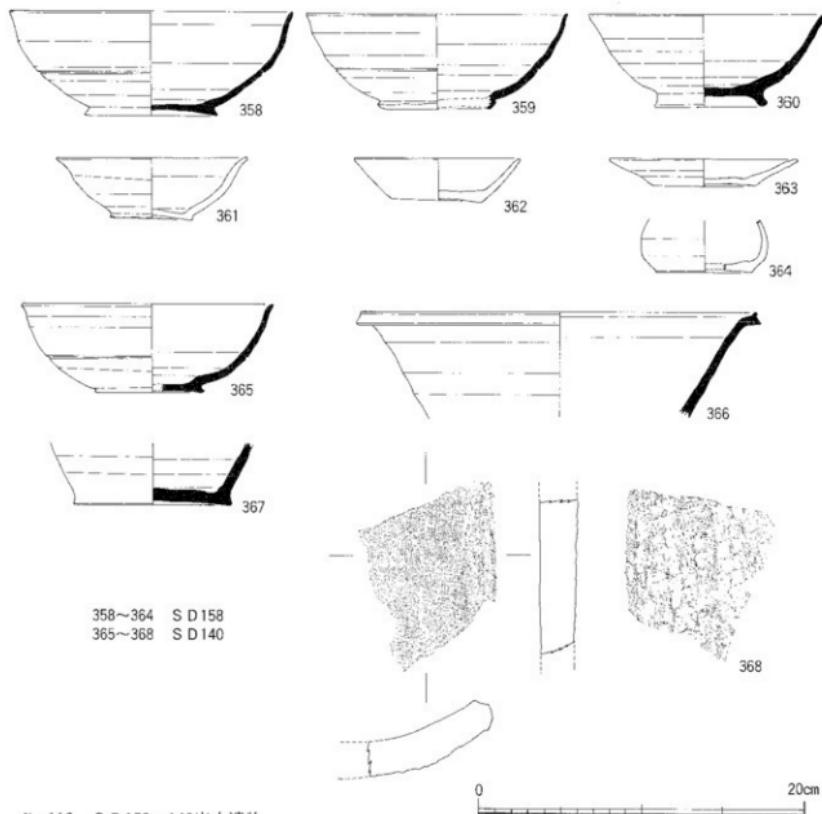


fig.112 S D 158・140出土遺物

つ。この面は端部を上下に拡張する際に強くナデて、窪んでいる。外面全体に自然釉がかかる。白水遺跡第3次調査第4トレンチ S D 01出土の甕⁽⁸⁾に後続する形態と考えられる。368は須恵質の瓦である。凹面には9条/cm×10条/cmの布目が残り、凸面には7.5mm×9.0mmの菱形の格子タタキ痕が残る。側面はヘラケズリによって面取りされている。

369～379は建物群北方溝群出土の土器である。

S D 159 372・373はS D 159出土の土師器椀Aである。

S X 104 369・378・379はS X 104出土の遺物である。369は須恵器椀Aa2、378は土師器皿Aで、口径10.8cmとやや大型のものである。口縁部の一部にスヌが付着しており、灯明皿の可能

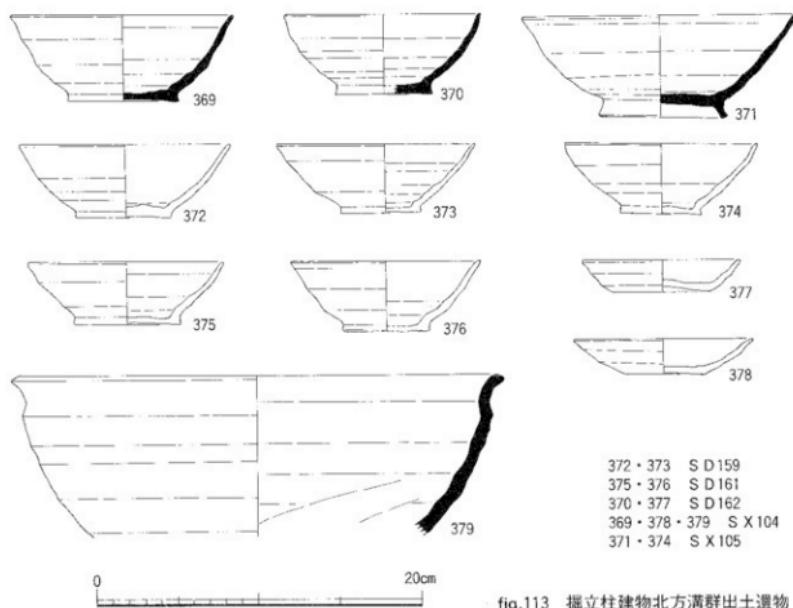


fig.113 振立柱建物北方溝群出土遺物

性がある。379は須恵器鉢Bである。口縁端部はやや丸みを帯びている。体部内面下半は、ロクロナデの上から、ナデを施している。

S X105 371・374はS D163に付随する落ち込みであるS X105から出土した土器である。371は須恵器椀B 2で、口径が17cm近い大型の椀である。374は土師器椀Aである。

S D161 375・376はS D161出土の土師器椀Aである。

S D162 370・377はS D162出土の遺物である。370は須恵器椀Aa2、377は土師器皿Aである。

S D168 380～392は調査地の北端で検出された、敷地を大きく区画すると考えられる東西方向の溝S D168から出土した遺物である。

380は須恵器椀Aa1、381・382は須恵器椀Ab2である。383～385は土師器椀Aで、384の内外面には若干ススが付着している。386・387は土師器椀Bである。体部は直線的に外上方に開き、他のものに比してやや浅い。高台は高く、端部は外側に踏ん張る。高台外面のロクロナデによる凹凸は顕著である。388～391は土師器皿Aである。390の内面見込みにはススが付着している。392は、土師器皿Cである。皿部はやや深く、高台端部は外側に踏ん張る。

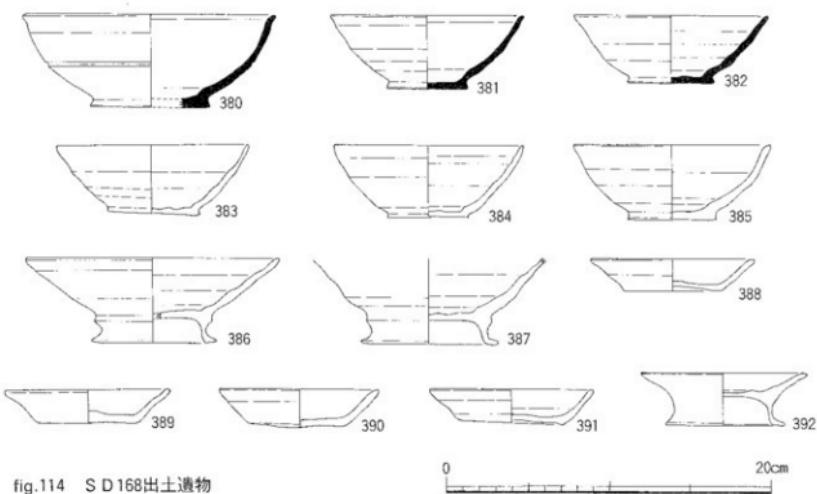


fig.114 S D 168出土遺物

この溝は、遺構の項でも述べたが、東隣の敷地で行われた今池尻遺跡第1次調査におけるS D 401と同じ溝である。この第1次調査の際には、上記の器種の他に、須恵器椀B 2と須恵器鉢Aが出土している。

393～395は調査区南半部の溝群から出土した土器である。

S D 127 393・394はS D 127出土の土師器皿Aである。394の体部は、内湾ぎみに外上方に開き、口縁端部は尖り気味に收める。

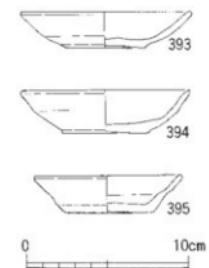
S D 133 395はS D 133出土の土師器皿Aである。

v) 灰色シルト層出土遺物

第1遺構面の上に堆積する遺物包含層は、基本層序の項では、淡灰色シルト層と灰色シルト層の2層に分層して表記したが、現地での調査の際は、同一層として遺物を取り上げている。よって以下、396～469は上記の2層を灰色シルト層出土の遺物としてまとめて記述する。

396～418は須恵器の供膳具である。

須恵器椀 376～399・402は須恵器椀Aa1である。このうち、396は沈線ではなくヘラで段を造り出している。口径は17.0cmと大型で、平高台も高い。口縁部下を強くナデて、口縁端部を外反させる。この中では、最



393・394 S D 127 395 S D 133

fig.115 調査区南半溝群
出土遺物

も古い形態である。397も体部外向の沈線は、ヘラで引いており、段に近い沈線である。平高台もしっかりとしており、古い形態を残す。

400・401は大型の須恵器椀Aa2、404～407は中型の須恵器椀A a 2である。内湾して口縁部を收めるものと、やや外反して口縁端部を收めるものがある。

403は須恵器椀Ab1である。体部外向の沈線は、ヘラで引いており、段に近い沈線である。平高台もしっかりとしており、古い形態を残す。

408～410は須恵器椀Ab2である。410は他の椀Abに比して、器高が低く、口縁部の外反度も強い。

411～415は須恵器椀B 2である。このうち、411～413は口径14.5cm以上の大型品で、輪高台の断面形は長方形で高い。414・415は口径14.0cm程度の中型品で、輪高台の断面形は台形で低い。

須恵器坏 416・417は須恵器坏で、体部が直線的に外上方に開くものと、内湾してたちあがるものがある。

須恵器耳皿 418は須恵器の耳皿である。底径5.0cm、高さ1.0cm程度の中実の高台に、口径9.0cm程度の皿部をロクロ成形する。回転糸切り技法によって切り離した後、皿部の両端を押さえて立ち上げる。SB102出土の267とはほぼ同形態のものである。

419～448は土師器の供膳具である。

土師器椀 419～428は土師器椀Aである。口径が大きく、それに比して器高が低いものと、口径が小さく、器高の高いものがある。

土師器坏 429は土師器坏である。体部は直線的に外上方に開き、口縁端部は外反する。

土師器皿 430～439は土師器皿Aである。このうち、430～432は口径10.0cm以上のやや大きめの皿で、坏の形態に近い。体部は内湾してたちあがるもの、外反してたちあがるもの、直線的に開き、口縁端部が外反するものがある。また、口縁端部が若干肥厚して玉縁状になるものがある。

440・441は土師器皿Bである。底部は上げ底ぎみになっており、中心の器壁は非常に薄くなっている。体部は直線的に大きく開き、口縁端部は丸く收める。器高は低い。

442～448は土師器皿Cである。このうち、442は他に比して口径は大きいが、皿部は浅く、器高が低い。その他は、443～446の口径10.0cm前後のものと、447・448の口径9.0cm前後のものがある。

綠釉陶器椀 449～451は綠釉陶器椀である。449・450は軟陶の綠釉陶器である。断面三角形の貼り付け輪高台で、内面見込みに凹線による図線を巡らす。釉調は淡黄緑色である。451は硬陶の綠釉陶器椀の口縁部である。口縁端部は船の細い面をもつ。釉調は深緑色である。

白磁碗 452は白磁碗または皿の底部である。断面三角形の高台が付く。乳白色の釉が全面にかかるが、高台の端部は搔き取られ、露胎している。

須恵器鉢 453～460は須恵器の鉢である。このうち、453・454は須恵器鉢Aである。平らな底部から、丸みをもってたちあがり、口縁端部下で内側に緩やかに屈曲した後、口縁端部を外方に短く折り返す。口縁端部上面はナデて窪み、口縁部端部はつまみ上げる。内外面とも口クロナデの単位は細かい。

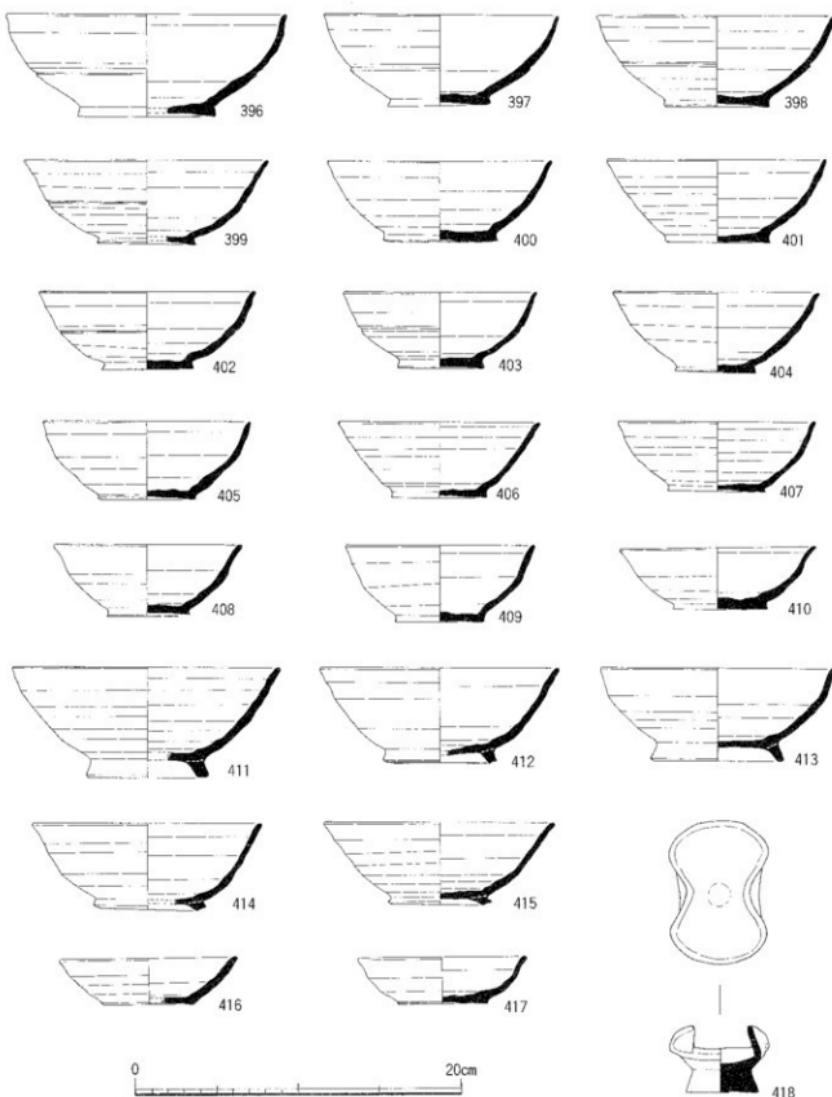


fig.116 灰色シルト層出土遺物(1)

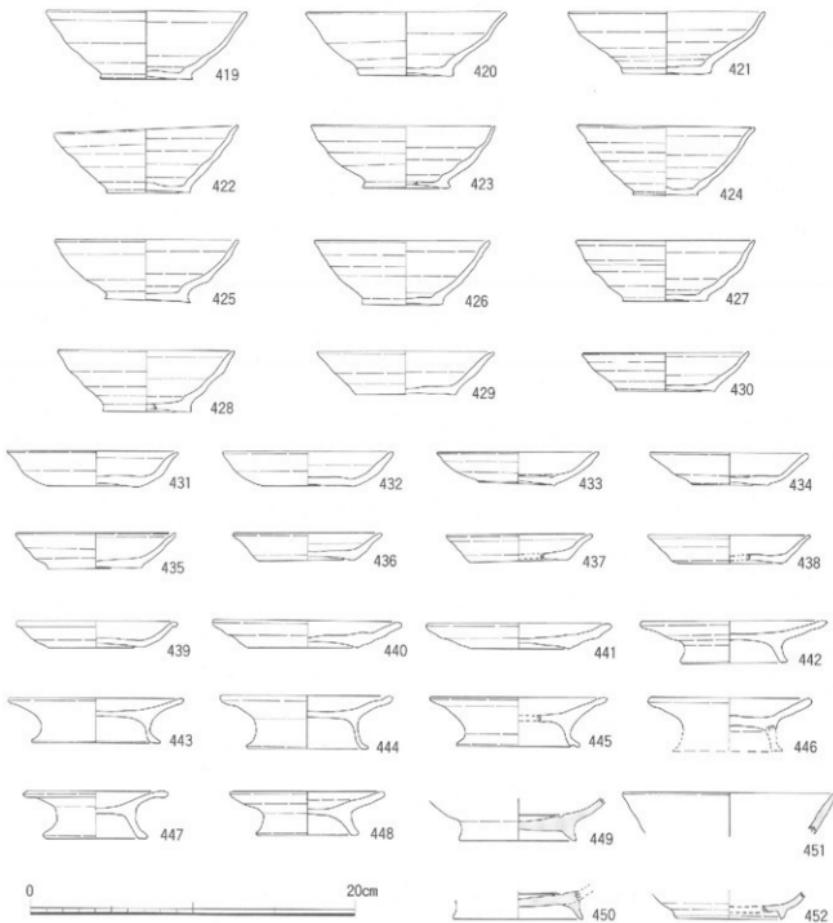


fig.117 灰色シルト層出土遺物(2)

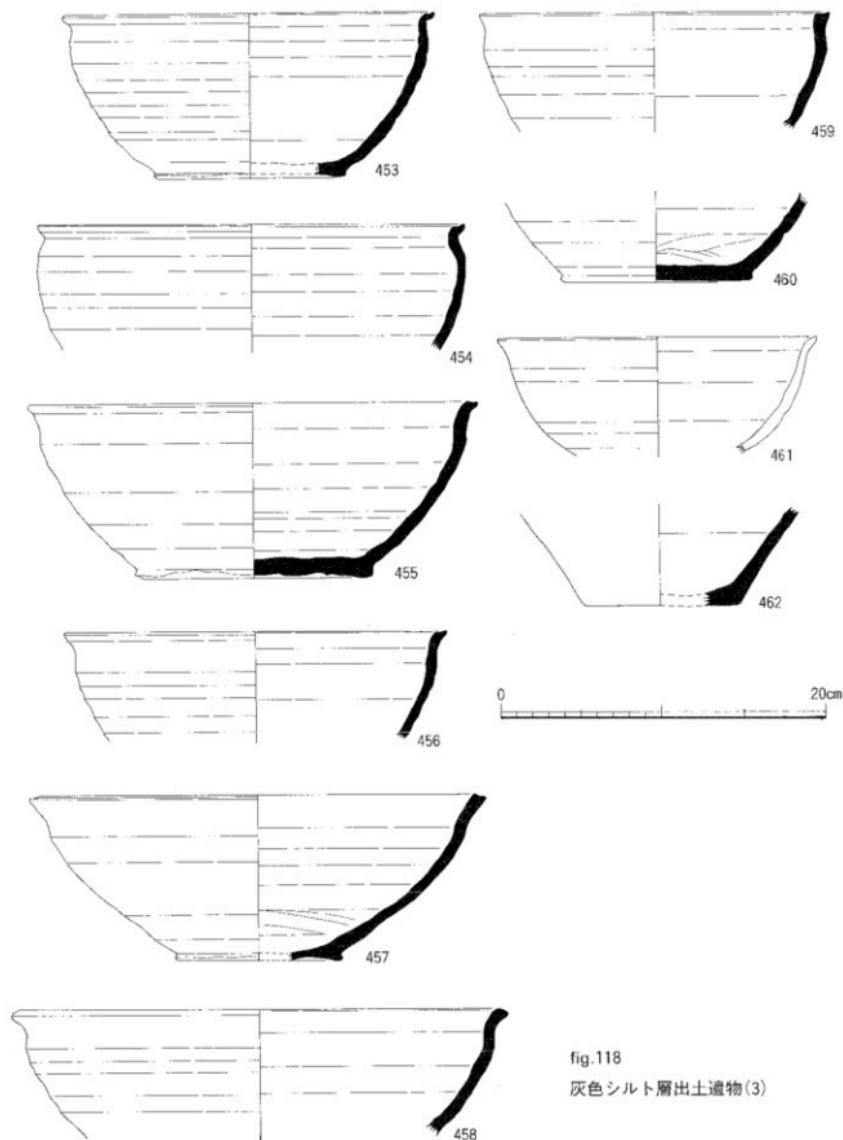
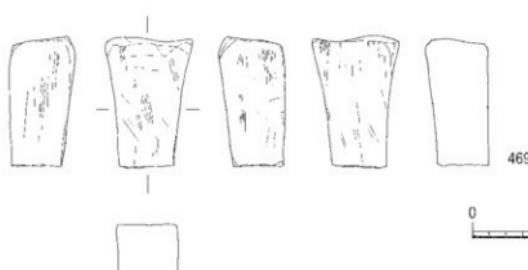
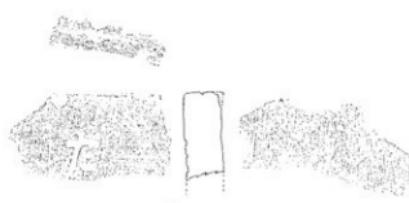
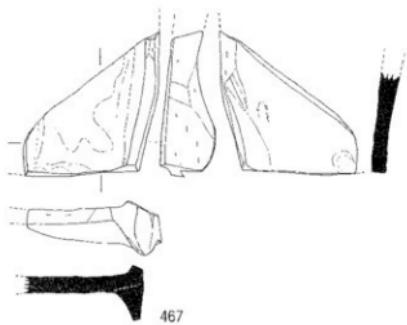
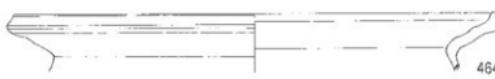
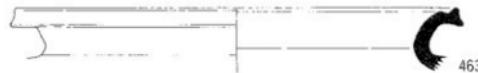


fig.118
灰色シルト層出土遺物(3)



0 20cm

fig.119 灰色シルト層出土遺物(4)

455～459は須恵器鉢Bである。平らな底部から、やや丸みをもってたちあがり、口縁端部下で「く」の字形に内側に屈曲した後、口縁端部は外反する。口縁端部上面はナデで、若干くぼみを持つものが多い。法量は口径25.0cm、器高10.0cm前後が中心である。

460は須恵器鉢の底部である。平らな底部から、やや丸みをもってたちあがる。内面はロクロナデの後ナデを施している。

土師器鉢 461は土師器の鉢である。内湾して立ち上がり、口縁部は外反して丸く取める。内外面とも調整は横方向のナデであるが、ロクロ使用は明らかでない。

須恵器壺 462は須恵器の壺の底部と思われる。大きく直線的に開く。体部内外面は丁寧なロクロナデを施し、壺Aと共に通する。

須恵器甕 463は須恵器甕Aである。頸部から短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は端面を強くナデて上方につまみ上げる。

土師器鍋 464は土師器の鍋Aである。屈曲して口縁部は直線的に外方に開く。口縁部は肥厚し端部に面をもち、その端面をナデて、若干上方につまみ上げる。

466は土師器の鍋Bである。体部は、直線的に外方に開き、口縁部下で、一旦折れ曲がって開く。端部に面をもち、その端面を強くナデて、若干上方につまみ上げる。体部外面は平行タタキの跡が残る。口縁部の内外面はヨコナデ調整である。

硯 467は須恵質の硯である。側面の形状から風字硯と考えられる。側辺のみ上手がある。脚は側辺に沿って貼り付けられている。表裏面はユビオサエで成形され、側辺はヘラケズリで成形されている。

刻印瓦 468は須恵質の瓦片である。凹面には11条/cm×11条/cmの布目が残り、凸面には4.5mm×4.5mmの菱形の格子タタキ痕が残る。また、小口にはその中央に沈線が1条引かれている。この瓦の凹面には、「左」の刻印がある。破片のため「左」の下に続く文字は不明であるが、同様の刻印がある瓦は、京都の教王護

国寺（東寺）で「左寺」と刻印された瓦が

出土している⁽¹⁰⁾。この東寺の瓦と468を比べるとその字体と刻印の大きさがほぼ同一であることから、468も東寺と同じ「左寺」と刻印された瓦と考えられ、同じ生産地の瓦と思われる。神戸市内ではこれまで同様の刻印のある瓦が、西区玉津町出合遺跡（fig. 120）と西区伊川谷町上脇遺跡から出土している⁽¹⁰⁾。

砥石 469は砂岩製の砥石である。一部欠損している。断面の形状は正方形で、4面とも使用されている。



fig.120 出合遺跡出土「左□」刻印瓦

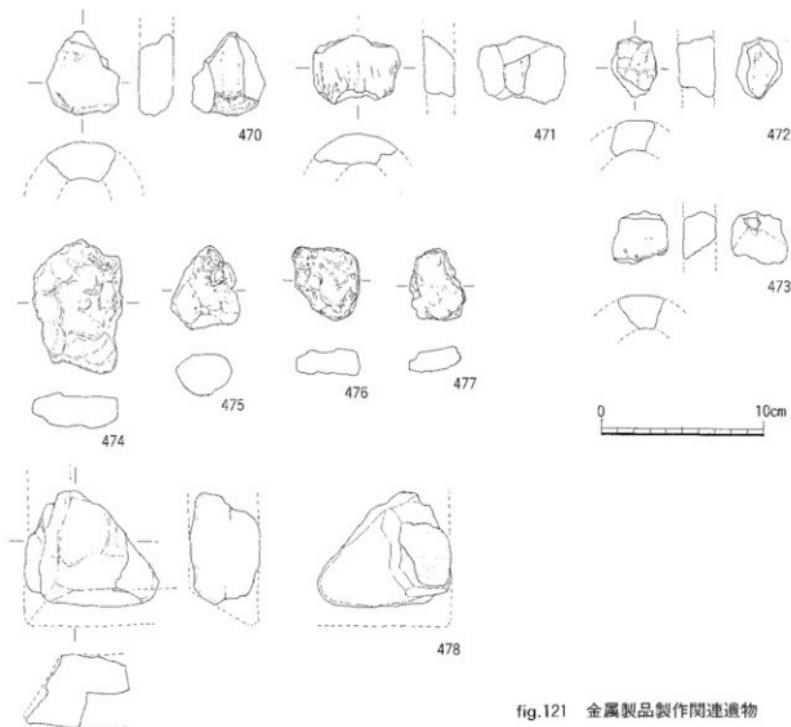


fig.121 金属製品製作関連遺物

vi) 金属製品製作関連遺物⁽¹⁾

櫛羽口 470～473は輪羽口である。470は外径7.2cm、内径3.3cmに復元できる。外面は灰白色で、内面が浅黄橙色を呈す。先端は溶解しており褐色を呈す。炉外の炉に近い部分と考えられる。471は外径6.5cm、内径3.0cmに復元できる。外面は灰色、断面中央は浅黄橙色、内面は灰白色を呈す。胎土にはスサを含む。472は外面は灰白色、断面中央は浅黄橙色、内面が浅黄橙色を呈す。外面は溶解しており、気泡が見られる。いずれも小型の櫛羽口である。

鉱滓 474～477は鉱滓である。474～476は椀形滓で、474は8.2×5.5cm、重さ80.6g、475は5.0×4.3cm、重さ54.7g、476は4.6×4.2cm、重さ34.5gである。474・476は表面が黄橙色のチョーキングを起こした鉄由来のサビで覆われている。X線によって内部を観察すると474は多孔質で、476はメタルを多く含む。475は明黄褐色の付着物に覆われて、内部は多孔質である。477は流动滓と思われる。4.4×3.5cm、重さ19.8gである。上面は平坦で、暗赤褐色を呈す。全て着磁性があり、鉄生産由来の鉱滓と思われる。

焼石 478は被熱痕のある加工石材である。本来の形状は台形錐と思われる。石材は凝灰岩質砂岩で、残存する部分は全て被熱している。底面は砥石のように磨られた痕がある。

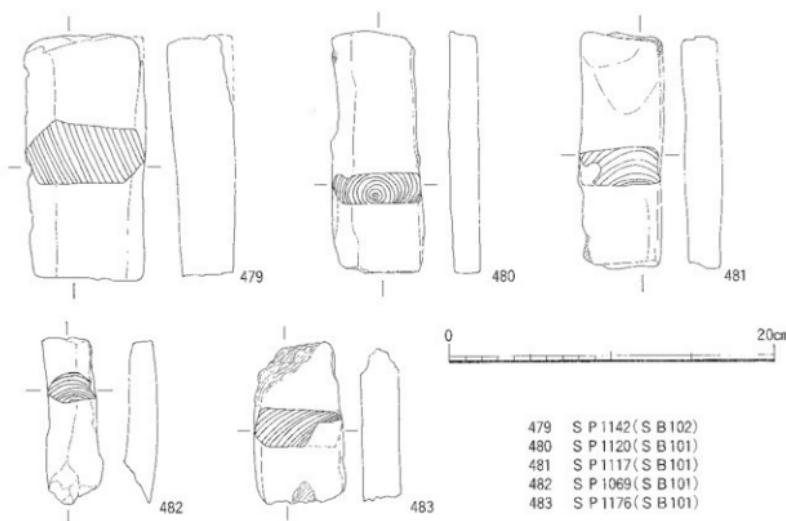


fig.122 掘立柱建物礎盤

vii) 掘立柱建物礎盤

480~483はS B 101の柱穴の礎盤である。480はS P 1120のもので、長さ30.2cm、幅11.2cm、厚さ3.6cmを測る。両長側面は表裏両側から面取りの加工が施されている。樹種はコウヤマキである。481はS P 1117のもので、長さ28.3cm、幅10.5cm、厚さ4.7cmを測る。樹種はコウヤマキである。482はS P 1069のもので、長さ20.4cm、幅7.0cm、厚さ3.8cmを測る。片側の短側面は大きく斜めに削られている。樹種はマツ属複維管束並属である。483はS P 1176のもので、長さ19.6cm、幅11.2cm、厚さ4.8cmを測る。両長側面は表裏両側から面取りの加工が施されている。樹種はクリである。

479はS B 102のS P 1142の礎盤である。長さ30.0cm、幅14.6cm、厚さ7.8cmを測る。両長側面は面取りの加工が施されている。樹種はクリである。

7. 小結

今池尻遺跡第2次調査では、4時期の遺構面が確認された。以下、それぞれの時期について簡単にまとめる。

弥生時代中期 弥生時代中期の遺構は第4遺構面で確認された。遺構としては土坑と細い溝のみで、住居址などのような生活中伴うものは確認されなかった。また遺物も非常に少ないとことながら、生活域からは、やや離れた位置であると考えられる。

弥生時代後期末 第3遺構面では弥生時代後期末の遺構が確認された。今回の調査では、遺構としては浅い落ち込みのみであったが、完形の土器などが遺構面上から数個体出土している。第1次調査では土器の多く入った土坑が存在することなどから、集落の縁辺に位置すると考えられる。

古墳時代後期 第2造構面では、古墳時代後期の水田や古墳時代から飛鳥時代にかけての流路などが確認された。水田は畔の残りが悪いため、その詳細は明らかではないが、流路に沿って造られており、この流路の水を利用していたものと考えられる。また、流路の最終堆積層には7世紀代の遺物が出土していることから、この時期の集落も付近に存在するものと考えられる。

平安時代後期 第1造構面では平安時代後期の造構の遺構が多数確認された。特に、今回の調査区内では、掘立柱建物が溝に囲まれた区画内に作られており、その南には耕作域があることが判明し、当時の居住域における土地の利用状況が明らかとなる資料である。掘立柱建物の柱穴には、土器類などの多くの遺物が確認された。これらの遺物は、この柱穴内の柱痕に添って掘形の上層に置かれているものと、柱穴の検出面で、柱痕上に置かれているものがある。前者は建物を建てる際に柱を立て掘形を埋める最終段階で行われた祭祀に伴う遺物であり、後者は建物の柱を除去した際に行われた祭祀に伴う遺物と考えられる。

また、確認された建物や溝の方向は、現地表面で確認される明石郡条里の方向(N20°E)と同一の方向であることや、調査区北端の溝S D168が条里の1町界に位置することなど、今回確認された遺構は条里区画を意識して造られていることから、この地域の条里制地割の開始時期を探る手がかりとなる。

出土遺物の時期について考えてみると、須恵器は、神出古窯跡群の万堡池窯灰原出土遺物⁽¹²⁾の古相と同時期と考えられる。実年代については⁽¹³⁾、須恵器鉢Bの中でも新しい形態のものが、平安京IV期中の平安京左京北辺三坊六町内膳町S D41Aから出土している。黒色土器碗は森隆氏分類のIV類にあたり、その最終段階のもので、平安京IV期古に見られるものである。灰釉陶器については、壺は東山72号窓式に類似のものがあり、碗は百代寺窯式期のものと考えられる。綠釉陶器についてもその最終段階のものである。平安京IV期古は11世紀前葉に、平安京IV期中は11世紀中葉に位置づけられている。以上のことを考え合わせると、出土遺物の時期は11世紀前半の内に位置づけられる。

- 註 (1) 出辯昭三『陶邑古窯跡群』I 平安学園考古クラブ 1966
(2) 藤本太郎「今池尻遺跡」「平成4年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1995
(3) 山下峰司「4.灰釉陶器・山茶碗」『概説中世の土器・陶器』中世土器研究会編 真陽社 1995
(4) 森田稔「神出古窯跡群」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987
(5) この遺物については、神戸市教育委員会黒田恭正氏よりご教示いただいた。記して深謝いたします。
(6) 山本信夫「北朝期貿易陶磁器の編年―大宰府出土例を中心として―」『貿易陶磁研究』No. 8 日本貿易陶磁研究会 1988
(7) 齋藤孝正編『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』愛知県教育委員会 1983
(8) 安山滋編『白水遺跡第3・6・7次 高津橋大塚遺跡第1・2次発掘調査報告書―神戸市白水特定土地区域整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書その2』神戸市教育委員会 2000
(9) 近畿大学理工学部建築学科杉山研究室「教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書」1983
(10) 黒田恭正「出合遺跡」「平成元年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1992出合遺跡出土瓦については神戸市教育委員会黒田恭正氏より、上脇遺跡出土瓦については兵庫県教育委員会慶山淳子氏よりご教示いただいた。記して深謝いたします。
(11) この項については、神戸市教育委員会中村大介氏からご教示いただき、それを元に記述した。記して深謝いたします。
(12) 丹治康明「万堡池1号窯」「昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1990
(13) 以下の文章は下記の文献を参考とした。 古代の土器研究会編『古代の土器3 古代の土器集成III』古代の土器研究会 1994 中世土器研究会編『概説中世の土器・陶器』1995真陽社

8. 今池尻遺跡第2次調査における樹種同定

株式会社 古環境研究所

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から属レベル程度の同定が可能である。また、木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2) 試料

試料は、第1遺構面から検出された11世紀前半のピットから出土した柱材および礎盤を主とする木材28点である。

(3) 方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によつて60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結果

fig.123に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となつた特徴を記す。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の濟州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

fig.124-1

モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径

1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科

fig. 124-2

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

fig. 124-3

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の、分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高であるが多くは10細胞高以下である。

以上の形質よりコウヤマキに同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

fig. 125-4

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

fig. 126-5

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疊に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科

fig. 127-6

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強韌で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

ハイノキ属 *Symplocos* ハイノキ科

横断面：小型で角張った道管が、単独あるいは2～4個不規則に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本ぐらいである。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりハイノキ属に同定される。ハイノキ属には、ハイノキ、クロバイ、サワツタギ、クロキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉性の高木または低木である。

(5) 所見

分析の結果、第1遺構面から検出された11世紀前半のピットから出土した木材のうち、柱材の樹種はマツ属複維管束亞属7、ツブライジ3、コナラ属クヌギ節2、コナラ属コナラ節1と同定された。また、礎盤の樹種はクリ3、カヤ2、コウヤマキ2、モミ属1と同定された。

柱材などの建築材は九州北部、瀬戸内沿岸、近畿中央部、東海西部にかけては、古墳時代ないし律令期以降はヒノキが多用される。本遺跡の柱材は、マツ属複維管束亞属、ツブライジ、コナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ節であり、いずれも二次林の性格の強い樹種ばかりである。マツ属複維管束亞属は生態上からアカマツの可能性が高く、アカマツは他の樹木が入り込めない土壤の少ない岩肌の露出したところや二次林として分布する。ツブライジは照葉樹林の主要構成要素でもあるが、やや乾燥した丘陵地や山地で二次林として生育する。コナラ属クヌギ節とコナラ属コナラ節はやや乾燥した丘陵地などに二次林として分布する。

礎盤に用いられたクリはやや乾燥した丘陵地に二次林として分布し、カヤは谷沿いに生育し、コウヤマキ、モミ属は尾根沿い等の乾燥したところに多い。また、クリやカヤ、コウヤマキは水湿にも比較的耐えて腐朽

しにくい材であり、礎盤には適すると考えられる。

以上のように、柱材ではマツ属複雑管束軸属を主に二次林種が多く、礎盤では二次林性のクリやカヤ、コウヤマキなどの腐朽しにくい材が用いられている。当時は建築材などの木材はヒノキが流通して多用される時期であるが、本遺跡の様相は二次林性の樹種が多いことから、近隣に分布するマツ林などの二次林から切り出されて利用された可能性が考えられる。

文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞・木材の構造、文永堂出版、p. 20-48.
- 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞・木材の構造、文永堂出版、p. 49-100.
- 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、旗山閣、296p.
- 金原正明（1995）近畿地方における弥生古墳時代の木材利用と画期・占墳文化とその伝統、勉誠社、p. 553-562.

fig. 123 今池尻遺跡第2次調査における樹種同定結果

遺物No.	遺物名	地区	出土層位	時期	結果(和名/学名)	留番号	R番号
480	櫛盤	3区	S P1120(S B101)	11世紀前半	コウヤマキ <i>Sciadopis verticillata</i> Sieb. et Zucc.	8060	413
481	櫛盤	3区	S P1117(S B101)	11世紀前半	コウヤマキ <i>Sciadopis verticillata</i> Sieb. et Zucc.	8059	412
483	櫛盤	2区	S P1176(S B101)	11世紀前半	クワリ <i>Casuarina crenata</i> Sieb. et Zucc.	8063	416
482	柱材	2区	S P1154(S B101)	11世紀前半	コナラ属コナラ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	8057	410
	櫛盤	3区	S P1122(S B101)	11世紀前半	クワリ <i>Casuarina crenata</i> Sieb. et Zucc.	8061	414
479	櫛盤	3区	S P1093(S B101)	11世紀前半	モミ属 <i>Abies</i>	8062	408
	櫛盤	3区	S P1142(S B102)	11世紀前半	クワリ <i>Casuarina crenata</i> Sieb. et Zucc.	8062	415
	柱材	3区	S P1057(S B102)	11世紀前半	ツバラシイ <i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	8062	401
	柱材	3区	S P1084(S B102)	11世紀前半	マツ属複雜管束帶屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8057	405
4区	S P1037(S B102)	11世紀前半	マツ属複雜管束帶屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8057	397		
	柱材	3区	S P1081細形(S B102)	11世紀前半	マツ属複雜管束帶屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8058	398
	櫛盤	3区	S P1081細形(S B102)	11世紀前半	ハイノキ属 <i>Symplocos</i>	8059	399-1
	櫛盤	3区	S P1069(S B103)	11世紀前半	マツ属複雜管束帶屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8059	399-2
	柱材	3区	S P1061(S B103)	11世紀前半	マツ属複雜管束帶屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8057	407
	櫛盤	3区	S P1064(S B103)	11世紀前半	カヤ <i>Toreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	8057	402
	櫛盤	3区	S P1064(S B103)	11世紀前半	カヤ <i>Toreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	8057	406-1
	柱材	3区	S P1026(S B104)	11世紀前半	マツ属複雜管束帶屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8057	406-2
	柱材	4区	S P1024(S B104)	11世紀前半	マツ属複雜管束帶屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8057	409
	柱材	4区	S P1024(S B104)	11世紀前半	マツ属複雜管束帶屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8057	396
	柱材	4区	S P1017(S B105)	11世紀前半	ツアラシイ <i>Casuarina crenata</i> Schottky	8057	400-1
	柱材	4区	S P1017(S B105)	11世紀前半	ツアラシイ <i>Casuarina crenata</i> Schottky	8057	400-2
	柱材	4区	S P1017(S B105)	11世紀前半	ツアラシイ <i>Casuarina crenata</i> Schottky	8057	400-3
	柱材	5区	S P1180(S B105)	11世紀前半	マツ属複雜管束帶屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8058	411
	柱材	4区	S P1023(S B106)	11世紀前半	マツ属複雜管束帶屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8058	395
	柱材	3区	S P1083	11世紀前半	マツ属複雜管束帶屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8058	404-1
	柱材	3区	S P1083	11世紀前半	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Argylopos</i>	8058	404-2
	柱材	3区	S P1083	11世紀前半	マツ属複雜管束帶屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8058	404-3
	柱材	3区	S P1083	11世紀前半	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Argylopos</i>	8058	404-4

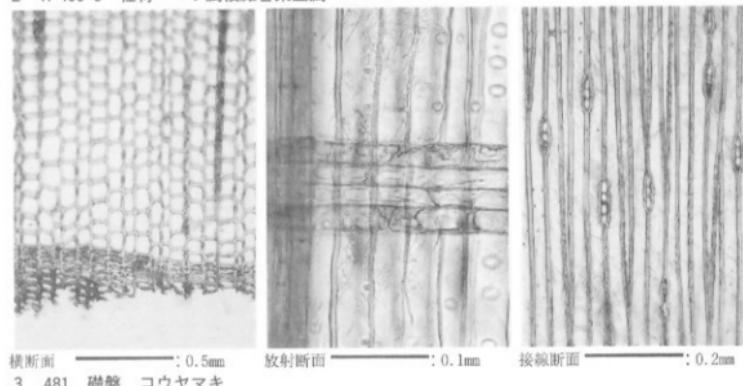
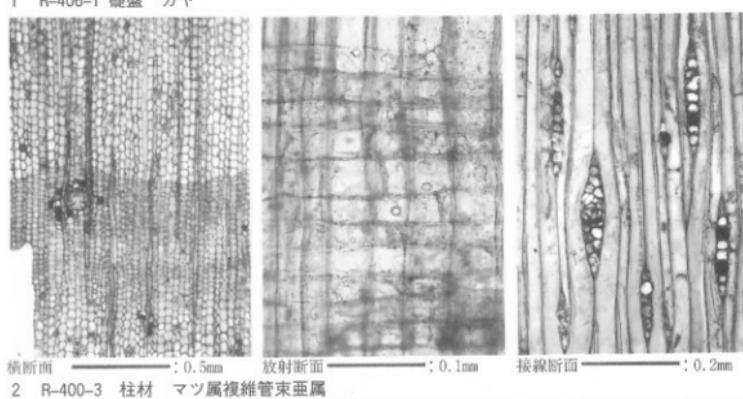
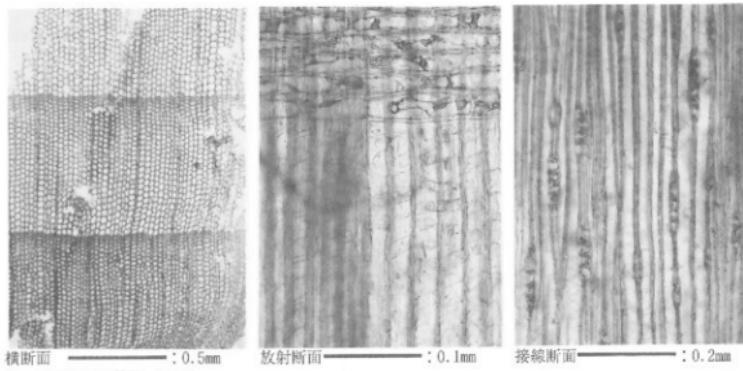


fig.124 今池尻遺跡第2次調査の木材(1)

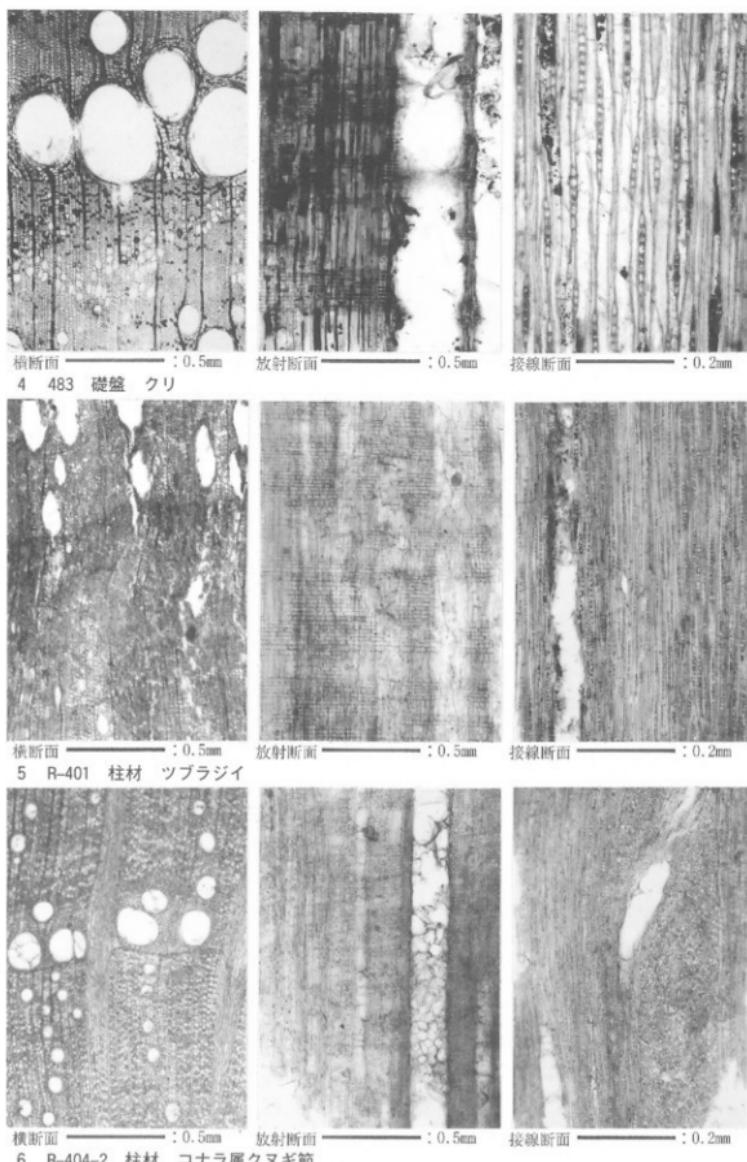


fig.125 今池尻遺跡第2次調査の木材(2)

V. 新方遺跡平松地点第3次調査—Ⅱ区

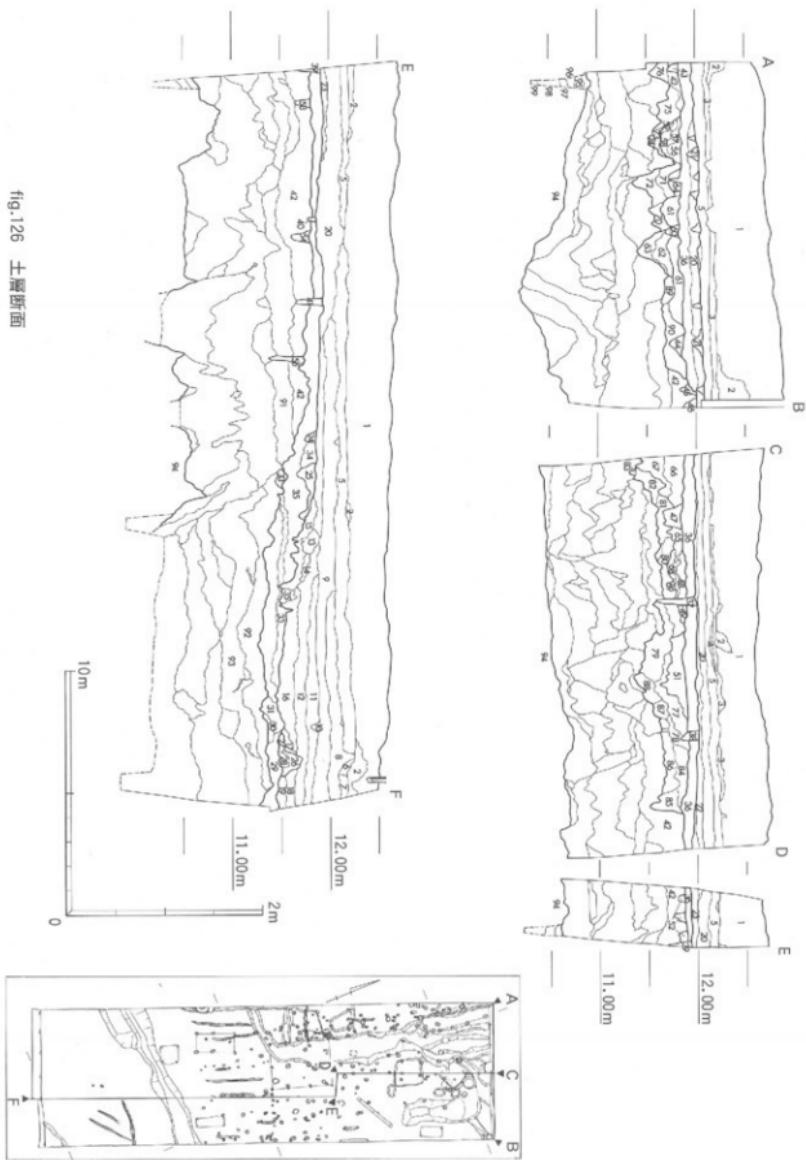
新方遺跡平松地点第3次調査は、まず調査予定範囲の南半分について調査を行い、これをⅠ区とした。Ⅱ区はⅠ区の北側に続く幅14m、長さ48m、面積約670m²の範囲である。Ⅱ区の調査では第1～第4遺構面の計4面の遺構面を確認したが、第4遺構面についてはⅠ区で未検出であった自然河道の底をトレンチにより確認したに留まる。Ⅰ区との関係についても基本層序の項、また、各遺構面の記述の部分で触れていく。

調査は工程の都合上、掘削土の一部を場外へ搬出しながら、まず西側3分の2の部分において第3遺構面までの調査を行い、その後、東側残り3分の1についても同様に実施し、最終的に中央部のトレンチで第4遺構面までの掘削を行い、調査を終了した。

1. 基本層序

調査区内には盛土が施され、これを除去すると一部に現代の耕土層が残り、その下に数次にわたる旧耕土層が堆積する。これら中世～近世の耕土層と考えられる層までは水平堆積である。旧耕土層以下の各堆積層は北から南へ緩やかに下降する傾斜地形を形成する。現耕土層下0.30mで確認される暗灰色粘性砂質土層はⅠ区から続く中世以降の生活面を形成する層である。この層面では鉛溝状の浅く、細長い溝が確認されたのみである。南側は灰色系の粘質土およびシルト層の堆積となり、Ⅰ区と同様の堆積を呈する。北側の暗灰色粘性砂質土層を除去すると、その下に北半分には暗褐色粘性砂質土が堆積し、中央から南にかけては黄灰色極細砂層が現れる。この向層面上で平安時代中期～後期の遺構を検出し、第1遺構面とした。標高は12.0m付近である。暗褐色粘性砂質土は厚さ約0.10mの堆積で、この層を除去すると黄灰色極細砂層および下層の自然河道の堆積層の上面が検出される。この面を第2遺構面とした。第2遺構面も平安時代中期～後期の遺構面である。黄灰色層は第1・2遺構面の基盤層となる。この基盤層からの遺物の出土はないが、第2遺構面の北側は帶状に灰色系または褐色系のシルト層、砂層が所々で帶状に堆積しており、これら第2遺構面の基盤層となる自然河道には以下0.30mの深さまで遺物の出土が認められる。Ⅰ区から続く自然河道の埋没土の上位堆積にあたり、遺物の確認された最深の層まで掘削し、これを第3遺構面とした。平安時代中期の流路状の遺構を確認した。第2・3遺構面で検出した溝や小規模の流路状の遺構は、比較的緩やかな流れになった段階の河道痕跡と考えられる。河道堆積はこれより下、さらに1.5m続き、青灰色シルト層の河道底に至る。河道底を第4遺構面としたが、河道堆積である砂層、疊層の堆積の中からは摩滅の著しい弥生時代後期の土器、平安時代と考えられる土器の小片が出土した程度である。第2・3遺構面で検出される遺構の状況から、この河道は平安時代の早い段階に貫流した自然河道かと考えられ、これはⅠ区第2遺構面で検出された水田層を覆う洪水層出土の遺物からも肯定される。青灰色シルト層を一部で断ち割り、下層の確認を行ったが、さらに古い段階の流路が洪水による砂礫の堆積は認められたが、遺物は出土しなかった。河道底は標高10.6～10.8m、調査区の北端で徐々に高くなり、続く今池尻遺跡第2次調査地点で北側の立ち上がりが検出された。断面観察の結果、複数の流れの単位が認められるが、いずれも調査区を北東から南西方向に貫流する流れである。

fig.126 土層断面



1	盛土	39	黒灰色粘質土 (Pt)	77	暗灰色シルト質細繊砂
2	耕土	40	灰黑色粘質土 (Pt)	78	暗灰褐色細繊砂
3	暗褐色粘性砂質土 (田耕土)	41	灰褐色細繊砂 (5 cm大)	79	灰褐色粗砂質土 (5 cm大)
4	褐灰色粘性砂質土 (田耕土)	42	灰褐色細繊砂 (第2・3道筋間基盤)	80	黃白色シルト質細繊砂 (化)
5	黃灰色粘質土 (田耕土)	43	灰黑色粘質土 (SD 05)	81	褐色シルト質細繊砂
6	褐色粘性砂質土	44	茶褐色砂質土 (LH 07?)	82	褐色シルト質細繊砂
7	灰黃色粘質土	45	に高い灰褐色砂質土 (Pt)	83	明灰色細繊砂
8	灰黃色砂質土	46	褐色細色砂質シルト (炭化) : SD 12(0)	84	褐色シルト質細繊砂
9	灰色彩質土	47	黑色シルト (炭ブロック混じり)	85	褐色細繊砂 (炭化)
10	灰褐色砂質土	48	褐色細色砂質シルト (46~50号は SX 06の堆土)	86	褐色細繊砂
11	に高い灰褐色質土	49	暗灰色シルト	87	褐色細繊砂
12	灰褐色粘性砂質土	50	茶褐色シルト (堆土・炭のブロック混じり) : SK 02(88	明灰色シルト 褐色細繊砂
13	淡灰褐色細繊砂	51	黒褐色砂質シルト (堆土・炭のブロック混じり) : SK 02(89	灰褐色シルト (SD 27)
14	淡灰褐色砂質シルト	52	褐色シルト質細繊砂 (Pt)	90	褐色細色シルト質細繊砂 (SD 27)
15	明灰褐色細繊砂	53	淡灰色シルト質細繊砂 (Pt)	91	褐色細色細繊砂 (第3層は第3層表面塗地部の 基盤)
16	灰褐色細繊砂	54	灰褐色粘性砂質土 (Pt)	92	灰白色細繊砂
17	褐色シルト	55	灰褐色シルト (Pt)	93	明灰褐色砂質シルト
18	褐色シルト	56	泥質灰褐色砂質シルト (56~69号は SD 04(4+) +	94	青灰色シルト (第4道筋面基盤)
※3~19 中世以降の旧耕土層または深埋れ堆積		57	褐色細色砂質シルト (炭ブロック混じり)	95	灰褐色シルト (65号以下は下層所ち割り断面土層)
20	泥灰褐色質土 (中世耕作土)	58	褐色細色砂質シルト (炭ブロック混じり)	96	青灰色細繊砂
21	灰褐色シルト (堆土?)	59	用灰色細繊砂	97	褐色細繊砂
22	黄褐色砂質土 (礫化)	60	帶素灰褐色質シルト	98	青灰色細繊砂
23	灰色シルト (LH 07)	61	褐色細色砂質シルト	99	褐色細繊砂
24	泥灰色シルト (SD 01)	62	灰茶色砂質シルト		
25	白色シルト (質細繊砂 T 07(2))	63	褐色細色シルト (黄褐色じり) : SK 01(
26	暗白色シルト (SX 01堆疊・上面陥化)	64	淡褐色粘質土		
27	灰色砂質シルト (SX 01堆疊)	65	明灰褐色砂質シルト		
28	灰白色シルト (SX 01堆疊)	66	灰褐色砂質シルト		
29	灰褐色細繊砂	67	褐色細色シルト質細繊砂 (SK 01)		
30	灰褐色砂質シルト	68	褐色細色シルト		
31	灰褐色砂質シルト (色細繊砂じり)	69	黑色シルト (炭層)		
32	明灰褐色砂質シルト	70	褐色細色シルト質細繊砂 (70~88号は SD 17の堆土)		
33	明褐色シルト (軟化面)	71	褐色シルト		
34	灰白色粘質土	72	褐色砂質シルト		
35	灰色砂質シルト (第1道筋面基盤)	73	褐色シルト (炭層)		
36	褐色細色粘質土 (第2道筋面基盤)				
37	黑色シルト (Pt)				
38	暗灰褐色粘質土 (Pt)				
39	に高い灰褐色シルト質細繊砂				

2. 平安時代中期の遺構と遺物（第3遺構面）

平安時代中期の遺物を含む流路状遺構が2条検出された。但し、遺構の輪郭は検出した形ほどに明瞭でなく、調査区の断面観察からは第4遺構面とした自然河道が埋没する最終過程に近い段階での堆積層の一部を流路状に掘削したものと判断される。

S D17 調査区の西半で検出した南北方向の流路である S D17は、調査区内での最大検出幅約10m、深さは最深部で約0.30mを測る。埋土は灰色系のシルトまたは細砂層である。北側から約10mの範囲から遺物が出土し、周囲よりわずかに窪んだ灰褐色系のシルト質細砂層に集中する。北側から約20mまで検出した段階で平面プランが不明瞭となったため、トレーンチ調査によって以南の状況、遺構の形状および遺物の有無について確認調査を行ったが、流路状の堆積は認められず、また遺物の広がりも確認されなかった。遺物は散見される部分、集中する部分があり、流れの緩やかな段階での付近からの流れ込み、あるいは投棄により形成された土器溜まりのようなものかと考えられる。

501～508は土師器の杯である。口径は13.6～14.4cm、器高は3.0～3.3cmを測る。底部は一様にナデによる粗い仕上げに見えるが、一部に不明瞭ながらヘラ状の痕が残り、逆に切り離し、あるいはヘラおこしにより生じた凹凸をナデ消したようでもある。ナデは指揮さえが中心であるが、一部にヘラ状の工具を使った痕跡が認められる。

509～511は土師器の皿である。口径はそれぞれ18.0cm、15.2cm、16.3cmを測る。体部は口縁部まで直線的に延びる。509・510の底部はナデによる仕上げの痕跡が顕著であるが、511にはヘラ状痕跡がわずかに残る。杯と同じくヘラ切り、またはヘラおこしの後に丁寧にナデ上げたのであろうか。

512は土師器の蓋である。復元径16.9cmで頂部にツマミが付くかは不明である。焼成は硬質である。

513は内面黒色土器碗である。内面は横方向のヘラミガキ、外側は左上がりのヘラ削り調整が施される。削り幅は細かく、丁寧な仕上げである。

514～516は内面黒色土器の甕である。514と515はやや丸みを帯びた体部をもち、口縁は緩やかに外反する。516は細身の体部である。口径は外反がきつく、水平気味に延びる。

514は内外面ともに丁寧なミガキ調整が施される。516の内面には体部上方、口縁との境あたりに刷毛状の痕跡が残る。

517は灰釉陶器の碗で、口径20.2cm、器高6.1cmを測る。体部外側の調整は非常に丁寧な回転ヘラ削りと回転ナデにより仕上げられる。底部には径8.7cmを測る削り出し高台が付く。高台の下面は内側に傾斜し、内側に平坦面をもつ。施釉は内面のみにされ、釉調は暗黄緑色とやや鈍い。

518の綠釉陶器の小皿は、口径12.7cm、器高2.1cmを測る。外側には回転ヘラ削りによる段が付き、稜のようになる。底部の調整は摩滅が著しいが、糸切りであると思われる。釉は明黄緑色を呈し、全面に施釉されていたものであろう。

519～522は製塙土器である。いずれも粘土紐積み上げ痕跡が顕著に残り、器壁は厚手である。外側には指頭圧痕、体部内側の口縁近くには強いナデ上げ痕が目立つ。口縁端部の形状は粘土をナデ付けたもの、板状の工具などで平面に仕上げたもの、強くつまみ上げる

IV. 新方遺跡平松地点第3次調査—II区

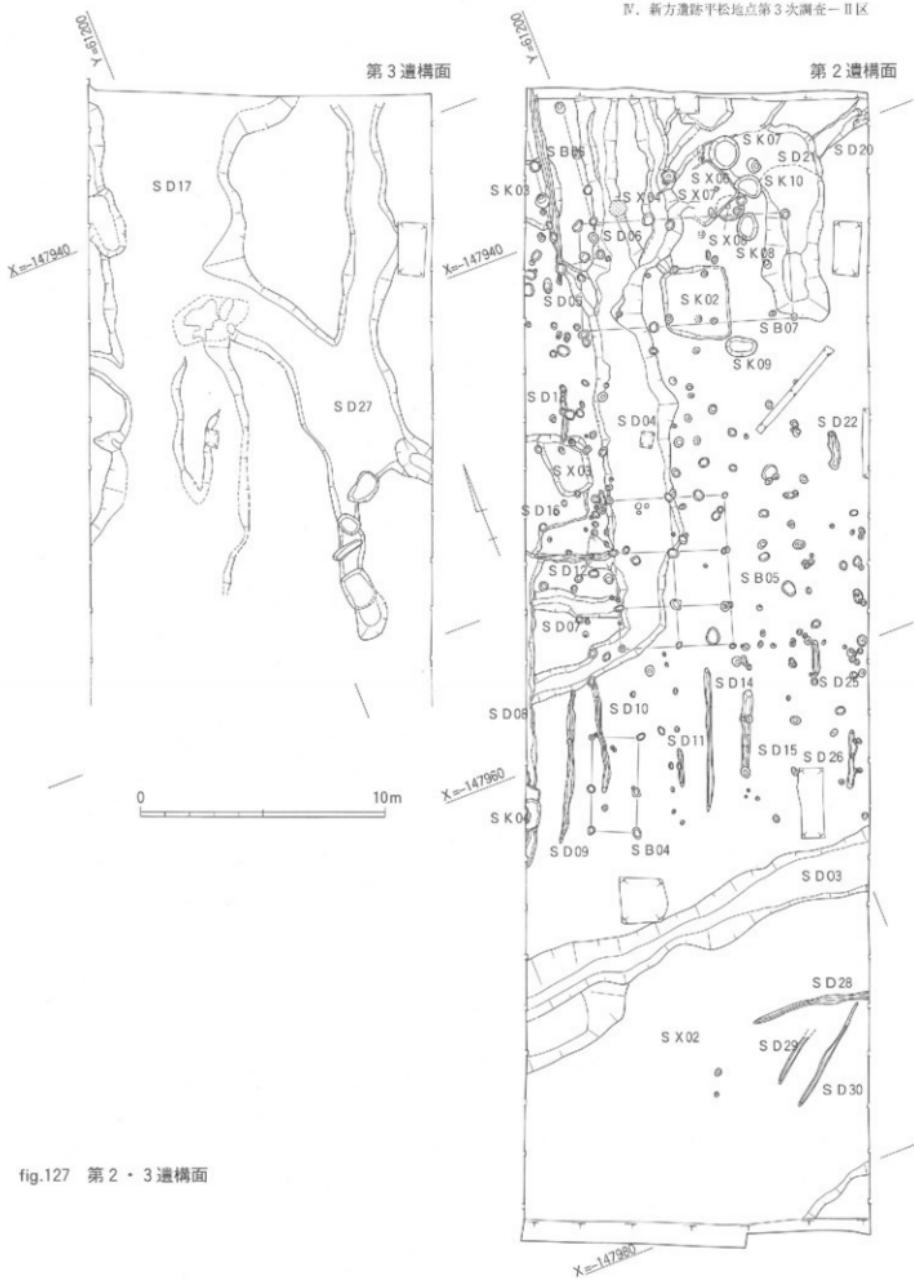


fig.127 第2・3遺構面

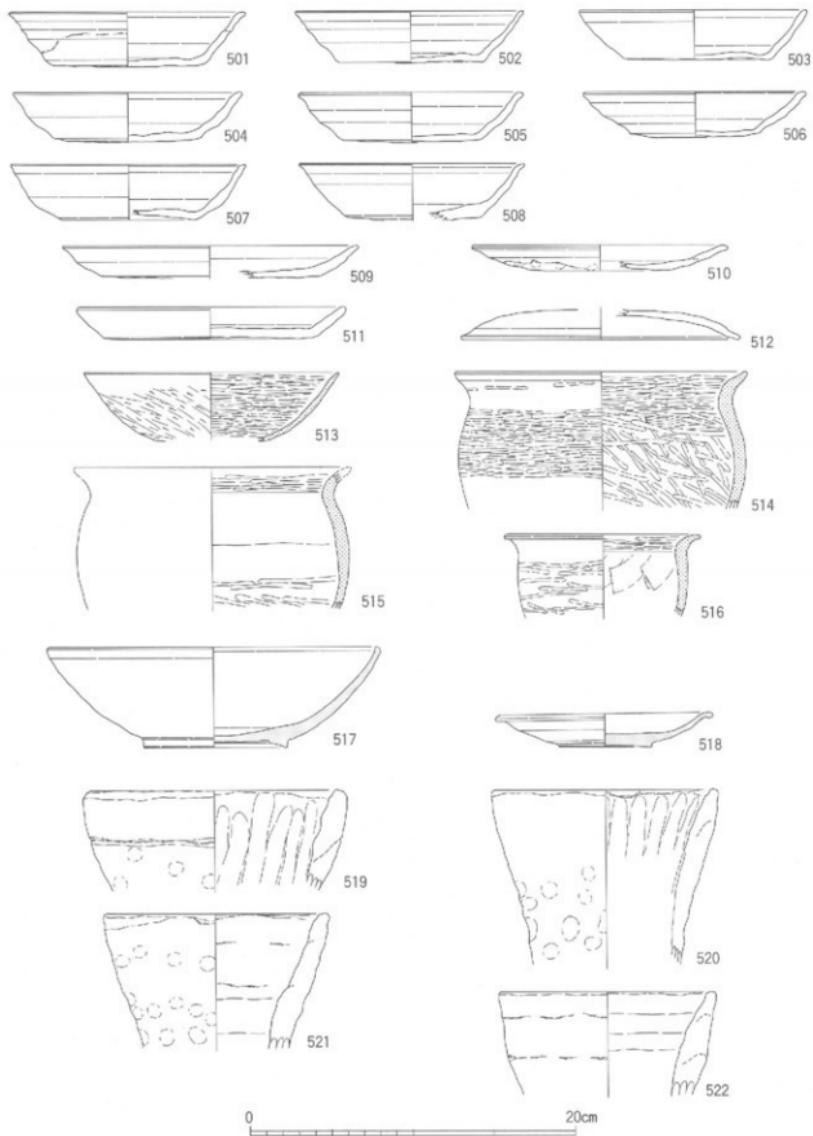


fig.128 SD 17出土の遺物(1)

など様々である。胎土に砂粒を多く含み、全体的に粗雑感がある。519は赤色化し、被熱による剥離が認められる。細片化しており、底部まで器形の判明するものはないが、同一地点でわずかに確認されている底部と思われる破片から、全体の形状は尖底をもつ炮弾形になるものと考えられる。

523～527は須恵器杯である。口径は523がやや小さく12.5cmであるが、その他は13.2～13.8cmである。平底から外側にまっすぐ伸びる口縁を呈する。523・526が底部回転ヘラ切り未調整、その他はヘラ切り後にナデ調整が施される。526を除く杯の内外面には顕著な火ダスキ痕が残る。焼成はいずれも堅緻である。

528～530は須恵器の蓋である。529には中央が高くなったつまみが付く。直線的な天井部は同軸ヘラ切りの後回転ナデ調整され、そこから伸びる口縁部を外側に屈曲させる。つまみのない蓋の口縁端部は下方に突出するものである。

533は須恵器壺の口縁部である。口径22.2cm、外側に伸びる口縁は強く屈曲する。

534・535は釣と考えられる鉄製品である。534は断面方形で先端が残る。

536は砂岩製の砥石である。長さ9.4cm、幅11.9cm、厚さ5.7cm。上面および左側面の2面での使用痕が顕著である。裏面の一部にも平滑面があるが、磨り痕は認められない。

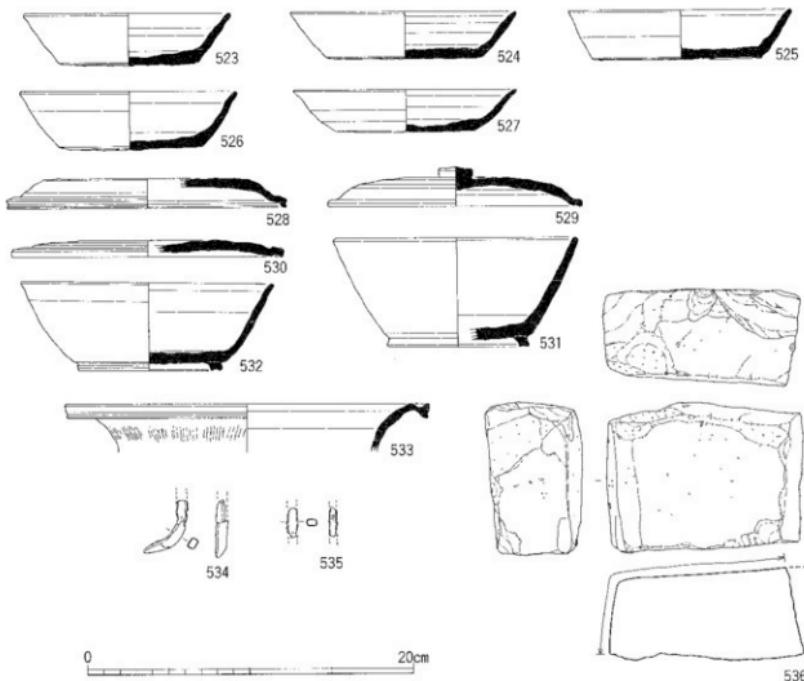


fig.129 SD 17出土の遺物(2)

S D 27 調査区の東半で検出した幅約2mの溝がX字状に交わったような形状の溝である。西北に延びる部分はS D 17と交わり、この交点付近から製塙土器が集中して出土している。最大幅約4m、検出長は南北約20mである。南側はS D 17同様に徐々に不明瞭になり、土坑状の浅い溜まりとなって消滅する。この溜まり状の部分に遺物が集中して出土した。

537は土師器皿、538は高い高台の付く土師器碗である。538は口径14.5cm、器高6.3cm、外側に聞く高台は部体とともに薄いつくりである。

539・540は土師器の壺である。540は口径27.0cm、直線的な体部から「く」字形に広がる口縁部をもつ。外面は粗い刷毛調整のみである。

541は製塙土器片である。口縁端部をヘラ状の工具で押さえ、平らな面をつくる。体部の外側には指頭圧痕、内側には強いナデ痕跡が残る。

542は平底の、543は低い貼り付け高台の付く須恵器杯である。543は上方がやや外側に強く聞く口縁をもつ。底部外面は回転ヘラ切り本調整、内面の見込み中央が不自然に凹み、うすく「×」のヘラ記号が見られる。

544は残存長6.0cm、釘とおもわれる鉄製品である。断面は方形を呈する。

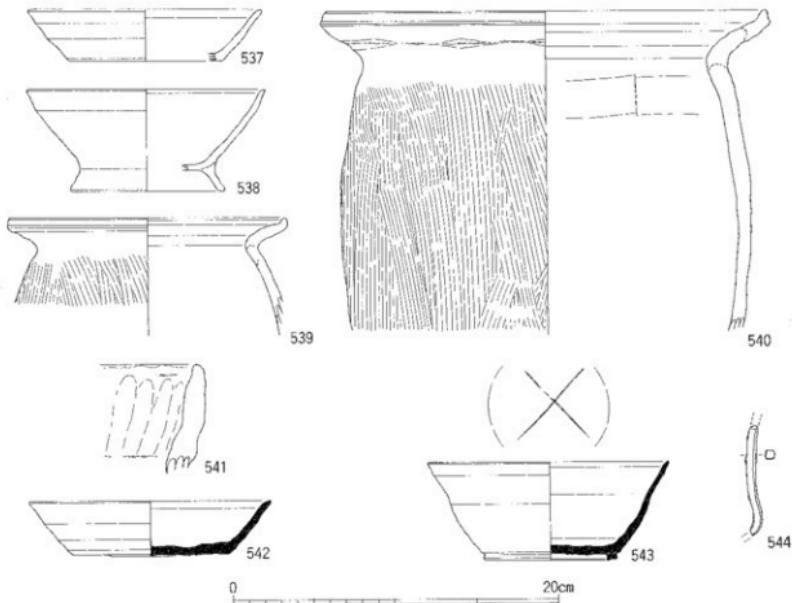


fig.130 S D 27出土の遺物

3. 平安時代中期～後期の遺構と遺物（第2遺構面・第1遺構面）

一部で同一層を基盤層とする第2遺構面および第1遺構面において平安時代中期～後期の遺構を確認した。第2遺構面では掘立柱建物3棟、溝18条、土坑8基、落ち込み4基、柱穴約230基、第1遺構面では掘立柱建物3棟、溝6条、土坑3基、落ち込み1基、柱穴約80基を検出した。ここでは調査段階での状況について記述を行い、建物など遺構の配置や関係、調査区内での変遷については後述したい。

(1) 第2遺構面の遺構と遺物

i) 掘立柱建物

S B04 東西1間(2.0m)×南北2間(4.0m)の建物である。柱穴の掘形は梢円形で、長径約0.40m、北東隅のPit401は深さ0.40mであるが、残りは深さ0.10～0.25mで、浅くばらつきがある。一部の柱穴の底に径0.10mの小穴があり、柱材の沈み込みの痕跡とも考えられるが、柱材の径とすれば小規模な建物であろう。時期の判明する遺物は出土していない。

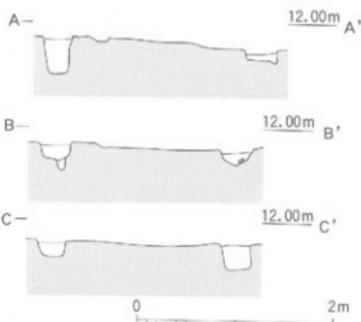


fig.131 S B04

S B05 東西3間(3.0m)×南北3間(6.0m)の総柱の建物である。柱穴の掘形は円形または隅円方形で径(一辺)0.30~0.40m、深さは0.20~0.40mを測る。Pit502とPit507には拳大の礫が縦方向に立った状況で据えられている。また、Pit504からは小木片が出土しているが、柱材からは不明である。Pit501から土師器の皿と小皿が出土している。

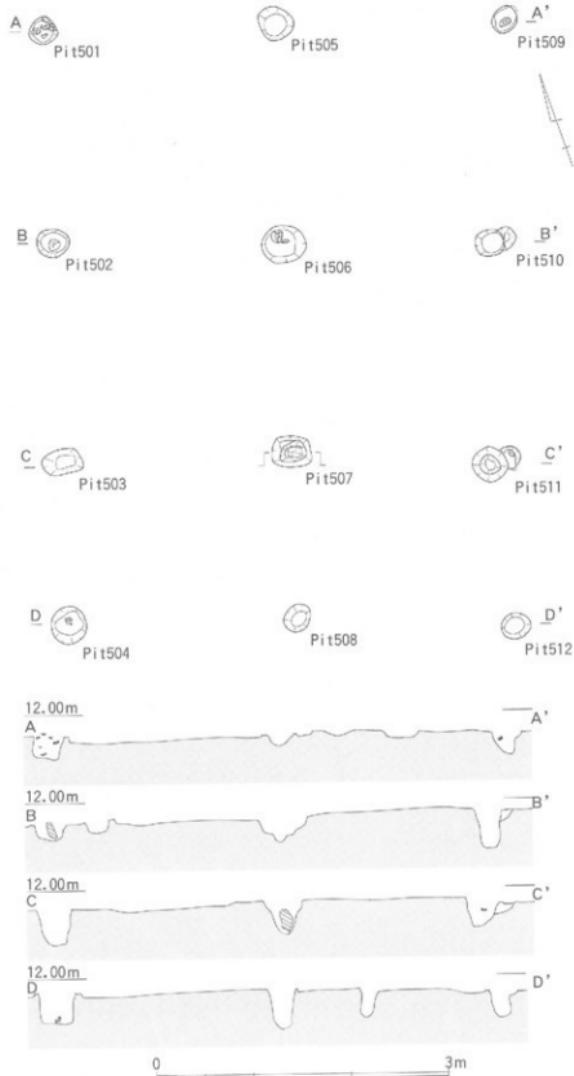


fig.132 S B05

545～547はいずれも口径8.4cmの土師器小皿である。546のみ薄手に作られるが、他は口縁部に丸味を持たせ、外側にやや屈曲させる。口縁部は強い横ナデ、底部にかけてはナデ仕上げと指頭の痕跡が顕著に残る。

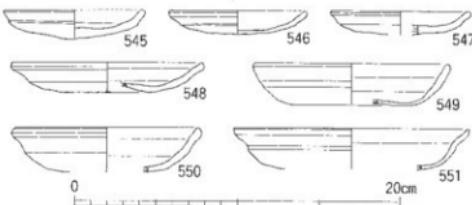


fig.133 S B 05—Pit 501出土の土器

548～551は上師器の皿である。548は口径11.5cm、器高1.8cmの浅い皿である。底部にナデ調整と指頭圧痕が明瞭に残る。

549は口径11.8cm、器高2.5cmを測る。全体に強いナデによる調整を施し、器壁を薄く仕上げている。

550は口径10.1cm、器高2.7cmを測る。やや肉厚で、体部を丸く立ち上げた後、口縁部をわずかに「く」字形に外反させる。

551は口径14.4cm、器高2.5cmを測る。器壁が薄く、全体に丁寧にナデ調整が施されている。底部から体部にかけてやや内傾するように丸みを持たせて立ち上げた後、口縁下で外側に強く屈曲させ、端部は上方へやや突起させるように取めている。

S B 06 調査区の北西隅で検出した建物である。大半が調査区外に拡がるため、規模は不明である。東西1間以上(1.8m)×南北4間以上(6.4m)の総柱の建物である。柱穴の掘形は円形を呈し、直徑は0.40～0.50m、深さは0.20～0.30mであるが、Pit 602のみ南北長0.60m、南側にやや拡がった形状となっている。深さも底部の北側では0.80mを測り、柱材が深く押し込まれたような状況となっている。形状の変化は柱の抜き取りに伴うものかと考えられる。土師器杯(552～554)、須恵器椀(555)が出土している。

552は口径13.6cm、器高3.5cmである。体部は回転ナデによる調整が施される。底部は不定方向のナデ仕上げに加え、指頭圧痕が顕著に残る。また、底部外面には叩き板様の痕跡が残る。

553は口径13.5cm、器高3.2cmを測る。体部は口縁端部に向けて直線的に延びる。底部にはヘラによる切り離しの痕跡かと見える凹凸があるが、不定方向のナデによる仕上げの感が強い。併し、ナデ仕上げの痕跡も不明瞭である。

554は口径13.4cm、器高3.1cmである。底部と体部の境に屈曲があるが、粘土の積み上げの際のわずかな段であろう。体部は直線的に立ち上げ、口縁端部をやや外反させる傾向が認められる。粘土に最大8mm大的チャートを含み、全体にやや粗い感がある。

555は高台付きの須恵器椀である。口径14.9cm、器高5.5cm、底径7.5cmを測る。体部は内湾してやや丸味を帯びながら立ち上がり、口縁端部は強い回転ナデによりやや外反し、シャープな形状となる。回転ヘラ削り調整の後、回転ナデによる仕上げが施されるが、体部下半には削りっぱなしの部分が残る。底部は回転ヘラ切り未調整である。高台は高さ0.8cmで、端部は内側に内傾する。焼成は堅敏で、内面に灰かぶりによる自然釉が付着、外面には明瞭な火ダスキーの痕跡が認められる。



fig.134 S B06

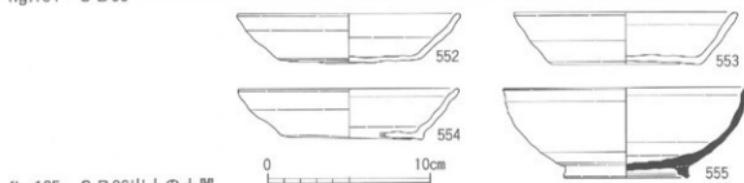


fig.135 S B06出土の土器

S B 07 整理段階で柱根あるいは基礎が遺存した柱穴が並び、建物を構成することが判明した。復元できた建物は南北2間（約4.3m）×東西3間（約8.6m）の総柱の建物である。個別に実測した柱根の出土状況図をもとに検討すると柱穴の径は0.20～0.50mとばらつきがあり、平面形も円形を主としながらも、歪な円形、隅円方形、楕円形と様々である。深さは0.40～0.60mである。Pit701・702・703・707・710の5基に柱材あるいは基礎が遺存していた。図化し得た遺物は須恵器碗2点、平瓦1点である。

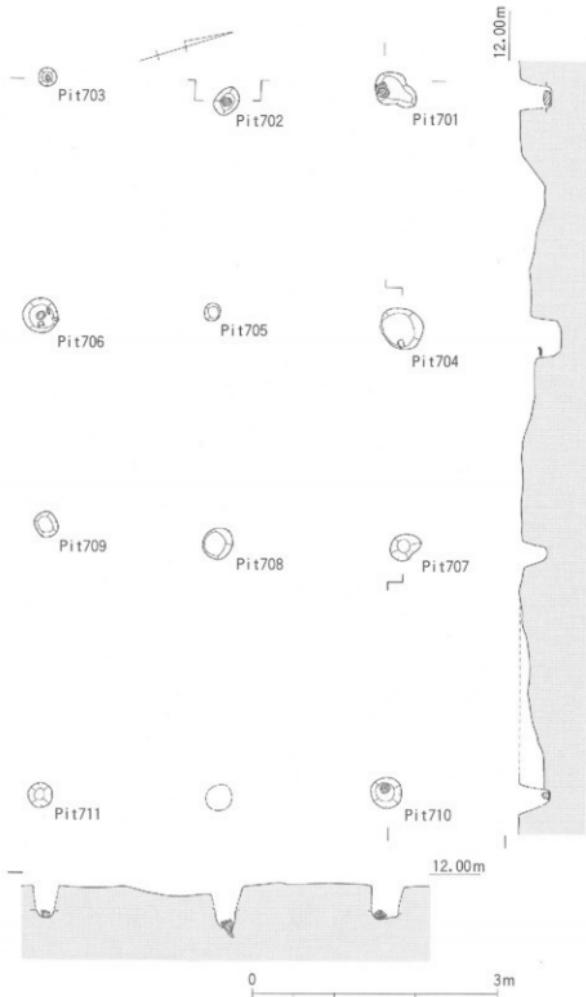


fig.136 S B 07

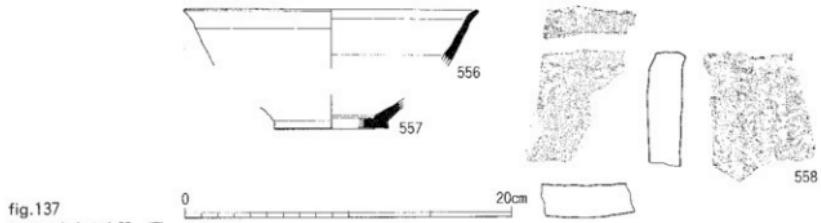


fig.137

S B07出土の土器・瓦

556は径17.8cmに復元される須恵器の楕の体部片である。回転ナデ仕上げで、口縁端部をさらに強いナデによりやや外反させて仕上げる。色調は淡灰白色を呈し、焼成は甘いが、胎上には0.5~1.0mmの砂粒をわずかに含む程度であり、精良である。

557は須恵器の楕の底部片である。底径7.0cm、外側は回転糸切り未調整である。内面の立ち上がりは沈線様に強く押さえられ、非常にシャープなつくりである。見込み部分が凹み形状をもつものかと思われる。その他の部分は回転ナデ仕上げである。

558は平瓦の狭端面の一部かと考えられる破片であるが、全体の大きさは不明である。ほぼ中央に近い部分が遺存するものと考えられ、ここでの厚みは2.0cmを測る。端部の内側を幅約1cmで面取りする。凹面の布目模はナデによりスリ消されているが、半分ほどは顕著に残った状態である。凸面はナデ消しにより明確ではないが、縱方向に叩きが施されたと思われる。硬質ではあるが、生焼けの状態である。

S B07の柱穴からの出土材はすべてカヤ材と同定されている。559は樹心の残る削材で、長さ10cmの柾目材である。樹皮側の一端を丁寧に面取りし、この面を上に向け据えられていた。560~563は削材の先端を細かく削り出し、尖らせた材である。560・562は細かい面取りが施されている。長さは5~10cmで木口面を上に据えている。当初は切り離された柱材の残材が腐食したものかと思われたが、木口面も平らに削り出され、切られたにしては拗形のかなり下方で切断された状況となり理解し難い。柱を据える際の余剰材を礎石の土台に用いられるような杭の役割を果たすものとして用いたものであろうか。

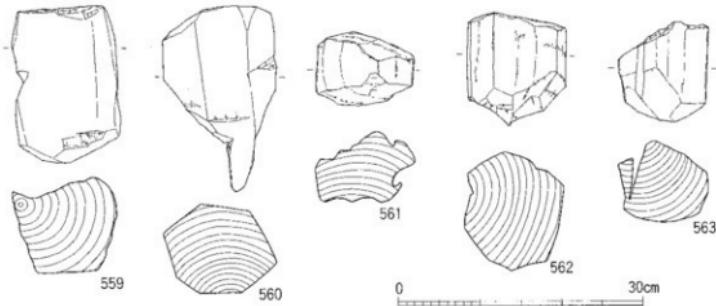


fig.138 S B07 Pit出土の柱材と礎盤

ii) 溝

S D03 調査区の南端、南下がりとなる傾斜変換点で検出した溝である。調査区を東西に横切り幅2~3m、長さ約16mを検出した。溝の南肩部、西端では大きく膨らみ、平面形態は不明瞭なものとなる。浅い落ち込み状を呈し、この部分での幅は約5mを測る。溝内からの遺物の出土はわずかであるが、南に続く湿地状の落ち込みにかけての部分から土師器、須恵器の柄が流れ込んだ状況で出土している。

S D04 北から約20m南流した後西側へと曲がる溝である。西側へと折れた後の溝の幅は1m、中央部分では幅約4mを測る。北端では北東から南北方向の複数の溝と交わるために底面の凹凸が多く、複雑な形状を呈する。調査区北壁で確認した溝の幅は最大で約10mを測る。後述するS D06などもS D01の一部に含まれるものであろう。北端での溝の深さは0.30m、南へ向けて深さは減する。西に折れた後の溝の深さは約0.10mである。中央付近から以南の埋土は暗灰色粘質土の単一埋土であるが、幅広部では灰褐色砂質土や所々に炭層や炭混じりの堆積層が認められる。第2遺構面で検出したS D17の上層にあたり、自然河道の埋没する最終に近い段階の堆積を溝状遺構と捉えたものであろう。したがって、溝としてはS D06から延びる南北部分がその本来の形態と考えられる。

出土遺物は土師器、黒色土器、須恵器の他、瓦、鉱滓、鉄器、石製品、銅鏡【昌和承宝(835年初鉄)】が出土している。また、中央付近、S D06と重なる部分の溝底には甕を埋納した遺構であるS X01がある。甕を埋納した意図については不明であるが、S X01を中心として周辺のS D04からS K02にかけての底部あるいは肩部から銅鏡や土師器皿がまとまって出土しており、炭や焼土が分布する状況は特筆される。

564~569は土師器の杯である。体部は回転ナデにより仕上げられるが、やや重な製品を含む。

564は口径13.1cm、器高3.1cmで、底部外側は回転ヘラ切り後にナデ調整を施す。体部下半の立ち上がりが直である。

565は口径14.2cm、器高3.4cm。底部からの立ち上がり部分の接合が不完全で、粘土縫の積み上げの痕跡を残す。底部外側には回転ヘラ切り後の指頭圧痕が明瞭に残る。

566は口径13.1cm、器高2.9cm。底部内・外側ともに指押さえの痕跡が明瞭に残る。

567は口径15.1cm、器高2.9cm。底部外面は回転ヘラ切り後、わずかにナデ調整を施している。

568は口径14.2cm、器高3.2cmを測る。底部内面に指頭圧痕が明瞭に残る。567・568はやや口径が大きく、薄手のつくりである。

569は口径12.5cm、器高2.7cm。底部は回転ヘラ切り後にナデ調整されたと考えられる。

570は口径10.2cm、器高3.5cmの小型の杯である。底部外面は回転ヘラ切り調整で、体部はまっすぐに延び、罐部を丸く収める。

571・572は土師器の皿である。571は口径14.9cm、器高1.5cm、572は口径13.8cm、器高1.8cmを測る。底部外面には並行する筋状の痕跡が残り、ヘラ状工具で切り離した後、同じ工具でナデ調整、さらに指頭による仕上げのナデ調整を行ったものかと推測させる痕を残す。

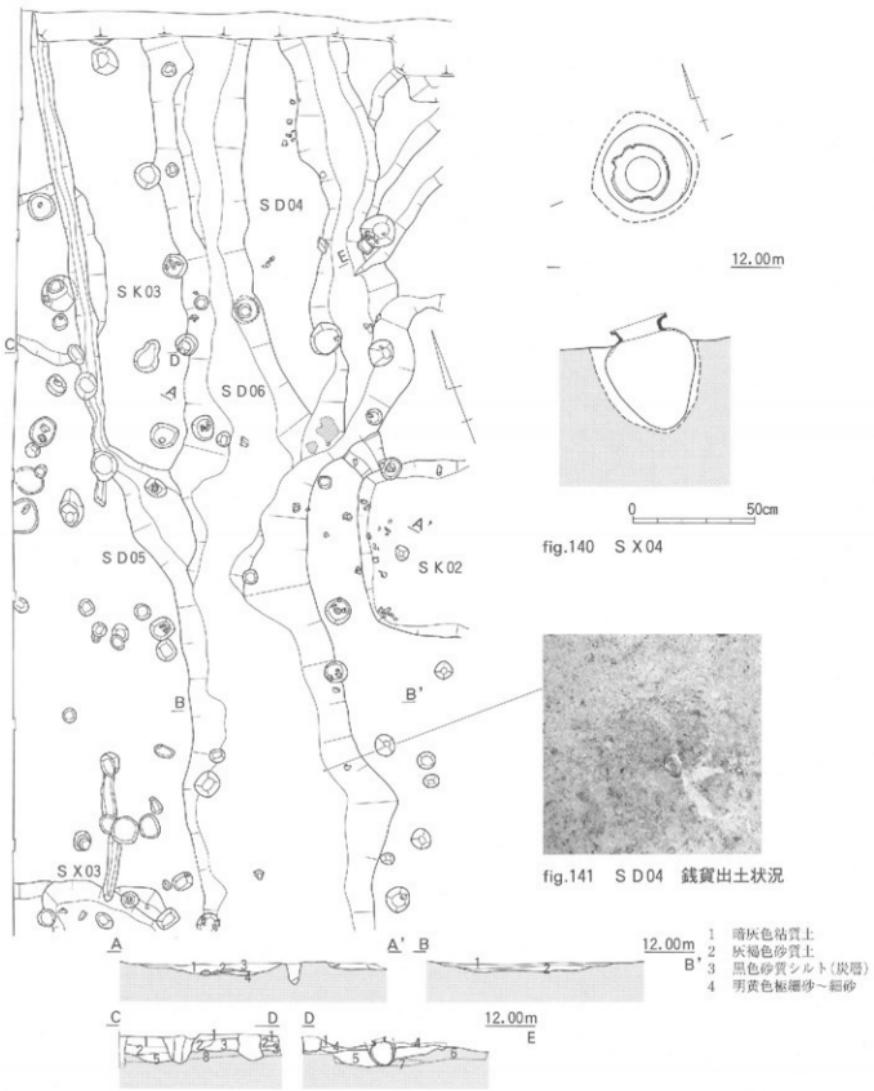


fig.139 SD04周辺の遺構

573～577は土師器の壺、578は土師器の鉢である。573は壺の口縁部片で口径31.6cm。直線的な体部から「く」字形に屈曲する幅広の口縁をもち、端部は上方につまみ上げる。

574は直線的な体部から如意形にわずかに外反する壺の口縁部である。口径24.9cm、端部は丸く收められるが、上面にわずかに凹状の部分をめぐらす。口縁下のくびれ部を除き、外面は縦方向の刷毛による調整、内面は口縁部横方向の刷毛調整、体部はナデ調整を施す。

575は口径16.4cmの壺の口縁部である。「く」字形に外反し、端部はシャープな平坦面を

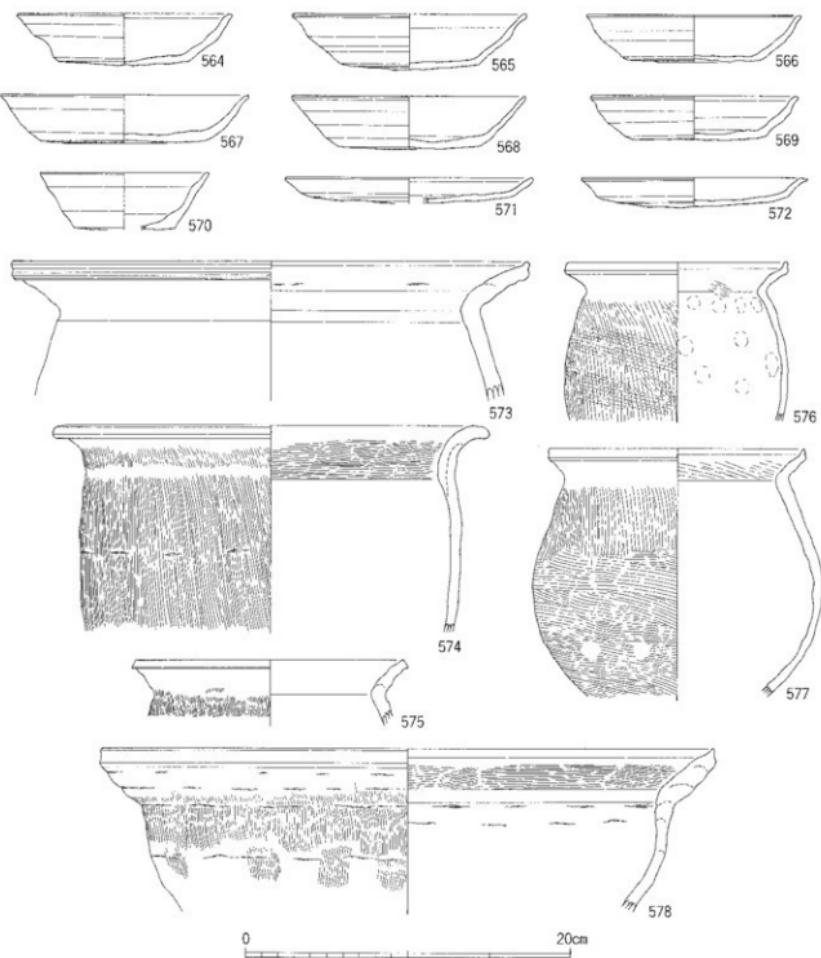


fig.142 S D04出土の遺物(1)

つくる。体部外面は細かい縦方向の刷毛調整が施される。煤の付着が顕著である。

576・577も、「く」字形に外反する口縁をもつ甌であるが、端部は強いナデにより上方につまみ上げられる。576は口径13.4cm、体部も口径とほぼ同径であるが、577は口径15.6cm。体部の中央よりやや下方が膨らむ。いずれも外面は横方向の後、縦方向の刷毛による調整が施され、内面はナデ調整、指頭圧痕が残る。わずかに煤の付着が認められる。

578は口径37.6cm、内湾した体部から厚みのある口縁部をやや直線的につくり出す。端部は強い横ナデにより上方に突起する。体部外面は縦方向の刷毛により、口縁内側は横方向の細かい刷毛調整が施される。体部から口縁への屈曲部、体部上半に粘土紐積み上げの痕跡が残る。

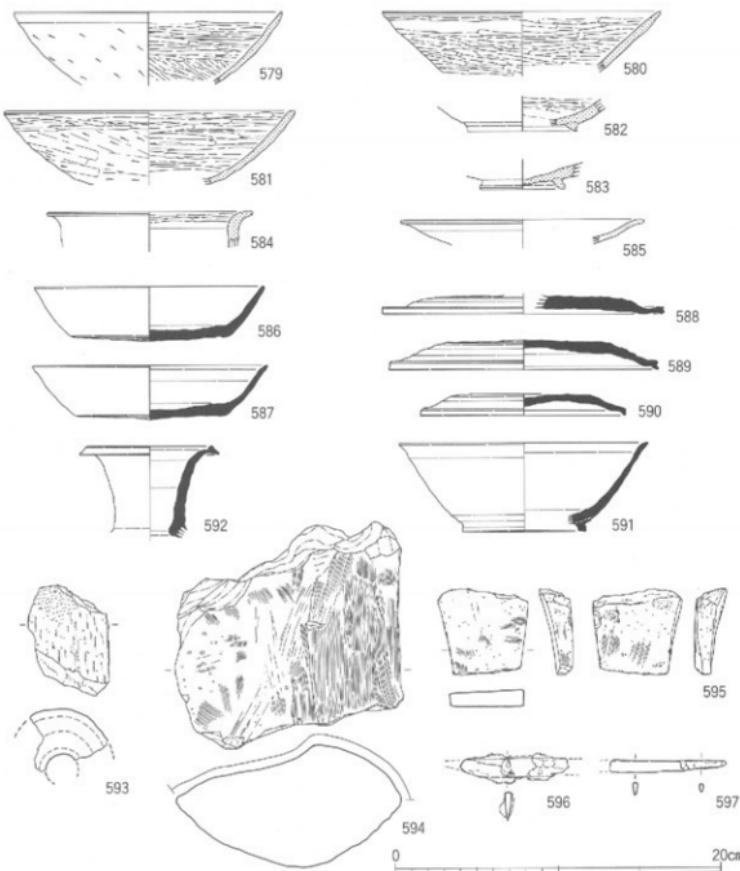


fig.143 SD 04出土の遺物(2)

579～584は黒色土器である。579～581は黒色土器柄の口縁部で、それぞれ口径は16.4cm、17.0cm、17.6cmを測る。580は直線的、他の2点はわずかに内湾する部をもち、口縁端を丸く収める。内面はいずれも横方向の細かいヘラミガキ調整が施されるが、579の体部下半には左上がりのミガキ痕が残る。580のみ外面も横方向の細かいヘラミガキが施される。他は左上がりのヘラ削りによる調整が施され、579は非常に細かく、逆に581は粗い調整痕となっている。

582・583は黒色土器壺の底部片である。582には断面三角形の低い高台が、583には端部を外側につまみ出し、丸く収めた高台が付く。残存長が2.0cmほどで明らかでないが、外面はナデ調整、内側は横方向のヘラミガキ調整である。

584は黒色土器壺の口縁片である。径12.4cm、残存長2.2cm、ほぼ水平に折り曲げられた口縁の端部は非常に薄くつくられる。内側に横方向の細かいヘラミガキ痕が残る。

585は縄釉陶器の皿の口縁片である。径14.4cm、焼成は硬質で、淡乳灰色を呈する砂粒をほとんど含まない精良な胎土である。

586～591は須恵器である。586・587は杯で、それぞれ口径は14.0cm、14.4cmである。平底から斜め上方にまっすぐに延びる体部で、口縁はナデにより薄く仕上げる。底部外面は回転ヘラ切り未調整で、その他の部分は回転ナデを施す。火ダスキの痕跡が残るが、583にはそれとはやや様相の異なる赤色化した部分があり、二次的な被熱の可能性もある。

588～590は蓋である。口径はそれぞれ17.2cm、16.5cm、12.5cmである。588の直線的な天井部は回転ヘラ切り未調整で、下方に向けた口縁を端部で水平やや上方に延ばし、外側の面に沈線を入れて平らに仕上げている。つまみは失われている。589はつまみの付かない杯蓋で、同じく直線的な天井部は回転ヘラ切り未調整で、口縁端部は斜め下方につまみ出して突出させる。灰かぶりによる自然釉の痕跡が顕著である。590はやや小振りな杯蓋である。天井部は回転ヘラ切り未調整で中央が窪む。口縁部は下方に折り曲げられる。

591は高台付き椀の破片で、口径15.3cm、器高7.5cm、底径7.5cmを測る。口縁端部は強い横ナデにより外反し、薄手である。高台は底部の平坦な台形を呈する。

592は壺の頸部の破片である。口径7.6cm、残存長15.6cmである。内外面に灰かぶりによる自然釉が付着する。緩やかに外反しながら延びる口縁端部は上下方に強く突出し、三角形に近い。回転ナデ調整により外側は平らに仕上げられる。

593は残存長約7.0cmの縁の羽口片である。復元径6.5cm、内側の孔径は2.0cmと推定される。スサmajiriの粘土で成形、焼成され、本来の色調は灰色を呈するが、先端部は火を受け、高温により気泡が癒着している。また、内孔側より暗橙色、淡橙色、淡黒灰色～暗紫灰色と色調が変化するほどの被熱状況がみられる。

594・595は砥石である。594は大型の砥石で、長さ14.0cm、幅14.0cm、厚さ7.4cm、断面はしづく形とも言えようか。材質は砂岩で下面には自然面を残す。使用痕の残る面の右側面がわずかに弧を描く形状が気になる。595は小型の砥石で長さ5.3cm、幅5.5cm、厚さ2.0cm、凝灰岩製である。片面のみ使用される。2点とも二次的な被熱が確認される。

596・597は同一個体かとの考えられる鉄製品である。断面の形状から刀子のようなものかと考えられるが、明確ではない。

- S D 05 調査区北西端で検出した溝である。幅0.40~0.50m、深さは0.20mで、南北の長さ約10mである。南側はS D 04を切り込み、以後同一の流れとなるが、S D 04がほぼ埋没した段階に流れ込んだものと推測される。土師器、須恵器の小片がわずかに出土した。
- S D 06 調査区北端で検出した幅1.5~2.0m、深さ0.30mの溝である。S D 05と並行する南北方向の溝で、S D 05と同様、南端はS D 04の上層から切り込む。調査区北壁での上層観察の結果、大きくはS D 04の堆積に含まれるものと考えられる。S D 04との境にS X 04があり、周辺から土師器皿の出土を見た。
- S D 07 調査区中央西端で検出した幅1.0m、深さ0.10mの東西方向の浅い溝である。東端はS D 04に注ぐ。遺物は出土していない。
- S D 08 調査区外に拡がるため全体の規模や形状は不明であるが、南北約13m、幅0.40mの溝とした。深さは0.10mと浅いが、南端に南北2.0m、幅0.60m、深さ0.30mの土坑状（S K 04）を呈する部分がある。遺物は上坑部分から須恵器片が出土したのみである。
- S D 21 調査区東北部で検出した幅1.5m、深さ0.30mの東西方向の溝である。東で検出したS D 20とともに大きくはS D 04に続く流路の上部堆積かと考えられる。土師器の杯・甌、須恵器杯の他、図化し得なかつたが、ミニチュアかと考えられる土師器の小型壺の小片が出土している。

598は土師器の杯で、やや外反しながら直線的に延びる口縁部をもつ。全体にナデ調整が強く、粘土の接合部は明瞭な稜をなす。底部にはナデ痕跡、指頭圧痕が顕著に残る。

599は復元径24.4cmの土師器甌の口縁部である。体部の外面は細かい縱方向の刷毛、内面は口縁内側から体部上部は横方向の刷毛による調整が施され、体部下半には粘土紐の接合痕が残るものとの比較的丁寧にナデにより仕上げられる。

600・601は須恵器杯である。口径はそれぞれ14.0cm、14.4cm、器高は3.7cm、3.4cmである。底部外面は回転ヘラ切り後、ナデ調整され、さらに601には幅4mmの叩き状の痕跡がある他、体部全面に明瞭な火ダスキーの痕跡が残る。

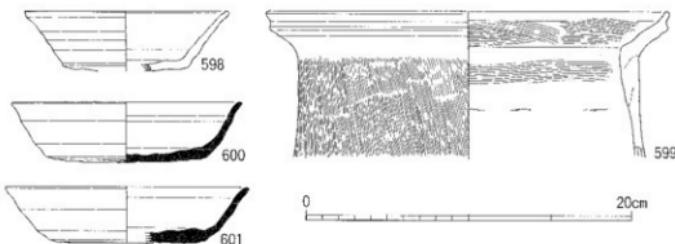


fig.144 S D 21出土の土器

その他の溝 調査区の南北を中心には幅約0.30m、深さ約0.10mの南北方向の溝を10条、東西方向の溝を4条検出した。いずれも規模が小さく、遺物は土師器、須恵器の小片がわずかに混じる。東西方向の溝のうち3条は南端の落ち込みの中で検出された。長いもので6m前後、短いものは1.5mほどである。上層の水田耕作に伴う耕作痕である可能性が高い。

Ⅲ) 土坑・落ち込み

- S K01 調査区中央北端で検出した落ち込みである。形状は長径約2mの梢円形を呈するものと考えられる。調査区北壁での断面観察からは、S D01もしくは下層流路の堆積に含まれる可能性もあるが、明らかにしきれなかった。埋土中には炭が多く含まれる。
- S K02 一辺約2.5mの方形の土坑である。深さは約0.20mで、埋土の灰色粘質土、淡黒灰色粘質土、灰褐色砂質土のいずれにも炭のブロックや焼土が混じり、全体に炭の混入が多い。出土遺物は土師器の杯・甕、須恵器の碗などである。その他に被熱した礫の混入が目立つ。

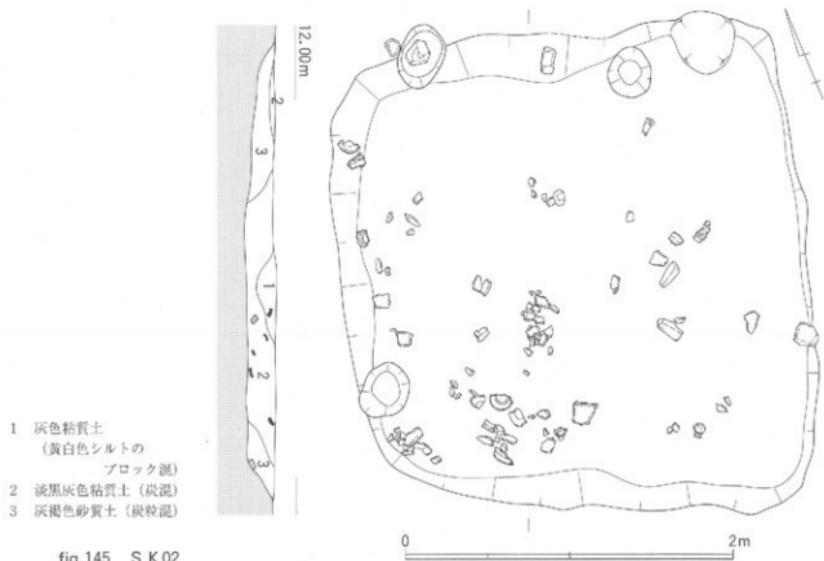


fig.145 S K02

602・603は土師器杯である。口径はそれぞれ13.1cm、9.0cmで、603は小型の杯である。602は口縁端部内面をわずかに凹ませ、平坦面をつくる。底部は内外面ともに指押さえの痕が顯著である。603は底部から直線的に立ち上がる口縁をもつ。底部は薄く仕上げられるが、体部は厚身である。

604は小型の土師器甕である。口径13.1cm、残存長5.9cmである。全体に摩滅がすすむのか、調整痕が明確でないが、体部外面は縱方向の刷毛の後、ナデによる仕上げ、内面から口縁にかけては横ナデ、一部指圧痕が顯著である。口縁部は斜め上方に広げた後、端部をまっすぐつまみ上げる。

605・606は高台付きの須恵器碗である。口径は16.2cmと15.0cm、器高は6.0cmと5.0cm、体部は605がやや内湾しながら立ち上がるのに対し、606は底部から体部への境が鋭角で、やや新相を表すものと考えられる。高台についても606は扁平で低い。底部外面は回転ヘラ切りで、605はその後ナデ仕上げ、606は未調整である。いずれも成形、調整とともにシャー

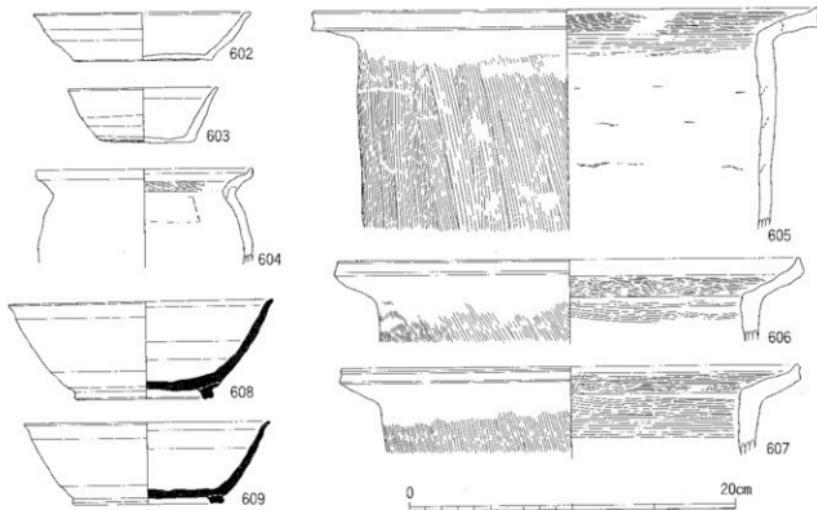


fig.146 SK 02出土の土器

ブなイメージを与える。

607～609は土師器壺である。直線的に延びる体部からわずかに斜め上方に広がる口縁部をもつ。607の口縁端部は真ん中を凹ませ、上下につまみ出し、その他は上方のみをわずかに突出させる。体部外側と口縁内面は細かい刷毛による調整が施されるが、体部内面には粗い横方向の刷毛目が残る。下半にはナデが施される。

SK 03 調査区外に拡がるため、全体の規模は不明である。長径約3m、短径約2mのやや隅円方形を呈する土坑になるものかと考えられる。埋土は灰色粘性砂質土の單一層で、深さ約0.15mの浅い溜まり状の遺構である。遺構内からはほとんど遺物が出土していないが、肩部や遺構周辺のからいいずれも縞片ではあるが、土師器片・須恵器片の他、断面方形の鉄釘かと思われる鉄製品の一部や低石が出土している。遺構の東肩部がSD 06と重複し、SD 06の掘削中にSK 03を検出したため、わずかに残った断面を観察した結果、土坑は溝より後出する遺構と判断できる。

610は小型の砥石で、長さ6.0cm、幅3.4cm、厚さは2.5cmである。上下面には自然面を残す。右側面はわずかに使用された程度で、その他の3面に明瞭な磨り痕が見られる。



fig.147
SK 03出土の砥石

- S K07 直径約1.2mの円形の土坑で、深さは0.15mで、断面は皿状を呈する。埋土の大半は黒色シルトであるが、これは非常に微細な炭の粒子の堆積といえる。その他の埋土にも炭の混入が認められる。遺構内から土器は出土していないが、焼石が掘えられていた。調査の工程上、第2遺構面で検出したが、第1遺構面から切り込む遺構と考えられる。
- S K08 長径1.2m、短径0.80mの楕円形を呈する土坑である。深さは0.10mで、埋土は暗灰色砂質シルト、濁灰黄色細砂のやや砂質の強い層である。遺物は出土していない。
- S K09 長径1.4m、短径0.80mの楕円形を呈する土坑である。深さは0.10mで、浅い皿状を呈する。灰色砂質土の單一埋土である。遺物は出土していない。
- S K10 直径1.2mのやや歪な円形を呈する土坑である。埋土は暗黒灰色粘質土で、炭層と呼ぶに近い。出土遺物には土師器碗・皿、須恵器の碗、鉢、鉢、鉄釘があり、その他にもかなりの熱を受けた跡が数点出土している。検出状況から第1遺構面から切り込む遺構と考えられる。

611は土師器皿、612は土師器碗である。611は口径9.9cm、器高1.9cmの小皿である。平底から斜めに立ち上がり、水平に近く外反し、突出する口縁をもつ。

612は口径13.1cm、器高4.5cm、見込み部に凹みを有し、直線的で、端部がわずかに外側に折れる口縁をもつ。底部は水平ではなく、中央が窪む。土師器はいずれも底部外側は回転糸切り未調整である。

613～616は須恵器の碗である。613は口径13.2cm、615は口径13.0cmの小碗である。見込み部に凹みを有し、やや内湾しながら立ち上がる口縁をもつ。615は体部外側中央に1条の沈線をもつ。底部外側は回転糸切り未調整である。口縁端部に沿って灰かぶりによる暗灰色の自然釉が付着しており、重ね焼きの痕跡と考えられる。

614は口径14.6cm、616は口径17.2cm、器高はそれぞれ5.3cm、6.3cmを測る。616は小碗と同じく内湾する体部、見込み部に凹みをもち、口縁端部には強いナデが見られ、非常にシャープであるが、614の体部は直線的に延び、口縁端部はゆるく丸く取める。見込み部の凹みも明確でなく、全体的に鈍い感のする碗である。見込み部にわずかに火ダスキの痕跡が認められる。616の体部外側中央には615と同様、1条の沈線が巡る。底部外側は回転糸切り未調整である。

617は残存長3.0cm、径0.6cmの鉄釘である。

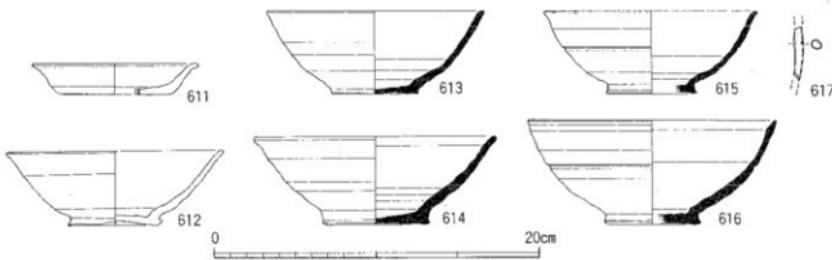


fig.148 S K10出土の遺物

- S X02 S D03の項でも触れたが、調査区の南側はS D03を境に緩やかな下がり地形となる。S X02は湿地状を呈する落ち込みである。遺物の混入も少なく、東端で小規模な溝を検出したに留まる。後述する第1造構面でも同様の下がり地形が確認されている。
- S X03 長辺約2.5m、短辺約1.8m、深さ0.10mのやや歪な長方形を呈する浅い落ち込みである。少量の土器と砥石2点、鉄器1点が出土している。埋土は基本的に灰色砂質土であるが、炭や粘土様の土がブロック状に混入している。
- 618は土師器の耳皿である。口縁部のほとんどを欠損しており、長径9.8cm、器高は2.5cmほどに復元できる。底部外面は粘土の凹凸があり、判然としないが、ヘラ切りとおぼしき痕跡が残る。下方外側に突出し、内側に段を有した高台を貼り付ける。貼り付け際の粘土紐の余剰が多く、側面からの指押さえによる変形も窺て、やや粗雑感がある。
- 619は釉が剥離した施釉陶器片であるが、器形より縁釉陶器皿と考えられる。残った素地から、直線的に外側に延びる口縁端部は水平に強く屈曲する。体部下半は回転ヘラ削り調整、口縁部から内側は回転ナデにより丁寧に仕上げである。
- 621・622は砥石である。621は長さ6.1cm、幅5.9cm、厚さ6.3cm、断面正方形の砥石である。上面および裏面に自然面が残る。622は小型の砥石で、長さ6.0cm、幅4.0cm、厚さ1.3cmである。側面にはあまり使用された痕跡が認められないが、その他の面は磨り痕が顕著である。
- 623は釘の頭部分と考えられる鉄製品である。残存長1.6cmである。
- S X04 S D06とした、大きくはS D04に含まれる溝の肩部で検出した理発造構である。埋納直構としたが、甕の周囲の土質の変化はわずかで、断ち割りの結果からも掘形があったのかは判然としなかった。したがって甕がどのように埋められたか、あるいは据付けられたのが明らかでない。やや西に傾く状況で出土した須恵器の甕（624）は口径22.6cm、器高43.9cm、色調は淡灰色を呈するものである。体部外側には左上がりの刷毛目、上半部には細かいカキ目が残る。底部には細かいひびが入り、粘土紐の積み上げ痕跡と思われるが、水平のものばかりではなく、また摩滅したのか成形によるものか、かなりツルツルとした感触となる。焼成後に外側から穿たれた径5mmの孔があり、内面には円弧状の当て具痕が残る。検出時、甕の内部には土が充填しており、内部のレントゲン撮影を行ったが、特に内容物は確認されなかった。次に内部の土質を確認しながら土壤洗浄を行った。底に直径3cm大の小石が10点ほど詰まっていた他、底部近くに有機質の土壤が薄く堆積しているのが確認できた。例え木製の蓋のようなものを被せ、それが落下した痕跡を示すものかとも思われる。この部分の直上には小礫が混じるが、残りは溝の埋土と同じであった。溝の埋土からは判然としないが、わずかに水流があった段階に埋められたのであろうか。
- S X05 長軸約8m、短軸約2.5mの隅円長方形を呈する、浅い溜まり状の落ち込みである。埋土には炭の粒子を多く含む。南側最深部で約0.40mを測り、出土遺物も南側に集中する。土師器、黒色土器、製塙土器、須恵器、瓦、鉢洋、鉄製品などが出土している。完形品が多く、埋土の状況からも一括投棄に伴うものと考えられる。大型の土坑状としたが、北側はS D20やS D21に続き、また第3造構面S D27の上部にあたることなどから、自然河道の最終埋没過程の緩やかな流れの段階で投棄されたものかと思われる。

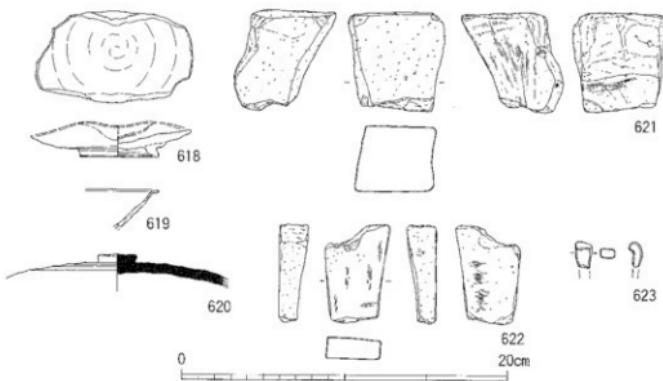


fig.149
S X03出土の遺物

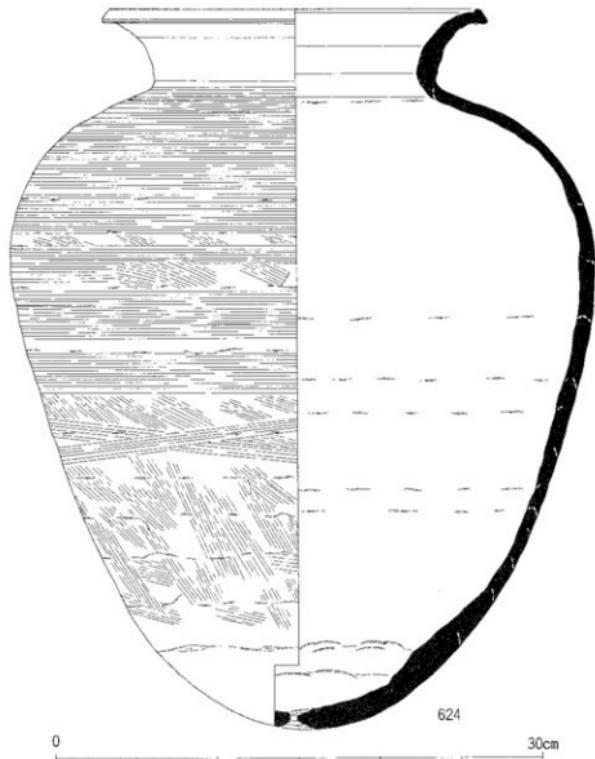


fig.150
S X04出土の土器

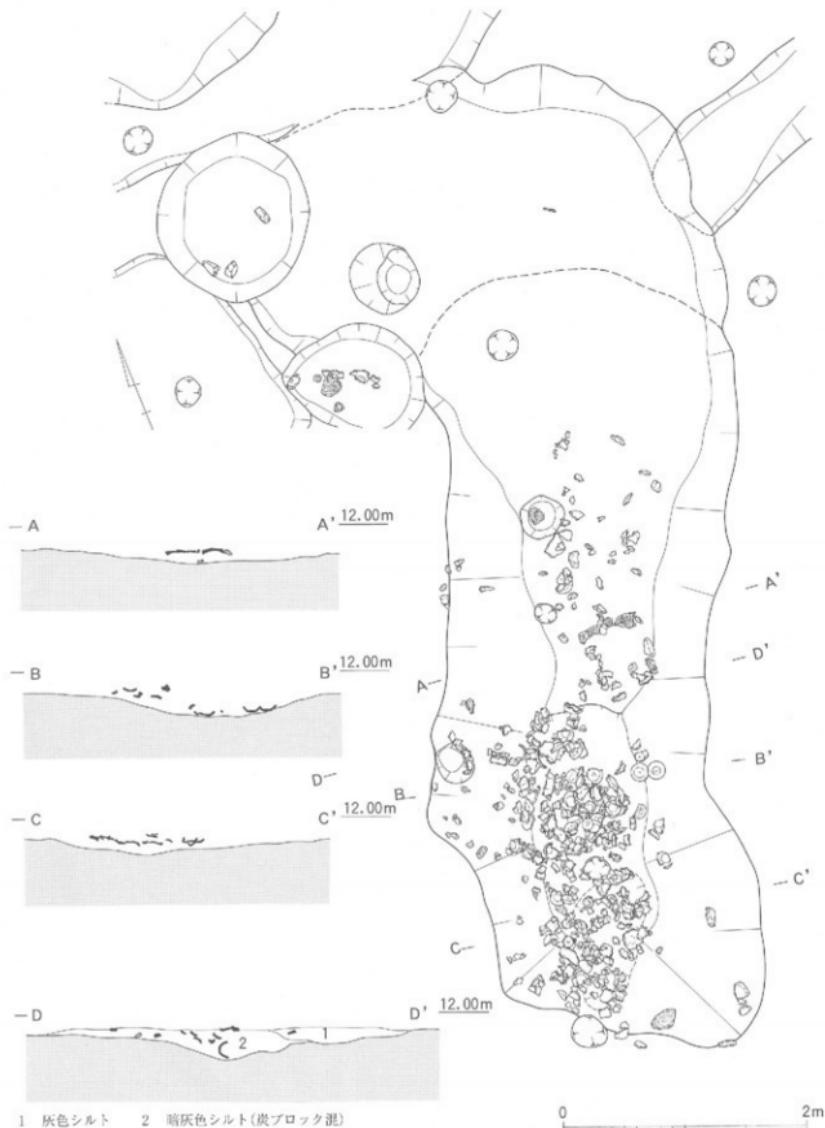


fig.151 S X 05

625～651は土師器である。625～639は杯である。口径は13.2～15.1cm、器高2.7～3.4cmで、ほぼ口径14.0cm、器高3.3cm前後に規格化された製品の一群である。外面は回転ナデ仕上げ、内面の見込み部分は不定方向のナデによる。625～633は外反する口縁をもち、底部から体部、ともに非常に薄いつくりである。634～639はやや厚手の底部をもち、体部の前者に比べて肉厚感がある。633～636はわずかに外に聞く口縁をもつが、637～639の外方への開きはわずかである。底部外側の調整痕跡であるが、いずれもナデによる凹凸が顕著

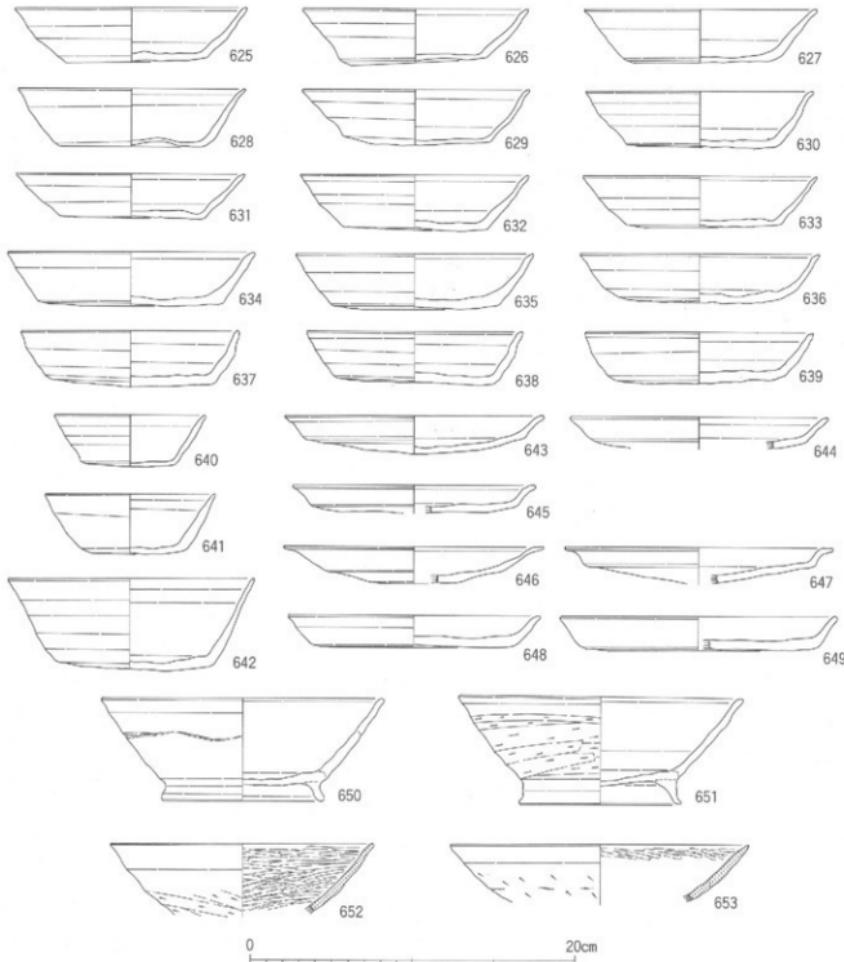


fig.152 S X 05出土の遺物(1)

である。一部にはヘラ状の工具の痕跡かと考えられるものがあるが、ヘラ切りの痕跡とするには確実性に乏しい。

640・641は小型の杯である。640は口径9.2cm、器高3.2cm、638は口径10.4cm、器高3.6cmを測る。底部外面にヘラ切り痕、体部は回転ナデによる調整である。底部からのたちあがり部分に指頭圧痕が残り、ナデによる調整痕が顕著である。

642は口径15.2cm、器高5.5cmを測る杯である。底部外面は回転ヘラ切りによる切り離し、

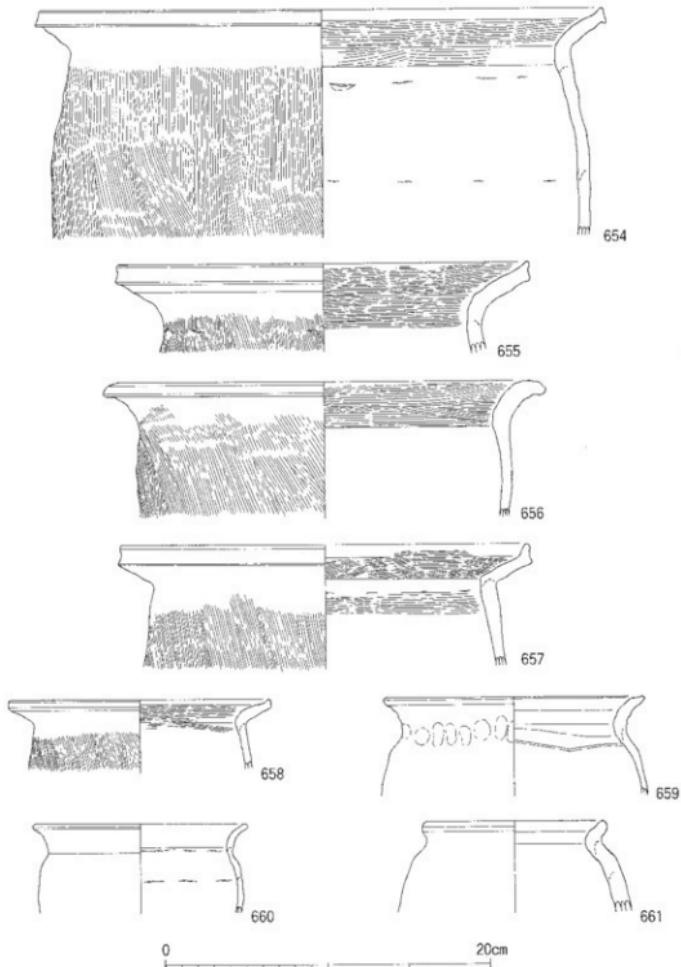


fig.153 S X 05出土の遺物(2)

口縁は直線的にわずかに外側に開きながら立ちあがる。体部は回転ナデにより薄くつくられ、比較的シャープなイメージを与える。

643~649は瓶である。643~647は口縁端部が外側へ強く屈曲するタイプ、648・649は外側には開くものの厚手の底部と短く立ち上がる口縁端部は丸く收められるのみである。

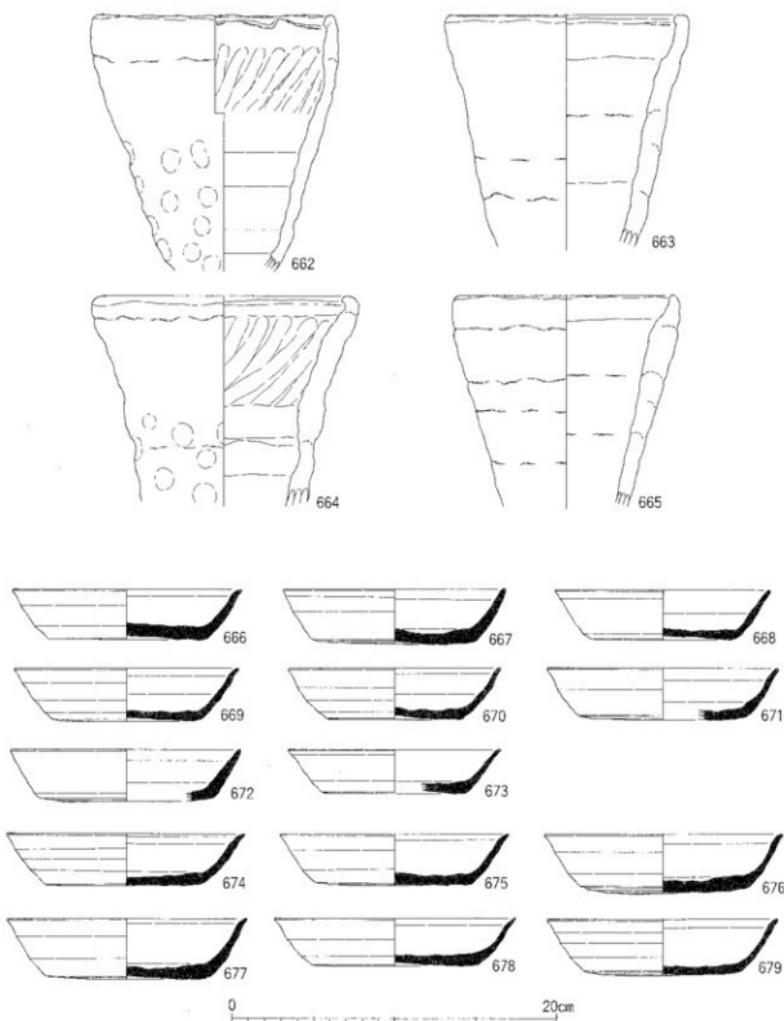


fig.154 S X 05出土の遺物(3)

643~647は口径14.9~16.4cm、器高1.7~2.2cm、648は口径15.4cm、器高2.0cm、649は口径17.0cm、器高2.1cmである。いずれも口縁部の調整は鋭く、また薄く銳角的である。底部外面にはヘラ切りかと思われる凹凸も見られるが、やや正確性に欠ける。

650・651は高台付きの椀である。650は口径17.2cm、器高6.3cmである。底部からのたち

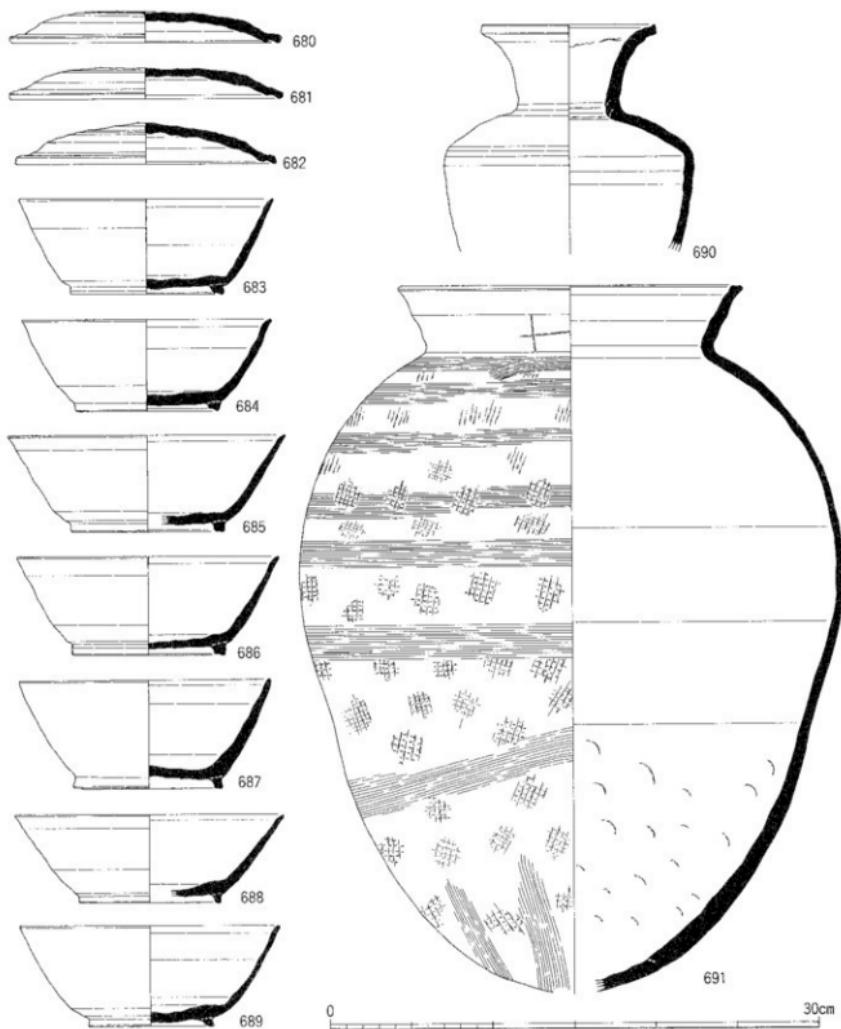


fig.155 S X05出土の遺物(4)

あがり部分、体部外側に明瞭な粘土紐の接合痕が残る。円盤状の底部に粘土紐を積み上げ、あとはナデ調整により器壁を整えている。高台は高さ1.0cm、径9.7cm、やや外側に張り出し、端部は丸く仕上げるのみである。高台の接合部は内外面ともに丁寧にナデ調整が施されている。

651は口径17.3cm、器高6.6cm、高台付きの椀である。口縁部は斜め上方に直線的に延び、端部でさらに外側に聞く。円盤状の底部に粘土紐を積み上げ、ナデ調整により、全体を仕上げる。貼り付けの高台は非常に薄く、高さは1.5cmで、外側に「ハ」字形に聞く、高台の接合部は丁寧にナデ上げられている。体部外側には横方向、またはやや右上がりのヘラ削り痕が明瞭に残る。

652・653は内面黒色土器の椀である。652は口径16.0cm、653は復元径18.2cm、やや丸味を帯びた体部をもつ。内面は横方向のヘラミガキ調整、口縁端部は強いナデが施される。体部外側下半には左上がりのヘラ削り痕が残る。ヘラ削り部分の上端、口縁の下に削り後の段が稜のように残るが、ナデにより調整される。653はわずかに口径が小さくなる可能性がある。

654～661は土師器の甕である。654は口径34.5cmの大型の甕、655～657は口径25.0cm前後の中型の甕、658～661は13.0～16.0cmの小型の甕である。661のみ口径10.9cm、口縁のたちあがりの少ない形態をとる。その他はいずれもふくらみの少ない体部から斜め上方に

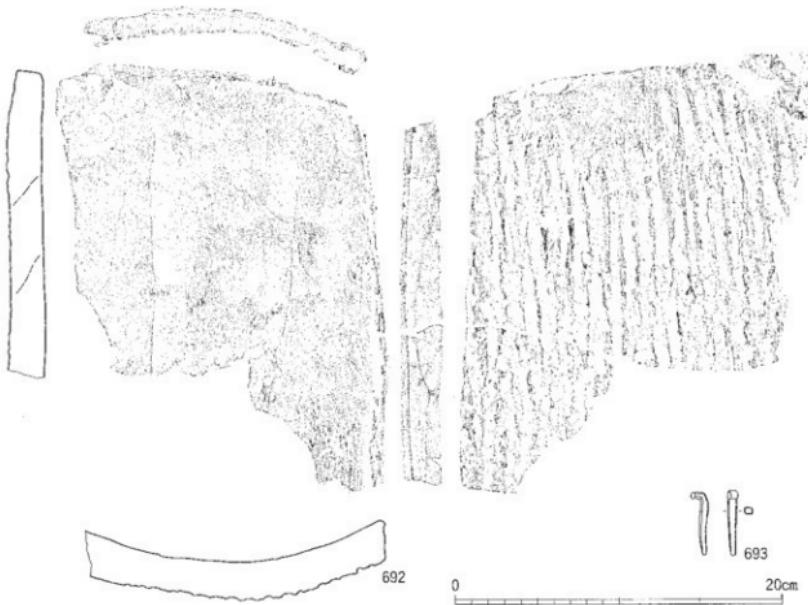


fig.156 S X 05出土の遺物(5)

延びる口縁端部をもつ。654・655やや水平気味に、656は如意形に丸味を帯びて、657・658は鋭角的に、659～661は緩やかであるが直線的にたちあがる口縁部を有する。

654～658は外面縦方向の刷毛調整後にナデにより器壁を整え、内面の口縁部は横方向の粗い刷毛、あるいは細かい刷毛による調整後、口縁部を中心にナデ調整を行う。659～661については体部からたちあがる口縁の付け根の部分に指頭圧痕が明瞭に残る。その他の部分は工具による調整痕は明確でなく、ほとんどナデによる調整のみで仕上げた感がある。

662～665は製塙土器である。口径は14.0cm前後、残存長は662が最も残りがよく、15.7cmである。粘土粂積み上げの痕跡が明瞭で、外面には指頭圧痕が、内面には下部に横ナデを含むナデ痕跡、口縁部では下から上方への強いナデ痕跡が明瞭に残る。口縁端部は粘土粂の端を内側に折り込んで、平坦面を形成する。一部に被熱による剥離痕が認められる。662の底部の状況から器高18cm前後の尖底をもつ砲弾状の形態を探るものと考えられる。

666～691は須恵器である。666～679は杯である。口径は13.1～14.8cm、器高2.7～3.4cmであるが、ほとんどの椀は口径14.0cm、器高3.2cm前後の規格性のある製品の一群である。いずれも底部外面は回転ヘラ切り未調整、わずかにはみ出た粘土片をナデつける程度の調整を加えるのみである。体部外面から口縁、体部内面までは一連の回転ナデ調整である。底部は比較的の厚みがあるが、口縁は薄く外反しながら延びる。口縁端部は強いナデにより、さらに外反する傾向にある。一部を除き、焼成は堅密で、666・668・673・674～679の過半数の杯の内外面に明瞭な火ダスキ痕が認められる。

680～682は杯蓋である。それぞれ口径は16.3cm、16.4cm、15.8cm、器高は1.9cm、1.9cm、2.5cmである。天井部が直線的なもの、山形となるもので若干の差異が認められる。いずれにもつまみは付かず、天井部の調整は681のみ回転ヘラ切り未調整、その他はヘラ切り後ナデ調整を加える。口縁は斜め下方に延びた後、わずかに水平におこした程度の屈曲をもつ。端部は丸く収めるのみである。

683～689は高台付きの椀である。口径は15.2～17.0cm、器高は5.4～6.7cmで規格性をもつた椀の一群である。その中でも口径15.0～16.0cm、器高6.0～6.5cm前後の口径が小さく、器高の高いタイプと、口径16.0～17.0cm、器高5.5cm前後のやや口縁が外反し、低い体部をもつ2種類に区別できるであろう。前者には断面逆台形のしっかりとした高台が付き、後者のそれは細長く、高さがあるという印象を与える。これは器壁の厚みにも反映され、厚ぼったいたぐりの椀と軽くシャープなつくりの椀という相違が感じられる。調整はいずれも底部外面は回転ヘラ切り後に軽いナデ調整、体部全面は回転ナデによる調整が施される。高台の接合部は丁寧にナデ上げられる。689の底部には叩き板状の圧痕がある。

690は壺、691は甕である。690は口径10.5cm、肩部で最大径15.3cmを測る。底部に高台の付く壺しに分類されるであろう。691は口径20.6cm、器高約44.0cmである。格子状の叩きの後、ナデによるスリ消し、横方向あるいは右上がりのカキ目が残る。内面には円弧状の叩き痕が残る。頸部に「十」のヘラ記号が刻まれる。

692は狭端面を残す平瓦片である。凸面は縄目をもった叩き原体、凹面には布目が残り、ナデによるスリ消しが見られる。側面は広端面側から狭端面側へのヘラ削り調整である。

693は断面方形の鉄釘で、先端を若干欠損するほぼ完形のもので、長さ4.0cmである。

S X06 一辺約2.2m、深さ約0.10mを測る方形の遺構である。埋土は灰黄色砂質土を基調とするが、筋状に暗灰色系の粘質土や炭層を挟んでおり、意図的に埋め戻した感がある。床面や掘形の上面には鉄分の沈着が認められる。土壤洗浄を行っていないので明らかでないが、微細な鉄分が周辺に飛散していた可能性が残る。また焼土や炭層が混じり全体に硬化していた。床面からは鍛冶炉と考えられるS X07を検出した。

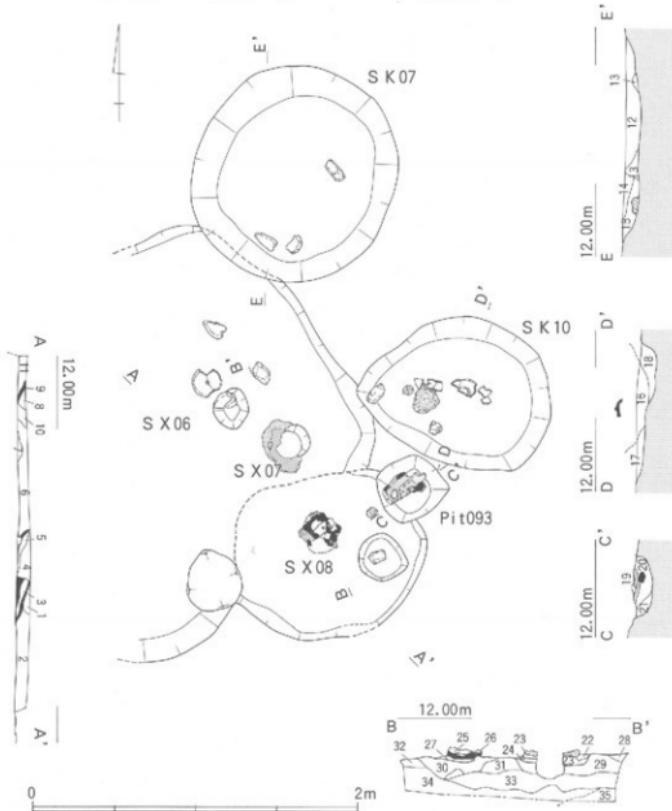


fig.157 鍛冶関連遺構

- | | | | |
|----------------------|-----------|------------------|---------------|
| 1 淡褐色砂質シルト | 2 灰褐色砂質土 | 3 灰褐色砂質土(鉄分多し) | 4 暗灰色粘性砂質土 |
| 5 灰黄色砂質土(硬化) | 6 灰黄色砂質土 | 7 碳層(直径5cm大) | 8 灰色砂質土 |
| 9 黄灰色砂質シルト | 10 暗灰色粘性土 | 11 灰白色砂質土(硬化) | 12 黒色シルト |
| 13 黄灰色シルト質細繊維 | 14 黑灰色シルト | 15 灰色シルト質細繊維 | 16 暗黒灰色粘性土 |
| 17 濃灰黄色砂質土(基盤層?) | 18 灰色砂質土 | 19 茶褐色砂(硬化、鉄分沈着) | |
| 20 黑灰色シルト(炭・練土ブロック説) | 21 灰色砂質土 | 22 淡褐色砂質土 | |
| 23 灰色粘性砂質土(3cm大的碳層) | 24 灰褐色細砂 | 25 灰色砂質土 | 26 黑褐色シルト(炭層) |
| 27 濃黒灰色極繊維(硬化) | 28 黄灰色砂質土 | 29 灰褐色砂質土 | 30 濃灰色粘性砂質土 |
| 31 黄灰色極繊維 | 32 灰色極細砂 | 33 灰褐色粗砂(5cm大) | 34 灰黄色極細砂 |
| 35 灰褐色極細砂~繊維 | | | |

出土遺物は須恵器蓋、鉄製品1点、一部に被熱状況が顕著な礫が3点である。

694は口径17.6cm、器高1.6cmの須恵器の蓋である。扁平なつまみの付く平らな天井部には回転ヘラ切り痕が残り、未調整のままである。下方に延びる口縁部は、端部をわずかに屈曲させて下方につまみ出す。内面の中央は未調整のままであるが、その他は回転ナデにより仕上げる。



fig.158 S X06出土の土器

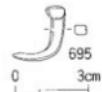


fig.159 Pit093出土の鉄釘

S X07 長径0.35m、短径0.30m、床面から高さ約0.05mの硬化部分が円形に遺存する。硬化部の外側は赤褐色化し、内側は黒く変色している。硬化部分は鍛冶炉の炉壁であろう。当初、鍛冶炉であるとは判断できず、S X06の掘削の際に内部をベース面から0.15m掘り下げてしまつたために底部の状況を図化できないが、掘削中の埋土には炭が含まれていた。炉壁と床面の境には炭層があり、断面は中央がやや窪んだ浅い皿状を呈していたものかと推測される。また、0.30m南側には同様に鍛冶炉と考えられるS X08がある。

S X08 S X06の南東部に位置する長径1.2m、短径1.0mを測る土坑である。床面中央やや北よりから鍛冶炉を1基検出した。床面から高さ約0.05mの硬化部分が、北側に半円形で遺存していた。炉は直径0.25mの円形に復元される。同じ範囲の下部には厚さ0.03mの炭層が堆積し、さらにその下面では部分的に熱により床面が硬化した状況が認められた。炭層の上には10cm大の鉱滓が残っていた。遺物を伴っておらず、遺構の時期は不明であるが、断面の観察からS X06を切り込む後出の鍛冶炉であることが判明した。

なお、鍛冶炉S X07およびS X08については現地において遺構の平面調査、半裁作業による断面観察を行い、下部構造などの把握に努めた。その後、神戸市域においては鍛冶炉の検出例が少ないとから切り取り作業を行い、保存を図った。

iv) ピット

Pit93 S X08とSK10に挟まれて位置する、一辺0.40mの隅円方形を呈する遺構である。上面から鉱滓1点が出土している。表層には茶褐色の砂層が薄く堆積するが、堆積というよりは貼られた感がある。全面に鉄分が沈着し、一帯が硬化している。さらに、その下には厚さ0.10mで炭の層が皿状に堆積しており、周囲には灰色砂質土を入れている。ここまで深さは0.15mである。ピットと考えていたが、検出状況からはS X06・S X08と同様に鍛冶炉と考えられる。S X08を切り込んでおり、さらには第1遺構面の精査中にこの部分での被熱状況が確かに認められた経緯があり、上層から切り込む遺構である可能性が高い。土器は出土しておらず、断面方形の鉄釘(695)が1点出土したのみである。

その他のPit その他多くのPitが検出できたが調査区の範囲内では建物に復元できなかった。また、建物に復元できた柱穴と同様の規模を持つ柱穴が、復元された建物の周囲に同方向に並びかけるように検出されている。調査区下層の地盤の影響で建て替えが行なわれていた可能性も想定される。

(2) 第1遺構面の遺構と遺物

第1遺構面を形成する暗灰色粘性砂質土層面で明確に検出された遺構はSB01、SB02の2棟の建物と一部のPitのみである。SB03、その他の遺構については第2遺構面と同様である黄灰色極細砂層面での検出である。

i) 捩立柱建物

SB01 調査区外に拡がる可能性もあるが、東西4間(9.6m)×南北4間(8.5m)の総柱の建物と考えられる。柱穴の掘形は円形または隅円方形を呈し、径(1辺)は約0.30m、深さは0.30m前後である。確認できた床面積と比較して柱穴の規模がやや小さいようである。柱穴からの遺物の出土は少なく、小片であるが、Pit0116から黒色土器の椀、Pit0119からは土師器の椀が出土している。



fig.160 SB01

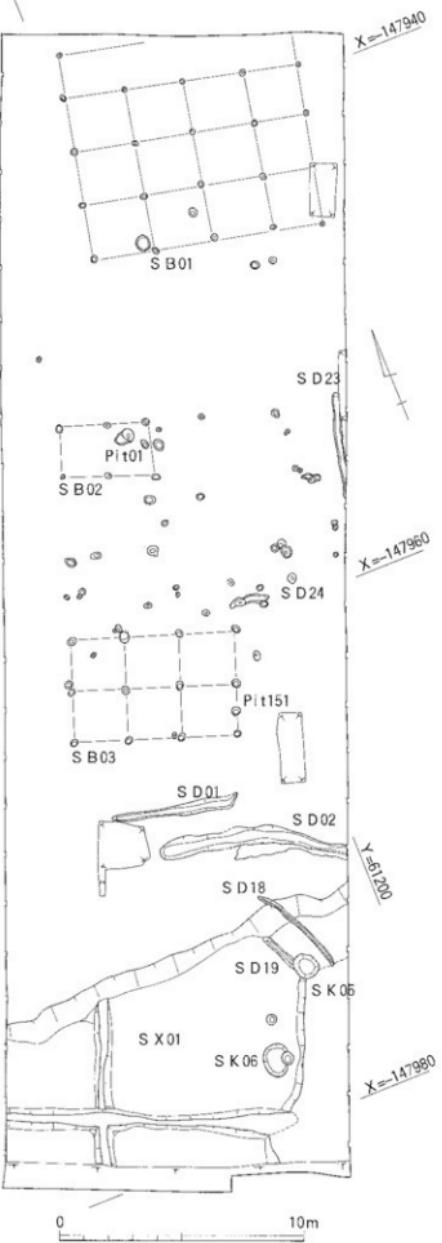


fig.161 第1遺構面



fig.162 SB01出土の土器

696はPit0119から出土した土器師楕の口縁部である。口径14.2cmに復元される。やや外反する口縁端部は丸く收められるのみである。

697はPit0116から出土した内面黒色土器の楕である。内湾しながらまっすぐに立ち上がる口縁は径16.2cmに復元される。内面は横方向の細かいヘラミガキ、外側は磨滅がひどく、調整痕は不明。

SB02 東西2間(3.7m)×南北1間(2.0m)の小規模の建物である。柱穴の平面形は円形、方形、隅円方形とまちまちで、大きさも一辺0.20mから徑0.40mまでとばらつきがある。遺物の出土したPit203のみ深さ0.20mを測るが、その他は深さ約0.05m程度しかない。

698は上師器小皿である。口径8.5cm、器高は1.6cmである。全体にナデ調整が施される。底部外面は凹凸が著しい。

699は長さ12.4cm、幅7.4cm、厚さ7.1cmの断面方形の砥石である。正面および右側面の2面にのみ使用痕が認められる。凝灰岩製である。

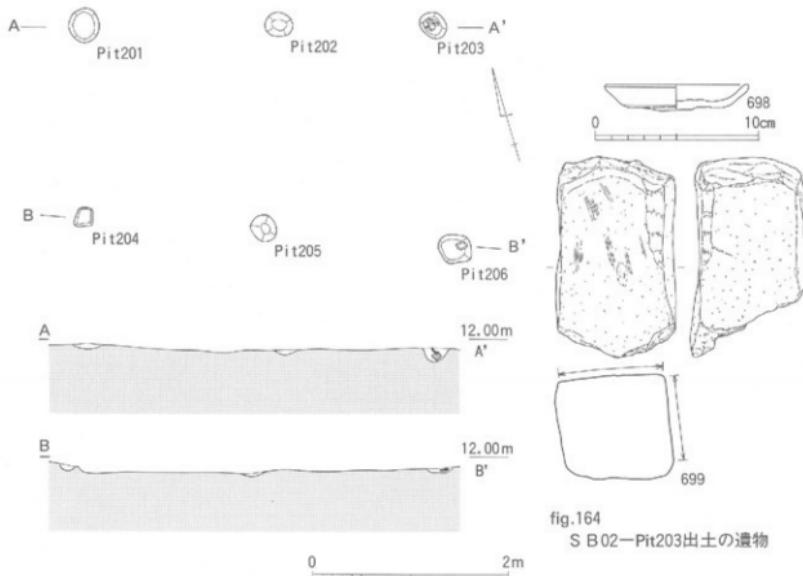


fig.163 SB02

S B03 東西3間(6.8m)×南北2間(4.0m)の総柱の建物である。柱穴の掘形は円形で、径0.30~0.50m、深さは0.40~0.50mである。検出した12基の柱穴のうち、Pit309を除くすべての柱穴に堅固な根固めの様子が認められる。造構面下は旧河道の堆積により軟弱地盤となっており、南東部で特に掘形がオーバーハングする様子が見られ、これに対処する工夫であろう。ここでは3通りの方法が見られる。

まず1つ目は部分的に瓦を敷くものである。Pit306では長さ30cmの扁平な石の上に平瓦片を置き、疊で安定させながら据え、さらにその上に拳大の礫を均等に3個配している。

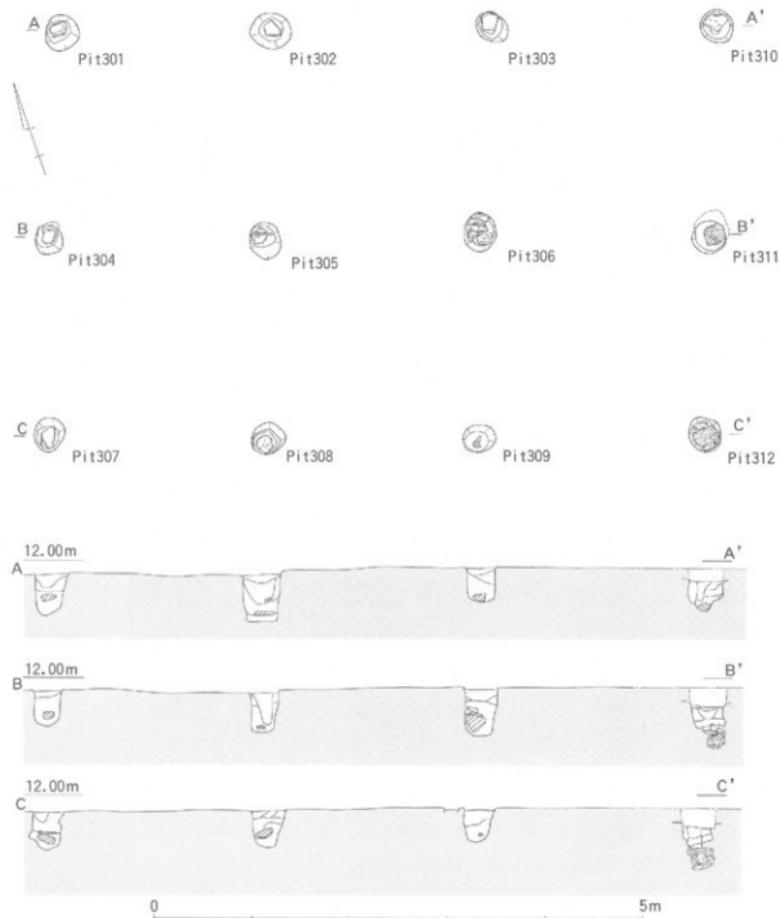


fig.165 S B03

瓦片は割れた状態で細片も含めると6点になるが同一個体ではなく、復元すると3種類の瓦のそれ一部が使われていることが判った。

700は広端面を残す瓦片で、凸面は斜格子文叩き、凹面には布目が残る。端面には植物繊維の圧痕が見られる。701は狭端面を残す瓦片で、凸面は叩きの後ナデによるスリ消し、凹面には布目痕跡が残る。右側面はヘラ削りの後、ナデが施される。

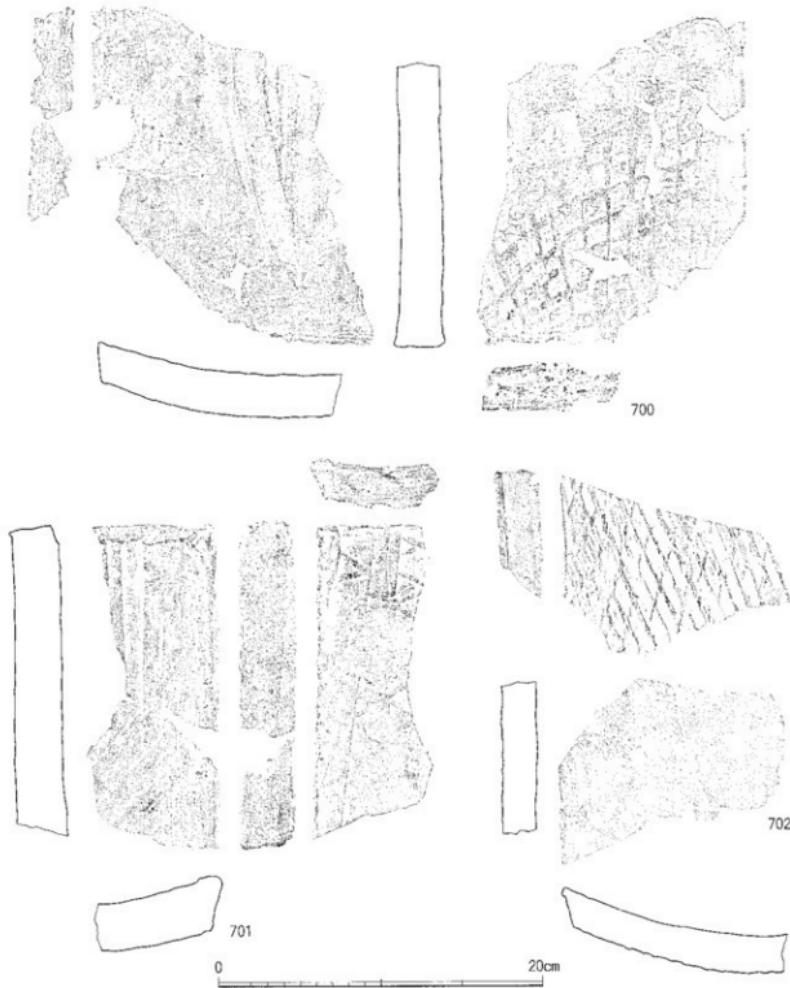


fig.166 S B 03 Pit出土の平瓦

702の瓦片の凸面は粗い斜格子文叩き、凹面は布目痕を縦方向に丁寧にナデ消している。いずれも厚さ2cm前後、大型の瓦である。

2つ目の方法は木材を使用する例である。Pit311では半裁あるいは板目方向に削った材(703~705)を3段に重ねている。705は柱材の余りを活用したものであろう。また、Pit312では拳大の石を円形に据えた後、15cm角に加工した木材(707)の木口を上に向けて石の中心に据え、その上に長辺30cmの扁平な板材(706)を据えて礎盤としている。礎盤に使われた材はすべてマツ材と同定されており、水温に強い材が用いられている。

その他は人頭大よりやや小ぶりの石を用いるタイプで、Pit301・302・303・304・305・308・310では厚さ5cm、長辺15~30cmの扁平な石を1段に、Pit307では下段にやや丸い石を置き、その上に長辺25cm、厚さ1cmの非常に薄い石の2段に石を据えている。いずれも上面を平らに加工した石が上部に用いられる。礎のみの部分ではあまり石の沈下は顕著ではないが、その他の礎盤はいずれも楕円の底のラインより下に押し込まれた状況で検出されている。上屋の荷重を受けたのか、あるいは先に安定する部分まで押し込んだのか、いずれにしても地盤を確認した上で入念な工夫であろうかと考えられる。

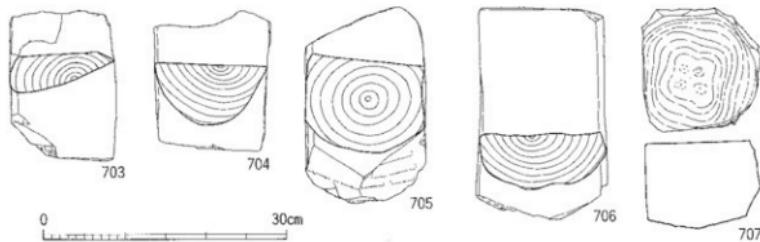


fig.167 SB03 Pit出土の礎盤

ii) 土坑・落ち込み

S X01 調査区の南端で確認した落ち込みで、南に緩やかに傾斜する。下辺幅0.60~0.90m、上辺幅0.30~0.40mの畦畔が検出され、西側で十字形に交差し、北側は落ち込み上部に、東側は島状の高まり（人柱跡）にそれぞれつながる。落ち込みに堆積した灰褐色粘質土層からは平安時代の土器を中心にして室町時代までの遺物が含まれる。I区の第1遺構面につながる灰色シルト層を除去した面が北側から続くものと考えられるが、不安定な地形に変化はないようである。また、SD102などは箇溝あるいは畦下に伴う溝である可能性がある。

iii) 溝

建物を検出した面的な部分から湿地状、または水田へと地形が変わる部分で東西方向の溝を2本検出した。SD01は幅0.50m、長さ5.0m、深さ0.10mの浅い溝である。SD02は幅0.80m、検出長8.0m、深さ0.15mである。南肩には牛と思われる蹄痕が明瞭に残り、上層の水田との関わりのものであろう。SD23は幅0.30m、深さ0.03~0.05mの浅い南北方向の溝である。土器は出土していないが、埋土中からは細かい炭が、また溝全体にはブロック状の炭が充填されている状況にみられた。用途は不明である。

iv) ピット

Pit01 Pitとして扱うが、切り合ひ関係にある2基の柱穴あるいは土坑の可能性もある。長径0.80m、短径0.50mの椭円形を呈し、最深部での深さ0.25mである。西側の浅くなった部分で縄により須恵器の腕を破碎したと考えられる状況が確認された。須恵器の腕から12世紀前半の遺構と考えられる。

708・709は土師器の鍋で、708には三足が付く。外面は縦方向の刷毛調整の後、ナデによるスリ消しと不定方向の刷毛調整を加える。口縁部から体部内面にかけては横方向の刷毛調整である。

710・711は須恵器の腕である。710は口径15.4cm、器高3.9cm、見込み部にはほとんど凹みをとどめない。外側に開く口縁端部は肥大化する。底部は回転糸切り未調整である。711は鉢で、口径17.3cm、器高6.5cmを測る。底部は回転糸切り未調整、口縁端部は肥大化し、丸味を帯びる。

712は釘、713は刀子と考えられる鉄製品である。刀子には剥離痕と考えられる部分があり、鍛え方が不十分であった可能性がある。

その他のPitはいずれも規模が小さく、また遺存状況が良好とは言えない。

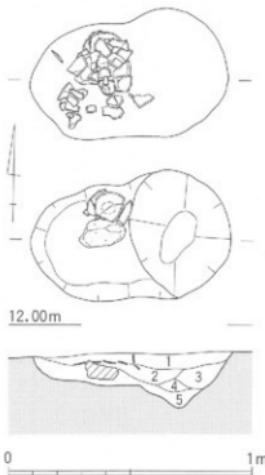


fig.168 Pit01

- 1 灰黄色粘性砂質土
- 2 灰色粘性砂質土
- 3 断茶灰色シルト
- 4 灰色砂質シルト
- 5 灰色板細砂

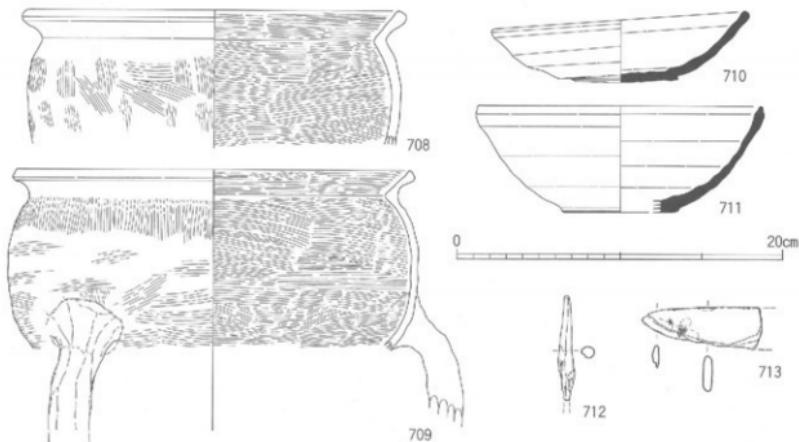


fig.169 Pit01出土の遺物

4. 地震痕跡について

第1造構面を形成する暗褐色粘質土上面を精査中に、細かい砂粒で満たされた細い筋が調査区の全面に広がる状況が見られた。当初は粘性の強い土壤にみられるひび割れ様の痕跡かと考えていたが、幅が広くなる、また砂溜まり状になる部分も認められることから、地震に伴う痕跡と推定し、検出面で平面の図化を行い、調査の最終段階で断ち割り調査を実施した。その結果、地震動により下部に堆積する砂礫層が液状化し、砂が上昇した痕跡（砂脈）であることが判明した。

造構面に現れた砂脈はほとんどが幅1cm前後、太いものでも幅3cmほどであるが、径40cmほどの円形に拡がる部分もあった。長さ最大10mの砂脈が断続的に連なり、全体として南北の方向性が認められるが、図化し得た砂脈の間にはさらに細かい砂脈があり、毛細血管様に絡み合った状態に見えるのが特徴的といえよう。調査区南西部にも同様の砂脈が拡がっていたが、砂層面であり、砂脈と区別するのが困難なため、図化し得なかった。

大きな粒子で構成されていた調査区南の砂脈の一部を断ち割ったところ、液状化して噴砂を供給したのは、第2造構面下1.2mに堆積する自然河道内の砂礫層であった。設定したトレンチの幅は約1mであるが、北壁（A-B）、南壁（C-D）で確認された砂脈の状況は大きく異なる。南壁では幅3cmの砂脈を伝って砂が上昇し、5層とした土の一部がわずかに砂脈間に落ち込む状況が確認されたが、周囲の堆積は正位を保っていた。対する北壁では2条の砂脈が上部に堆積する細砂層、シルト層をそれぞれ20cm幅で切り裂き、砂脈に挟まれた部分の上層（2・5・6層）が引きずられるように大きく下に沈み込む様子がみられた。8・9層は同一層であるが、9層としたものは赤褐色化しており、この層に含まれる径8cm大の礫が2層付近までは砂脈内を上昇していたことが確認された（上昇量は50cmである）。このように変形が著しいことから、かなり強い震動を受けたことが推測される。

調査区全体の土層断面で砂の上昇を確認すると、中世の耕土層を引き裂いていることは明らかであり、地震の規模からも慶長元（1596）年の大地震に伴う噴砂と考えるのが妥当と考えられる。しかし、一部には現代耕土層の直下にまで及ぶ状況も確認されており、近世以降の耕土層に達する可能性もあることから、平成7年1月17日に発生した兵庫県南部地震に伴う噴砂が含まれるものと推測された。調査地の位置する神戸市西部での震度は比較的小さかったため、慶長の大地震で生じた砂脈を通路として利用しながら噴き出した可能性がある。

砂脈は地質の中でも弱い部分に沿うとされるが、砂脈を造構面上で詳細に観察すると、粘質土を埋土とする柱穴では、砂脈は固い埋土と掘形の境を抜けているが、埋土が砂質で軟弱な場合は、その中央を砂脈が突き抜ける状況がみられる（写真図版80-2）。

発掘調査ではさまざまな地震痕跡が検出される。それらの地震痕跡の年代や規模が判明し、地震動のサイクルなどが明らかになれば、地震に対処する術を考える上で貴重なデータを提示することになると言えよう。

参考文献>窪川旭『地震考古学』中央公論社 1992

「阪神・淡路大震災と兵庫県の地震考古学」『ひょうご考古』創刊号 1995
埋蔵文化財研究会『発掘された地震痕跡』 1996

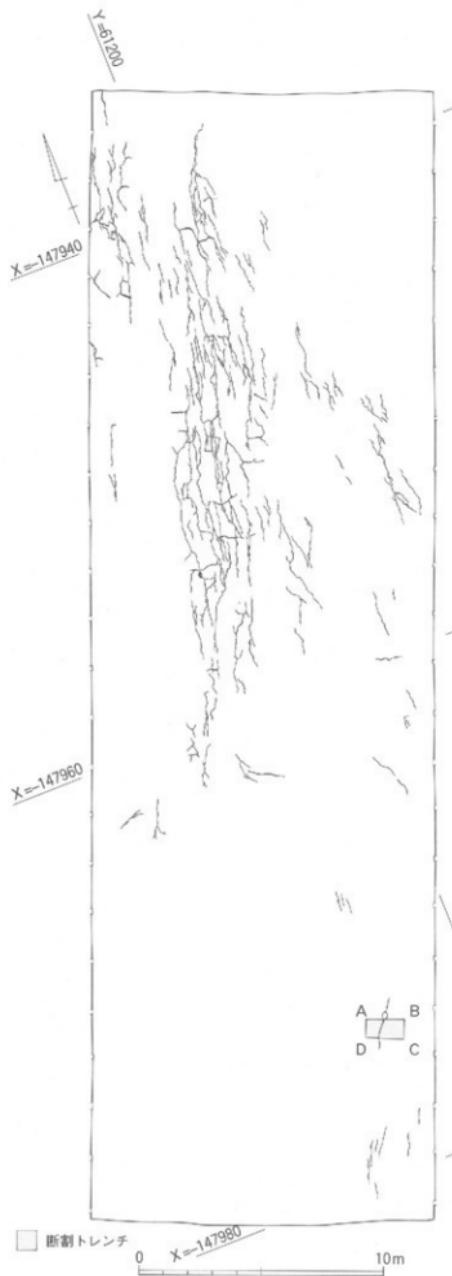
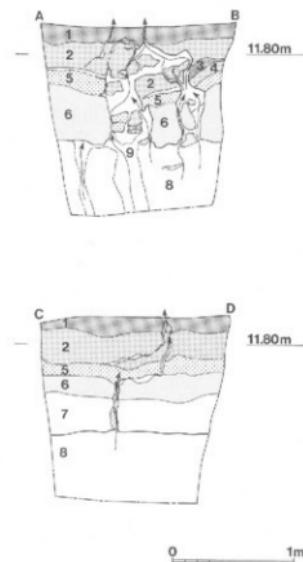


fig.170 地震痕跡



fig.171 地震痕跡の断面



- 1 灰色砂質シルト
- 2 灰色シルト質板細砂
- 3 岩灰青色砂質シルト
- 4 灰褐色板細砂～細砂
- 5 岩灰色シルト質板細砂
- 6 灰褐色板細砂
- 7 青灰色シルト質板細砂
- 8 底褐色礫層(5~10cm大)
- 9 赤褐色礫層(5~10cm大)

fig.172 地震痕跡の断面

5. 小結 一調査区内における遺構の変遷一

今回の調査では平安時代中期～後期の遺構・遺物が多数検出された。報告の段階では現場での検出状況を前提に述べてきたが、第1・2遺構面ではそれぞれの遺構の時期区分などが煩雑となり、不明な点が残った。ここではそれらを整理しながら検出遺構について概括し、調査区におけるおおまかな遺構の変遷などについて述べていく。

(1) 調査地での遺構の形成

調査地の周辺は既存の調査結果から、度重なる洪水や流路の貢流が繰り返されたことがその堆積状況から窺い知ることができる。さまざまに流れを変え、運ばれた土砂により微高地が形成され、そこに遺跡が立地するということが繰り返し行われた土地であると言えよう。II区の場合も同様で、平安時代前期には埋没し始めた流路堆積の上に立地している。

生活痕跡が確認されるのは、流路がほぼ埋没する段階、第3遺構面で検出された流路状遺構や続く第2遺構面検出のSD04の下層部分や多量の上器の溜まる落ち込みであるSX05が形成されるあたりからである。河道堆積の最終段階であるSD17やSD27からの出土遺物は9世紀中頃から後半にかけてのものである。比較的須恵器が少なく、遺構内では土師器、黒色土器の占める割合が高いようである。縁軸・灰釉陶器の出土はごくわずかではあるが、517・518など9世紀中頃の特徴をもつ施釉陶器が出土している。

SD17の出土遺物をみた場合、一部に口径の大きい形態が残る皿Aなどがみられるものの、中心となるのは杯A・Bである。また、一様に底部は円凸が顕著であり、調整はヘラによる切り離しあるいはヘラおこし、また指押さえ後のナデのみによる仕上げであるのかと不明瞭であるが、最終調整にナデが多用されることは明瞭である。ただ、口縁部はわりと薄く、外反する仕上げであり、口径、器高等を見た場合、法量に規格性が整いつつある状況がみられる。一部では回転台の使用があったのではないかと考えられる。これらの遺構によりひとつの時期が形成されるであろう。これらを第1段階とする。

第2遺構面で検出されたSX05では相対的に須恵器の出土量の増加がみられる。杯A・B、杯B蓋である。これらは播磨地域での須恵器窯の生産増加に伴う傾向かと考えられる。須恵器の杯Aや碗Bは馬札II型式に並行する時期の特徴を具备し、碗(杯)の高台の低脚化および外端部への移行、つまみをもたない蓋の盛行などの状況がみられる。土師器の杯Aなども須恵器を模倣した形態となり、口径、器高等法量も類似する。一部に外側のみにケズリ痕を残す土師器碗Bなどがみられるが、調整痕も回転ヘラ切り痕が明瞭化し、口縁の外反傾向など時期として9世紀後半の特徴をもつ一群と言えるであろう。遺物の出土状況からみると、SX04出土の壺(624)も10世紀を前後する時期に、緩やかであった河道の底に何らかの意味合いをもって据えられたものと推察される。SD04内では埋没直前の段階に製塙上器が括投棄される、またSX04周辺で土師器の皿や炭の分布が散見されること、集落形成に際しての何らかの動きがあったものと想定されよう。これを第2段階とする。

そして、地盤のやや安定化に伴い、建物が構築されるようになる。建物を構成する柱穴からの出土遺物が少ないために判断し難い部分があるが、SB06の出土遺物は概ね10世紀代の前半と捉えることができよう。また、SK02を始めとする土坑の一部に同時期の遺物

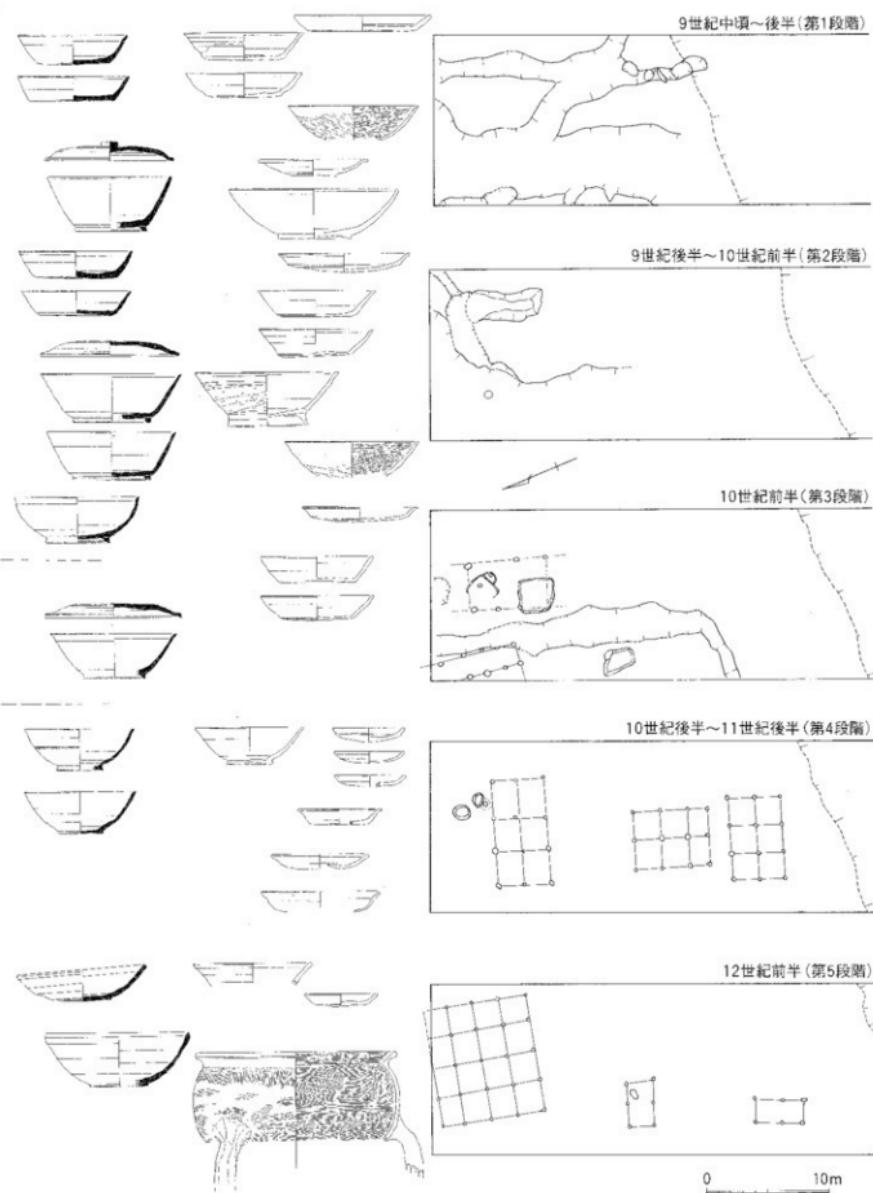


fig.173 建物と関連遺構の配置 (土器は1:6)

の出土が認められる。それら土坑の特徴は焼土、炭、焼石の混入が目立ち、鍛冶炉の一群の遺構に近接することである。層序的には鍛冶炉の中で最も古い段階のS X07がこの時期に構築されたと考えられる。S D04の上層に堆積する炭層、S K01に堆積する同じく炭層も有機的に連携するものかと推測される。この時期を第3段階としよう。

鍛冶炉の連續性については後述するとして、調査区内で建物の構築が増加する。S B05から出土した土器皿Aや小皿などが10世紀後半頃のものかと考えられる。その他、遺物の出土したS B07は11世紀後半の遺物を含むことから、11世紀までの段階で建物が配置される空間が拡張されたものと考えられる。時期の不明な建物も、その建物軸をみた場合、非常に似かよった軸方向（N20°E）をもつようである。どの建物が同時に存在したのかは各遺構に切り合い関係がなく明確でないが、11世紀代の集落域の拡張と捉えたい。これを第4段階とする。

そして調査区内が水田化する直前の時期と思われる12世紀前半までの間に調査区内にS B01やS B02、時期は不明であるがS B04が構築されたと考えられる。遺構密度が散漫となる状況に至る。S B01やPit01から出土する須恵器輪の口縁部は肥大化が進み、器壁が厚くなり、平底化も顕著である。調査区の南端は第1段階から一貫して安定しない土壤のままで、I区検出の流路が貫流した中世を含む以降の段階で水田化が進んだようである。II区でも第1遺構面の直上に水田土壤と想定できる層が形成され、耕溝状の痕跡がわずかにみられるのみである。建物が散見されるこの段階を第5段階とした。但し、調査区の北側、あるいは西側では同時期の遺構の拡張が確認されている。

（2）鍛冶遺構について

主要な遺構により調査区内での集落の一端の様相をみてきたが、もうひとつこの調査区を特徴づける遺構群が存在する。調査区北側で検出した鍛冶炉3基とそれらに伴う一連の遺構群である。これらの遺構は第2遺構面で検出したが、一部の遺構については上層からの切り込みも含まれる。

鍛冶炉は切り合い関係などからS X07→S X08→Pit93は順に構築されたと考えられる。鍛冶炉の本体は、S X07は床面から5cmの高さをもつ径30cmの梢円形を呈する硬化部、S X08が径25cmの円形に復元される高さ5cmの硬化部、Pit93は皿状に堆積する炭層の上に茶褐色の硬化した砂層が鋼れ込んでいる。いずれも硬化部が鍛冶炉の炉壁となるであろう。通常みられるような粘土による炉壁の構築状況などは確認されていない。

鍛冶炉の下部構造では、断ち割り調査を行ったS X07・S X08について、S X08では炉壁と床面の境には炭層があり、断面は中央がやや窪んだ浅い皿状を呈していたものかと推測され、Pit93の皿状に炭を敷く形態と同様、カーボンベッドをもつものと考えられる。粘土を敷いて炉床にする、またさらに下部に礫を敷く、あるいは配石するなどの構造ではなく、長期操業を目的とした頑丈な構造のものではない状況と言える。わずかに地面を浅く掘り窪めて炉床とした普遍的にみられるタイプである。高温により硬化した部分も脆く、これらがどれほどの耐久性をもっていたのかは明らかでない。

また、S X07は一辺約2.2m、深さ約0.1mを測るS X06とした方形の遺構の中央にあり、その床面からの検出である。S X08も長辺1.2m、短辺1.0mを測る土坑の中に鍛冶炉が築

かれる。これらはその規模から工人一人ないしは二人による作業スペースになるものかと想定される。これらの落ち込み埋土は筋状に暗灰色系の粘質土や炭層を挟んでおり、意図的に埋め戻した感がある。焼土や炭層による埋め戻しの状況は、防湿効果や燃焼率の上昇を図る目的があった下部構造というよりは、鍛冶炉の改修、廃絶に伴うものであろう。

次に、遺物の面から鍛冶遺構についてみると、周辺の遺構から鉄滓、羽口、鉄製品、砥石、炭の出土が目立つ。但し、絶対量としては多いものではなく、鉄滓は包含層から2点、遺構から5点、鍛冶炉に遺存したもの1点であり、羽口は小片も含めて2点に留まり、この点からも大掛かりな操業形態とは考えがたい。鉄製品の出土もそれほど顕著ではなく、同化し得なかった小片も含めて釘や形状不明の製品は調査区内から11点出土したのみである。

遺物の出土を踏まえて関連する遺構について考えてみると、鍛冶炉の周辺には鉄滓と羽口の出土したSK10があり、その北側には埋土に炭の粒子（炭層に近い）を多く含むSK07がある。また、調査区の北半分からは砥石の出土が多く、SX03、SK03、SD04などに一個から複数個含まれ、SK01、SD23には炭の堆積が顕著である。これらが即、鍛冶工房に伴う一連の遺構とは判断しがたいが、可能性を含むものとして挙げられよう。

いま挙げた遺構をみながら変遷図に鍛冶炉関係の遺構をはめると、鍛冶炉SKX07とSB06、その間にSD04が存在する。SD04は南端で西側に曲がり、崩曲部のすぐ北側にSK03が存在する。これらは工房とそれに関わる住居の可能性を示唆する。また、焼土、焼石が多く含まれるSK02までを一連の遺構と把握した場合、これらを取り囲む柱穴の存在が浮かぶ。報告の最終段階でこれらを検討している最中に、果たして作業スペースの覆屋はどのような規模であったのだろうかと考えたときに想定したもので、真に実証性には欠ける。ここでは可能性の残るものと一応、書き留めておく。また、Pit93とSK10をセットとすれば、SB07に付随するものかと想定できる。鍛冶炉は村鍛冶などの小規模な操業であったと考えられるが、出土遺物でみた場合、およそSX07を含むSX06やSB06の築かれた9世紀後半から10世紀前半には操業が始まったものと考えられる。また、焼土や鉄滓が最も多く出土したSK10から出土した上師器・須恵器の椀は11世紀後半のものである。これらが鍛冶の痕跡とすると操業の下限になるであろう。上限を10世紀前半、下限を11世紀後半にとると、操業の幅は非常に広くなるが、撒高地の縁辺部に位置する当地で細々と作業が続けられたものと推測される。出土した鉄滓は分析の結果、いずれも良質の鉄分の多い鍛冶滓と考えられ、この地で製品づくりが行われたものと推測される。

以上、第3次調査II区における調査結果を、たぶんに憶測を交えながら記述してきたが、平安時代中期から後期にかけての多くの遺構・遺物の検出は、当遺跡の在り方を考え上で重要な成果であった。

残念ながら、いつの時代も大小さまざまな河川が流れを頻繁に変えながら当地域を貫流しているようで、洪水など土砂の堆積により遺跡の連續性が保たにくい状況となっているが、周辺の今池尻遺跡、白水遺跡など古代から中世にかけての顕著な生活痕跡を残すこの地域の様相を検討する際に、この調査区での成果が少しでも反映されればと考える。

6. 鍛冶遺構（S X07・S X08）の保存科学処理

現地での断ち割り調査終了後、鍛冶炉であることが明確になった。この時期の遺構としては発見例が少なく、また残存状態が良好であったため、その状態のまま保存することになった。方法としては、現地での記録作業終了後、この遺構全体を硬質発泡ウレタンで梱包し、取り上げる手法を用いた。今回の場合は、すでに遺構が半截されており、その断面が重要であることから、取り上げ後はその断面も観察できるように計画した。



fig.174
鍛冶遺構の半截状況



fig.175 遺構周辺の掘削作業



fig.176 遺構全体の養生



fig.177 硬質発泡ウレタンで梱包



fig.178 重機による搬出作業

まず、切り取る範囲をおおよそ確定し、その周囲を一回り大きく、深さ約1m程度掘削を行った。掘削の際、半蔵面の反対側は観察の必要がないため、断面形が逆台形になるよう、遺構面が崩れない程度に、抉るように掘削した。掘削終了後、切り取り範囲の下部を6回にわけて直径約40cmのトンネルを掘り、貫通後順次に硬質発泡ウレタンを角材と共に充填した。その後、全体を硬質発泡ウレタンで充填し、補強を行った。次に重機で吊り上げ、切り離し、埋蔵文化財センターに搬入後、室内において、反転し、裏側の余分な土を取り除いた。ただし、半蔵した断面が観察できるようにこの面および遺構面の裏側の土は、厚さ約5cmをそのまま残している。

その状態で裏側から強化剤（商品名：OM50）を半分の濃度に希釈し、1m²につき2kgの分量を塗布した。正転後、さらに1m²につき1kgの分量を塗布した。ただし、半蔵した断面は砂疊層のため、崩れやすく1m²につき3kg程度の量が必要であった。これらの作業により、144×65×30cmの範囲が現地と同じ状態で保存することが可能になった。



fig.179 表面処理作業



fig.180
保存科学処理の完成した
鋳造遺構

7. 新方遺跡平松地点第3次調査-II区 出土鉱滓の材質構造分析

小村美代子 (株式会社パレオ・ラボ)

(1) はじめに

新方遺跡平松地点第3次調査-II区の調査では、鍛冶工房ではないかと考えられる遺構群 (S X06・S X07・S X08) が検出され、周囲からは鉱滓も出土している。今回、これらの鉱滓の蛍光X線分析を行い、鉱滓の成分について検討した。また、一部の試料については蛍光X線分析によるマッピングと、組織の顕微鏡観察も行った。

(2) 試料と方法

試料は鉱滓6点で全て不定形の塊状である。詳細はfig. 181に示す。各試料は断面部の観察を行うため、各試料のX線写真とともに内部の金属部が集中すると思われる部分を狙って岩石カッターを用いて2つに切断した。この段階でR-020とR-022から純粋なメタル部が確認された。分析に使用する半分の試料はエボキシ樹脂で包埋した。その後、断面部を徐々に粒度の細かい研磨剤で研磨し、最終でダイヤモンドペーストによる研磨を行った。

これ以降については、分析法ごとに以下にまとめる。

<蛍光X線分析>

蛍光X線分析では、鉱滓に含まれる元素を調べた。測定部は発泡による空隙の少ない部位を選んでいる。各測定部はfig. 183に示す。

分析装置はセイコー電子工業(株)製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lである。装置の仕様は、X線発生部の管球のターゲットはロジウム(Rh)、ベリリウム(Be)窓、蛍光X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間100秒、照射径3mm、電流自動設定(μ A)、電圧50kV、試料室内は大気である。

<蛍光X線分析によるマッピング>

蛍光X線分析によるマッピングでは、先ほどのポイント分析による蛍光X線分析ではなく、切断面の一定

fig.181 試料の詳細

○：分析した項目

台帳番号	出土層位	時代	磁性	分析方法		
				蛍光X線	マッピング	顕微鏡観察
R-004	包含層	平安時代後期	無	○		
R-013	包含層	平安時代後期	有	○	○	
R-014-2	鍛冶炉	平安時代後期	有	○		
R-020	S K10	平安時代後期	有	○		○
R-021	S K10	平安時代後期	有	○		
R-022	S X05	平安時代後期	有	○	○	○

台帳番号	状況
R-004	表面および内部は灰色から黒色で、堆積岩類のようにも見える。
R-013	表面は赤褐色で内部は黒色。内部の一部に光沢のある黒色部あり。
R-014-2	表面は赤褐色で内部は黒色。
R-020	表面は赤褐色。内部はチャート混じりの黒色で純粋なメタル部あり。
R-021	表面は赤褐色で全体にチャート類が多く混じっている。内部に黒色部がわずかにあり。
R-022	表面は赤褐色で内部は黒色。内部に約1.5cmのチャートと純粋なメタル部あり。

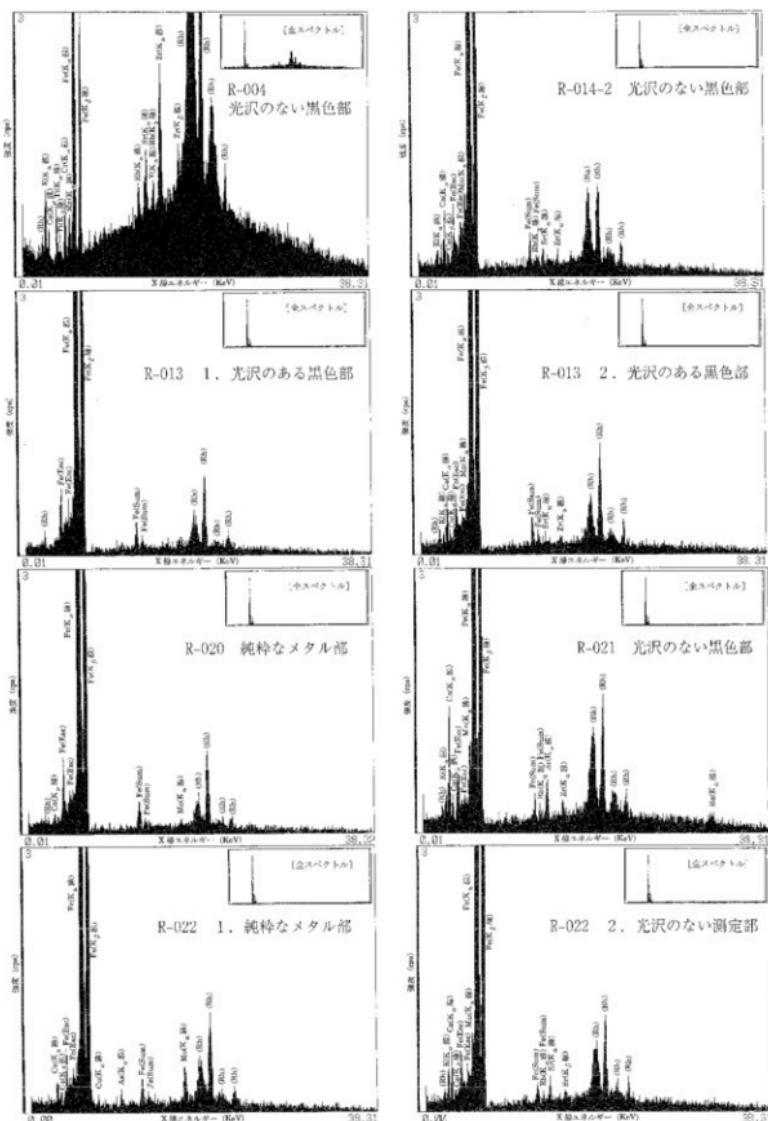


fig.182 鉛錫の各測定部の蛍光X線スペクトル

[元素記号] K:カリウム、Ca:カルシウム、Ti:チタン、Cr:クロム、Mn:マンガン、Fe:鉄、Cu:銅、As:ヒ素、Rb:ルビジウム、Sr:ストロンチウム、Y:イットリウム、Zr:ジルコニアム、Mo:モリブデン、Ba:バリウム、Rh:ロジウム(X管球より)

の範囲内でどの部分にどの元素が集中するのかなどをより詳細に調べた。試料は純粋なメタル部が残っていたR-022の銀色の金属部分周辺とR-013の断面部全体である。

分析装置は(株)堀場製作所製のX線顯微鏡XGT-5000typeである。X線発生部の管球のターゲットはロジウム(Rh)、蛍光X線検出器は高純度Si検出器である。測定条件は、測定時間300~364秒、照射径100μm、電流自動設定、電圧30~50kV、試料室内は大気である。

<金属組織の顕微鏡観察>

試料は腐食のない金属部分が残っていたR-022とR-020である。組織を観察するために2.5%硝酸を含むエチルアルコール溶液(ナイタル液)でエッチングし、マイクロスコープを用いて金属組織の観察を行った。

(3) 分析結果および考察

分析項目ごとに以下にまとめる。

<蛍光X線分析>

各試料の蛍光X線スペクトル図をfig.182に示す。各スペクトル図は検出された元素を見やすくするために、縦軸(強度)を拡大している。全体の強度比の様子は各スペクトル図の右上の「全スペクトル図」と書いてある四角い枠内を見て頂きたい。

検出が確認された元素は、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、銅(Cu)、ヒ素(As)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、モリブデン(Mo)、バリウム(Ba)などである。ロジウム(Rh)は蛍光X線の管球に由来する元素で、試料とは関係がない。

R-004からは鉄が高く検出されたが、他の試料のスペクトル図に比べてバックグラウンドがかなり高い。バックグラウンドが高いのは、試料中に軽元素が多く含まれていることなどを示す。もともと、R-004に軽元素が多く含まれていたことも考えられるが、R-004は肉眼観察で他の鉛錆と比べると、あまり金属質のようには見えず組織も密ではない。試料を包埋するのに使用したエポキシ樹脂は炭素や水素、酸素といった軽元素で構成されているので、これが隙間まで入り込んでバックグラウンドが高くなったり可能性はある。

R-004のスペクトル図からは、岩石や土壤などに多く含まれているアルミニウムや、ケイ素は殆ど確認されず、鉄が顕著に検出されているが、他試料のスペクトル図と比べると、カリウム、クロムやジルコニウムなどの鉄以外の元素が多く検出されていることから、鉄の純度は他の試料に比べて低いことが窺える。

R-004以外の試料(R-013、R-014-2、R-020、R-021、R-022)からは鉄が圧倒的に高く検出され、試料中に特に多く含まれる場合に現れる鉄のサムピーク(Fe Sum)と鉄のエスケーブピーク(Fe Esc)も検出された。このことから、これらは純度の高い鉄であると考えられる。

より詳細に見ると、R-013では光沢のある部分(1)と光沢のない部分(2)の2箇所を測定したところ、光沢のない部分(2)からは鉄以外の元素が幾つか検出されたに対し、光沢のある部分は鉄のピークしか確認されなかった(fig.182参照)。このことから、より金属光沢を持つ部分ほど、純度の高い鉄であると考えられる。磁性も金属光沢を持った部位の方が強い。

また、R-022の健全なメタル部分(1)と光沢のない部分(2)の2箇所を測定した所、メタル部分(1)からは、銅やヒ素、モリブデンが検出された。銅は一般土壤にも含まれる元素で、強度もわずかなので自然によるものと思われる。ヒ素やモリブデンは一般土壤などではあまり見かけない元素である。R-022以外にメタル部分が確認されたR-020からもモリブデンがわずかだが検出されている。馬渕総(2000)

によると、モリブデンは地球上に広く存在するが、量は多くなく、存在度は1.5ppmである。燐水鉛鉱 (MoS_2) などに含まれる。現代では、大部分で製鋼業で用いられており、モリブデンを鋼に添加すると加工、溶接の際の機械的特性が改善されることがある。当時の精錬加工で意図的にモリブデンを添加していたかについては怪しいが、モリブデンの検出は注目される。ヒ素については硫化鉱物 (As_2S_3 : 石黄など) としてわずかに混入したものではないかと予想される。

また、R-021からはバリウムがわずかに検出されている。バリウムも一般土壤であり検出されない元素であるが、地盤における存在度は500ppmで土器の产地推定などで使用されるストロンチウムの存在度370ppmよりはやや多い。先ほどのモリブデンのように現代の製鋼業で用いられる元素ではない。

R-020やR-021は共にSK10から出土したものであるが、これらはチャート類が多く混じっており、内部の黒色部にもチャートの主成分のケイ素など、鉄以外の不純物が多く含まれるのではないかと予想された。しかし、分析結果でケイ素やアルミニウムはほとんど確認されず鉄の純度が高かった。このことからチャート類は、後から付着したものではないかと予想される。

チタンについてはR-004でわずかに検出されている。他試料ではチタンはほとんど確認されなかった。チタンを多く含む砂鉄を原料とした古代製鉄法では、いかにチタンを除去するかが課題である。東京工業大学製鉄史研究会(1986)によると、関東地方の砂鉄は10%前後のチタンを含むものが多く、中国地方の砂鉄は5%前後のものが多いとある。よって製鉄初期段階の鉄滓は鉄以外のチタンを含んだ不純物が多く含まれており、より純粋な鉄に近づくほど鉄滓に含まれる不純物は減ってくることになる。製鉄の際に生じる鉄滓は製鉄滓、鉄造や鍛造など行う際に生じる鉱滓を鐵治滓と呼ばれている。

今回、分析に使用した蛍光X線分析装置はエネルギー分散型で完全非破壊分析が利点であるが定量性は良くなく定量分析は行っていない。しかし、各スペクトル図から検出された鉄以外の元素は、全スペクトル図で見る鉄に対してほんのわずかでこれらは純度の高い鉄と言える。鐵治滓の場合、ある程度不純物を除いた純度の高い鉄を用いているので、今回分析した試料は鐵治滓に該当するのではないかと思われる。

＜蛍光X線分析によるマッピング＞

R-022のマッピング画像をfig.184に、マッピングした範囲内で5箇所ポイント分析した蛍光X線スペクトル図をfig.185に、R-013のマッピング画像をfig.186に示す。

fig.184の最初の「全体像」という画像の赤い線で四角く囲んだ範囲を分析しており、そこから検出された元素が以下の画像に続いている。「その他」というのは検出された以外の残りの元素全て(主にバックグラウンド)を示す。最終画像は合成画像で、RはRED、GはGREEN、BはBLUEを表し、この3色を用いて、塩素、鉄、ケイ素の分布を示している。fig.185のマッピング画像から圧倒的に鉄が確認された。とくにメタル部は鉄一色で、周辺部より鉄の純度が高いことを示す。メタル部中の真中の小さな無色の部分は空隙部である。先ほどの＜蛍光X線分析＞とは異なり一定面を測定しているので、先ほどでは確認されなかったケイ素やイオウ、ニッケルや亜鉛なども確認される。ニッケル、亜鉛については画像がほとんど真っ暗であるが、画像右下部にわずかに確認される。なお、塩素も検出されているが、塩素の検出された箇所はくぼんでいてエポキシ樹脂の詰まっている部分が多い。エポキシ樹脂は有機系のためX線管球のロジウムのバックグラウンドが高くなり、ロジウムの近くで検出される塩素も一部引っ張られて検出された可能性はある。

これら画像からケイ素、カリウムはメタル部にはほとんどなく周辺部から検出されており、元素によって分布状況が異なることが分かる。またイオウとカルシウムの検出分布は類似する。マンガンは銀色の鉄の濃ぎりぎりに集中していることも分かった。また、モリブデンも検出された。この画像からモリブデンは銀色

の鉄部分だけでなく周辺にも分布することが確認された。

また、fig. 186にこの装置を用いてR-022をポイント分析したスペクトル図を示す。照射径が $100\mu\text{m}$ のため、先ほどの<蛍光X線分析>の分析（照射径3mm）より小さい範囲で分析ができた。

fig. 187のR-013のマッピング画像からは、空隙部以外全体に鉄が検出されているが、肉眼観察で光沢のある部位は光沢のない部分より鉄が多く集中しており、先ほどの<蛍光X線分析>の結果と一致する。またカルシウムやケイ素が、光沢のある部分では少なく、光沢のない部分では多く分布するのは注目される。塩素は全体にわずかだが検出されている。塩素の画像の右上部縦にうっすらと塩素が検出されているが、これは試料と関係はない。

<金属組織の顕微鏡観察>

R-020とR-022のメタル部分のエッチング処理した拡大写真を示す（fig. 187）。R-020は微細均等な灰色部についてはフェライト（Ferrite： α 鉄または純鉄）と思われる。黒い部分は空隙にエポキシ樹脂が入り込んでいる部分である。また、樹枝状の組織が確認された。この組織画像を東北芸術工科大学の松井敏也氏に見て顶いたところ、デンドライト組織かもしくはマルテンサイトに見えるという御意見を頂いた。マルテンサイトは鍛えた刀等を水につける「焼き入れ」の際に出やすいとされるが、今回のような鐵滓でも水に浸かって急速に温度が下がった場合は出るのだろうか。この組織の写真はメタル部の中央付近で撮影したものだが、外部で同じものとはっきり分かる組織は確認されなかった。

R-022は全体に比較的均質なフェライトが広がる。細い黒い線はフェライトの粒子境界である。組織らしいものは観察されなかった。

参考・引用文献

馬済久夫編（2000）、元素の事典、朝倉書店、304p.

東京工業大学製鉄史研究会（1986）、古代日本の鉄と社会、平凡社新書、359p.

松井敏也・村上 隆・高田 潤（1999）、日本から出土した鉄製遺物の金属組織と腐食の研究。粉体および粉末冶金、46-5、478-483p.

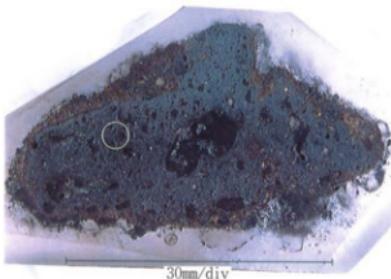
大沢正巳（1997）、比恵遺跡第57次調査出土鉄製品の金属学的調査、比恵遺跡群（24）、福岡市教育委員会、83-100p.



R-004 測定部：光沢のない黒色部



R-013 測定部1：光沢のある黒色部
測定部2：光沢のない黒色部



R-014-2 測定部：光沢のない黒色部



R-020 測定部：純粋なメタル部



R-021 測定部：光沢のない黒色部



R-022 測定部1：純粋なメタル部
測定部2：光沢のない黒色部

fig.183 鉱滓の蛍光X線分析による測定箇所 (○：測定部)

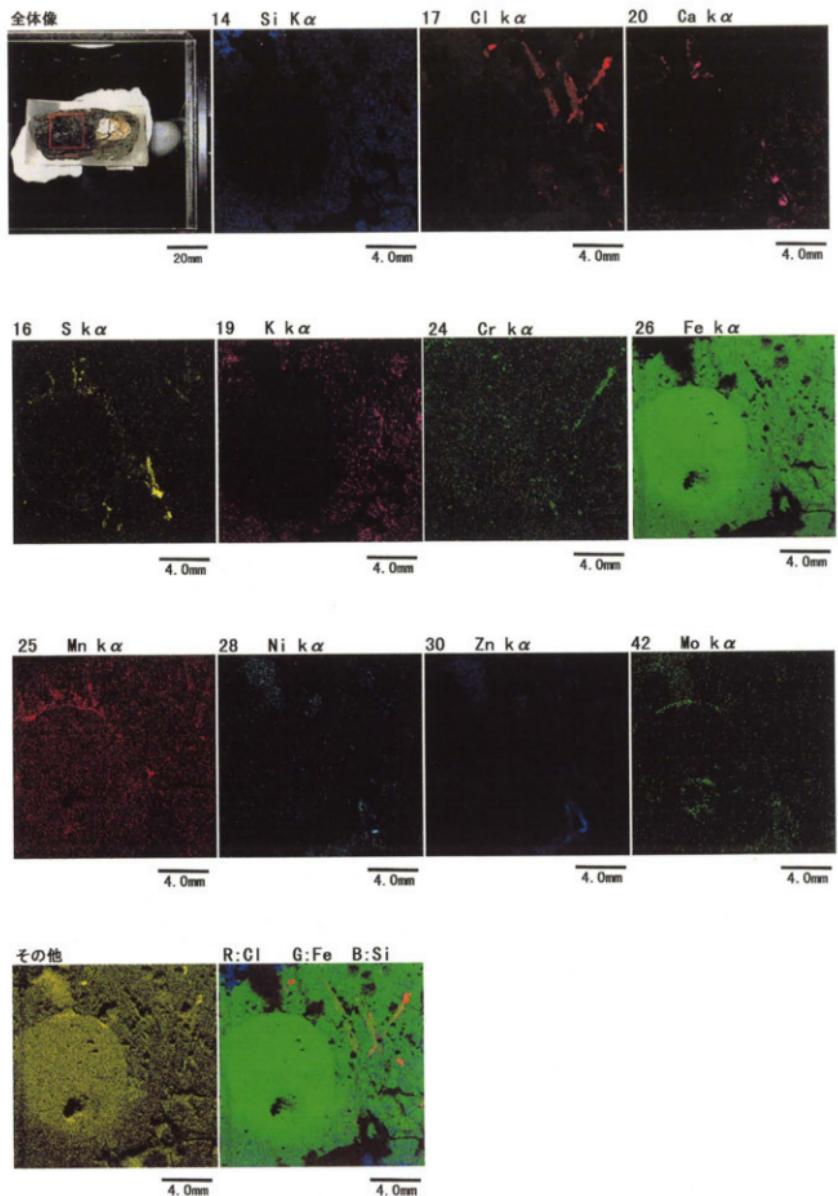


fig.184 R-022から検出された各元素のマッピング画像

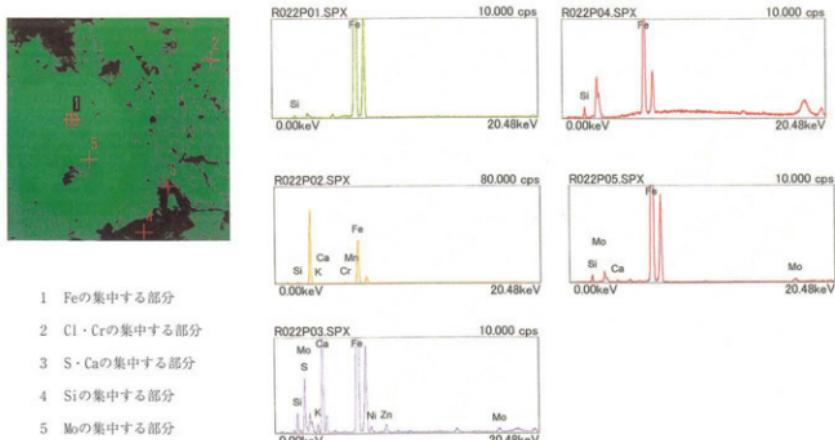


fig.185 R-022のマッピング範囲でポイント分析した蛍光X線スペクトル図

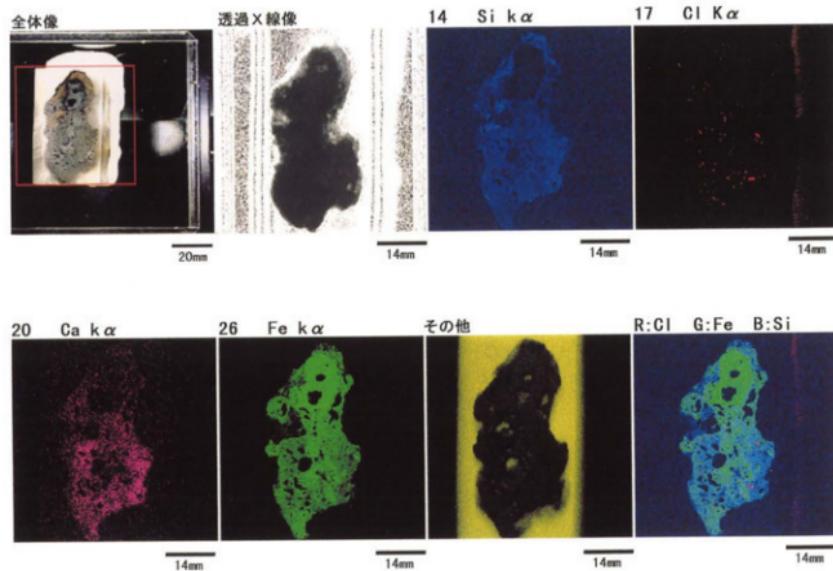


fig.186 R-013から検出された各元素のマッピング画像

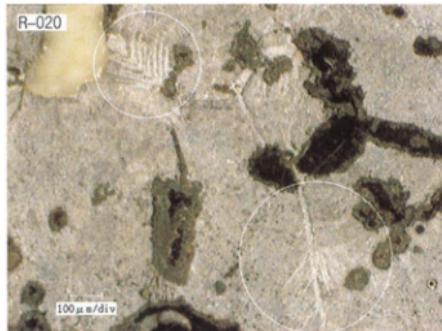


fig.187 R-020とR-022のメタル部の
拡大写真

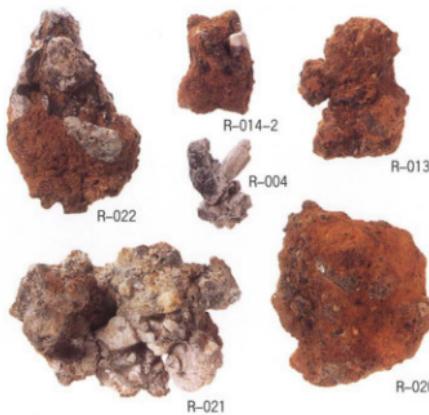


fig.188 鉱滓分析試料

8. 新方遺跡平松地点第3次調査における樹種同定

株式会社 古環境研究所

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から属レベル程度の同定が可能である。また、木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森に植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2) 試料

試料は、礎盤9点、柱痕1点、丸杭2点、丸材5点、割材1点、自然木1点の計19点である。

(3) 方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠なった特徴を記す。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科

fig. 190-1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に4個存在するものがほとんどである。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の濟州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弹性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

モミ属 *Abies* マツ科

fig. 190-2

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～30細胞高である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

ツガ *Tsuga sieboldii* Carr. マツ科

fig. 190-3

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。樹脂細胞が存在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1分野に2~4個存在する。

放射仮道管が存在し、その壁には小型の右縁壁孔が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の形質より、ツガに同定される。ツガは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20~25m、径50~80cmである。材は耐朽、保存性中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diplaxylon* マツ科

fig. 191-4

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

fig. 191-5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1~数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

(5) 所見

分析の結果、カヤ5点、モミ属1点、ツガ1点、マツ属複維管束亜属11点、コナラ属コナラ節1点が同定されたた。穂盤や杭材には、水害に耐えるマツ属複維管束亜属やカヤが多く利用されている。

文献

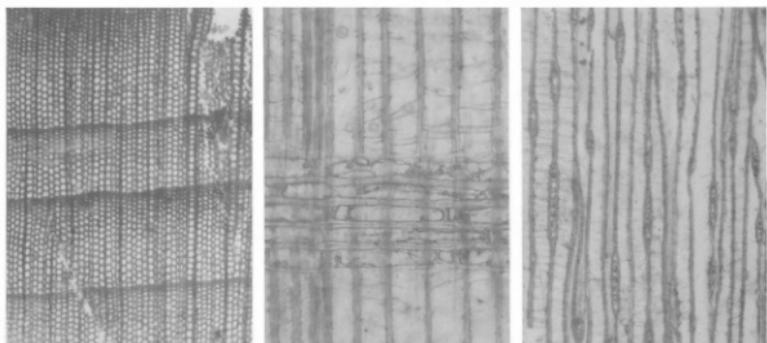
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p. 20~48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p. 49~100.

島地謙・伊東隆大（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.

fig.189 新方遺跡平松地点第3次調査における樹種同定結果

遺物No	遺物名	地区	出土層位	時期	結果(和名/学名)	管
559	鍵盤	II区	S B07-Pit701	11C	カヤ <i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	8464
560	鍵盤	II区	S B07-Pit702	11C	カヤ <i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	8463
561	鍵盤	II区	S B07-Pit703	11C	カヤ <i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	8465
562	鍵盤	II区	S B07-Pit707	11C	カヤ <i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	8472
563	柱根	II区	S B07-Pit710	11C	カヤ <i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	8466
703	鍵盤	II区	S B03-Pit311	11C	マツ属複雜管束亞屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8467
704	鍵盤	II区	S B03-Pit311	11C	マツ属複雜管束亞屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8468
705	鍵盤	II区	S B03-Pit311	11C	マツ属複雜管束亞屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8469
706	鍵盤	II区	S B03-Pit312	11C	マツ属複雜管束亞屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8470
707	鍵盤	II区	S B03-Pit312	11C	マツ属複雜管束亞屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8471
	自然木サソグル	II区	下層流路	平安時代	シガ <i>Tsuga sieboldii</i> Carr.	
	丸杭	I区	河道	中世	マツ属複雜管束亞屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8473
	丸杭	I区	河道	中世	マツ属複雜管束亞屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8474
	丸材	I区	河道	中世	マツ属複雜管束亞屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8475
	丸材	I区	河道	中世	マツ属複雜管束亞屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8476
	丸材	I区	河道	中世	マツ属複雜管束亞屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8477
	丸材	I区	河道	中世	マツ属複雜管束亞屬 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8478
	丸材	I区	河道	中世	コナラ属コナラ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Pinus</i>	8479
	制材	I区	河道	中世	<i>Abies</i>	8480

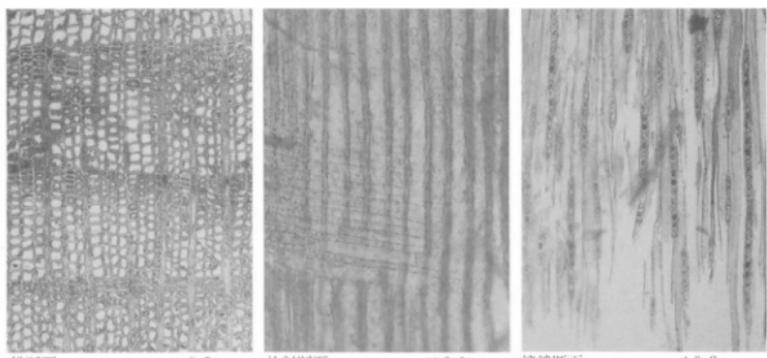


横断面 : 0.5mm

放射断面 : 0.1mm

接線断面 : 0.2mm

1 563 カヤ

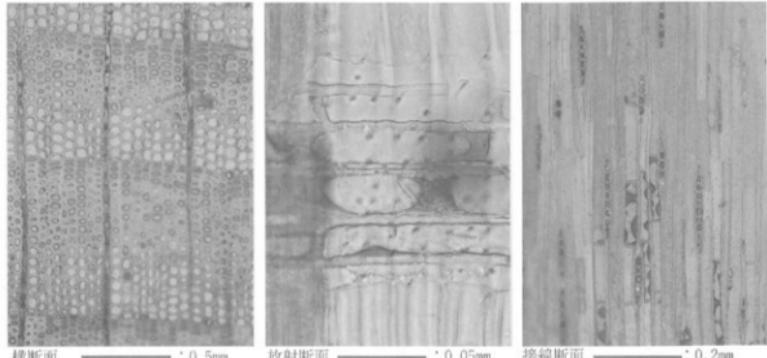


横断面 : 0.5mm

放射断面 : 0.1mm

接線断面 : 0.2mm

2 W-No. 8480 モミ属



横断面 : 0.5mm

放射断面 : 0.05mm

接線断面 : 0.2mm

3 自然木サンプル ツガ

fig.190 新方遺跡平松地点第3次調査の木材(1)

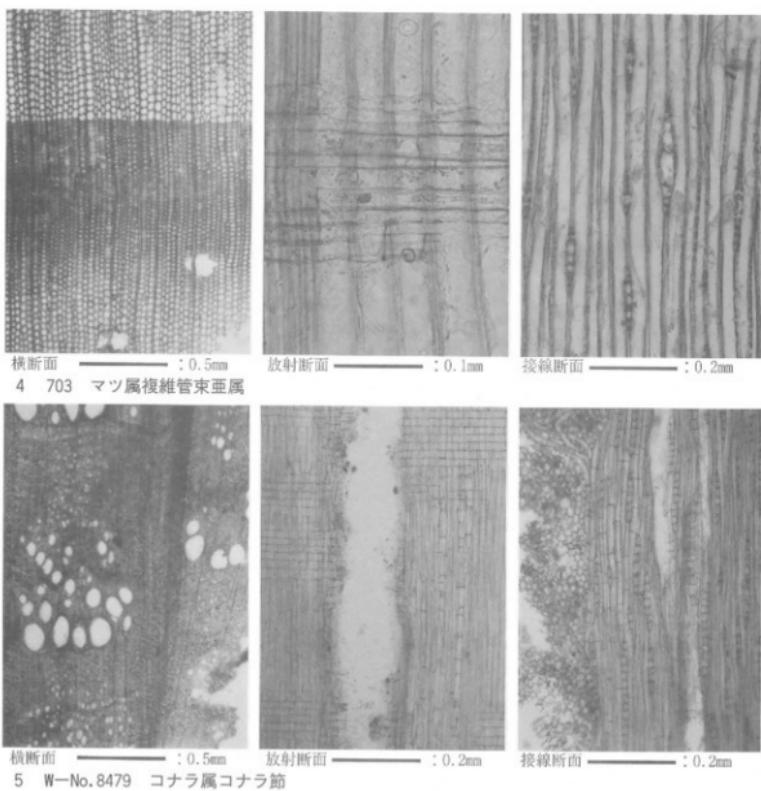


fig.191 新方遺跡平松地点第3次調査の木材(2)

V. 新方遺跡平松地点第3次調査—I区

1. 基本層序

第1遺構面

この調査区では、地下に遺構面が3面存在していることを確認した。現在の地表から標高約11.50m付近まで掘り下げる、第1遺構面である中世の層（第10層）に達する。第1遺構面の遺構から出土した遺物は、別項で詳述するが、中世の遺物を含む鎌倉時代～室町時代頃のものである。この中世の遺構面となる層の直上は、第1遺構面の遺構から出土した土器の示す時期と、ほぼ同じ時代の土器を含んだ耕作土層である。第1遺構面の上には明瞭な包含層は存在しない。これら中世の層より上層には、地表の直下から、現代～中世にいたる幅広い時期の旧耕作土層が、複数層にわたって堆積していた（fig.192 第2層～第9層、第12層～第15層）。

河川の堆積

また、中世の遺構面上では、調査区のほぼ中央を斜めに横切る形で、河の跡の存在を確認した。本調査区で見ることのできる河の堆積は、第1遺構面で確認できる中世の河（第17-e層～17-1層）と、下位の層で確認できるより大規模な平安時代の河（第17-a層～17-d層）の2種類がある。この二つの河川跡は互いに重なり合っている。中世の遺構は、平安時代に河の沖積作用によって堆積した層の上に造られたものであり、中世の河川は、平安時代の河川跡を切り込むように流れていたものである。二つの河川は、同じ川が時代によって異なる様相をみせているものか、源流から異なるまったく別の川が時代毎に同じ場所に流れているのかは判断できないが、堆積層の状態を観察する限りでは、平安時代の大きな河川が、自らの沖積作用によって小規模になったもの可能性が高い。

平安時代の洪水

中世の遺構面である第10層を取り除くと、調査区の南半分では、その下位に室町時代の耕作土層（第19～22層）とさらに下位に洪水砂層（第23層）が堆積していた。

その層中には、平安時代の土器片が混じっている。このことから洪水が起きたのは平安時代の出来事とわかる。

第2遺構面

さらにこの洪水砂を取り除くと、調査区の南半には平安時代の水田面が現れる（第24層）。第2遺構面である。第2遺構面まで掘り下げる、調査区の北半は大きな河川跡となる。河の埋土からは平安時代と弥生時代後期の土器片が出土した。今回の調査では諸般の事情により、河底を確認することなく調査を終了している。そのため、河の初源期がいつかは確認できなかったが、出土遺物のうち、弥生時代のものについては、出土状況からみて後世に混入した可能性が考えられる。水田の北端に明瞭な河岸を形成していることから、河の最盛期は水田と同時期で、当時この場所には河川が流れ、川の水を利用して水田を営んでいたが、ある時河が氾濫し、一瞬で水田は没してしまったと思われる。

第3遺構面

調査区南半では、水田層である第24層を取り除くと、直下に包含層が現れる（第25層）。25層からは古墳時代と弥生時代の土器片が出土した。この包含層を取り除き標高11.00m付近まで掘り下げる、第3遺構面（第26層）が現れる。出土遺物から見てこの遺構面は弥生時代後期の頃のものと考えられる。

第3遺構面より下層は、調査区に平行にサブトレントを設定し標高10.00mまでの堆積層を確認したが、河川状の流水性の堆積が連続しており遺構は存在しなかった（第27層）。

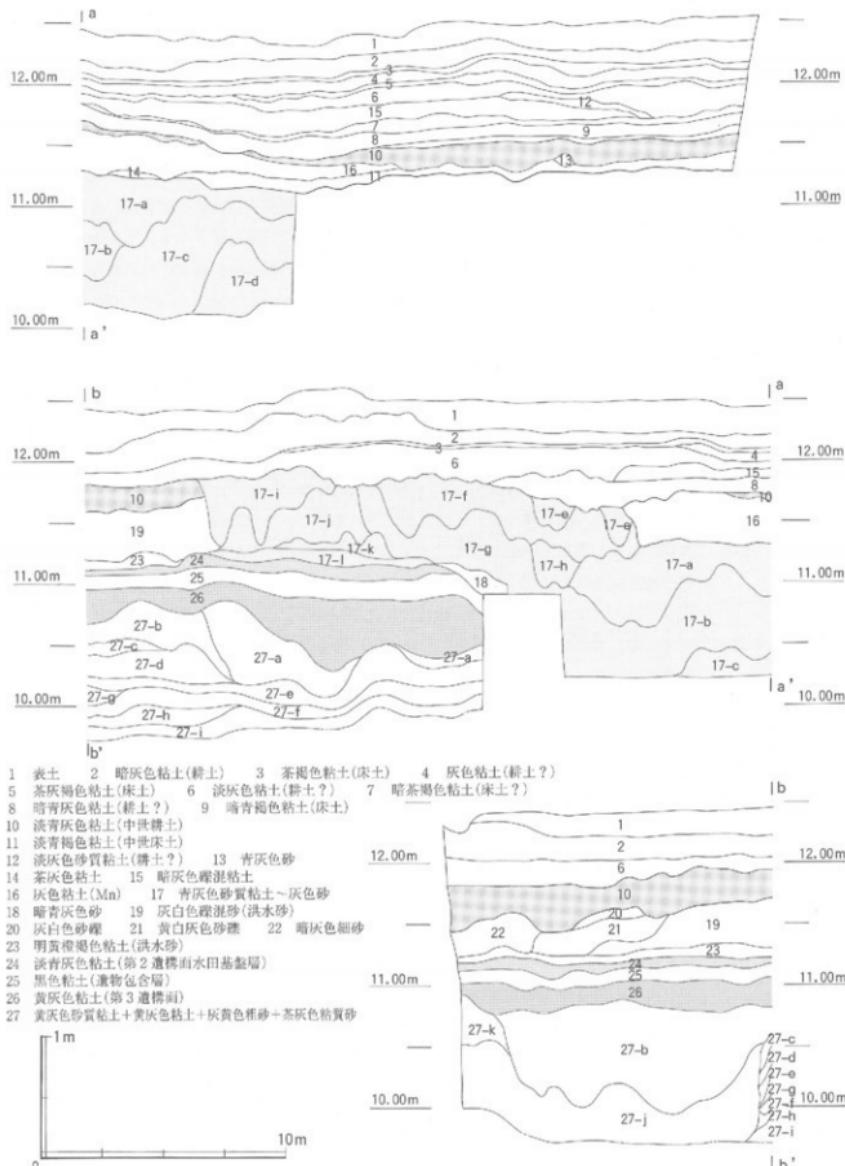


fig.192 西壁の土層断面

2. 弥生時代の遺構と遺物

遺構

本調査区では、標高11.00m付近まで掘り下げた地点で弥生時代後期のもとの考えられる遺構面を確認している。この層上で発見された遺構は、ピット28基と溝2条である。調査区の北半は上述のとおり、平安時代に河が流れたために、遺構面が削られており、弥生時代の層は残っていない。

SD 301 調査区の南側で確認した溝状の遺構で、幅約0.20m、深さは約0.05mと浅い。東西方向に調査区の向きとほぼ平行に走る形で発見された。この溝の底面には、不規則な配列で直径約0.05mのピットが並んでいるのが発見されたが、このピットの役割は不明である。

遺構は、この溝を境にして以南ほど多く、以北は少なくなる。平安時代の河で遺構面が削られた付近では全く遺構は発見できなかった。そのことから考えて、この溝状の遺構は、人間が生活していた空間とその外を分けるための柵のような施設の痕跡であるとも考えられるが、推論の域をでない。

ピット 溝状遺構以外にも、調査区の南半で計28基のピットを確認した。これらのピットは特に規則的に配列したものではなく、建物などの柱穴ではないと考えられる。

遺構面以下層 第3遺構面以下の層については調査区南半を、幅1m、深さ約1.5mの南北方向に長いサブトレンチで、さらに掘り下げて確認した。弥生時代後期の遺構面より下位の堆積層については、湿地性である可能性が高く、遺構面・遺物は確認できなかった。

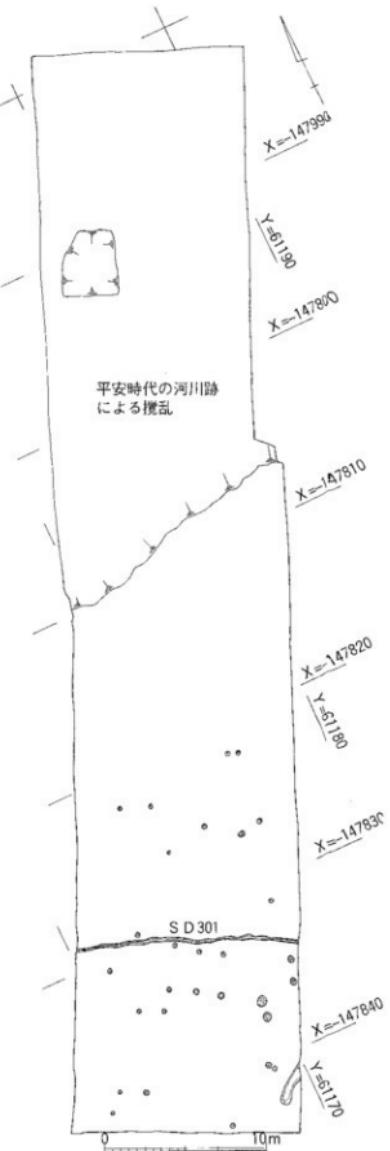


fig.193 弥生時代後期の遺構面

遺物

遺構壇上からは、弥生時代後期と考えられる土器片が出土しており、当該時期の遺構と考えられる。遺構の詳細な性格は不明である。

弥生時代の遺構から出土した土器は、大半が小さな破片である。801の壺は体部が欠損しているが、唯一全体の形状が把握できるほどの良好な資料である。

図化掲載したものは、出土品のごく一部で、801以外は遺物包含層である第25層からの出土土器である。図化可能な程度に残存状態の良好なものだけを選んで、図化した。これらの土器はすべて弥生時代後期に該当する。

甕 801はS D301からの出土品である。口径は復元径で16.8cm、同じく復元した器高は24.0cmである。外面の調整は口縁部から頸部はヨコナデを、肩部以下は綫刷毛調整を施す。底部付近のみ、綫刷毛の後横方向にも刷毛調整を施している。また、体部内面は左上がりのヘラ削り調整が施される。

802~812に関しては、すべて遺物包含層である第25層からの出土である。遺構から出土した土器はすべて、弥生時代後期のものであるが、その上位に堆積していた包含層については、基本層序の項で述べたように、弥生時代後期のものと古墳時代中期のものが混在していた。

802~805は甕の口縁部である。いずれの土器も外面は平行叩きを施している。802は復元径15.4cmを測る。口縁端部に刻み目を有し、外面頸部は体部から連続する叩きの後、ナデである。複数指頭圧痕が認められる。内面頸部はナデを施している。内面体部は摩滅しており調整は不明だが、複数指頭圧痕が認められる。803は復元径が17.6cmを測る。外面頸部から肩部にかけてナデである。頸部には複数指頭圧痕が認められる。内面頸部はナデを施している。内面体部は摩滅しており調整は不明である。804は復元径12.8cmを測る。外面頸部は体部から連続する叩きの後、ナデである。内面頸部はナデを施している。

壺 806は小型壺の口縁部で、内外面とも摩滅のため、調整は不明である。復元径は11.6cmを測る。807は無頭壺で、内外面とも摩滅しており、調整は不明である。復元径は13.8cmを測る。

高杯 808は高杯の杯部の破片である。復元径は22.0cmを測る。内面の調整は摩滅のため不明だが、内外面端部はナデである。外面は刷毛調整を施している。

鉢 809は鉢で、復元径は29.4cmを測る。内外面端部はナデである。外面は叩きを施している。

広口壺 810・811はともに口縁端部が面をなすタイプの壺である。810は端面に4条の凹線文を施し、3個一組の円形浮文を有す。摩滅が著しく調整は不明である。胎土の特徴から、生駒西麓産の搬入土器である。811は端面に3条の凹線文を施し、2個一組の円形浮文を有す。摩滅が著しく調整は不明である。

ミニチュア土器 812は手づくねの小型土器で、完形で出土している。口径が5.8cmで、器高は2.6cmである。内外面とも全体に手づくねの指頭圧痕が認められる。

石錐 また、遺物包含層である第25層からは、石錐片（813）が出土している。環体の約1/4

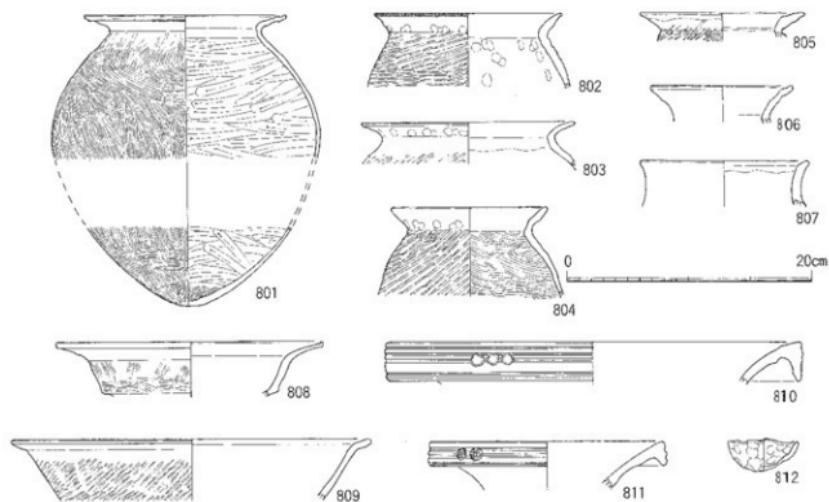


fig.194 弥生時代後期の土器

801: S D 301出土

802~812: 第25層出土

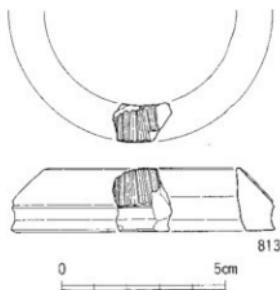


fig.195 包含層出土の石鋤

0 5cm

が残存する。復元外形は8.1cm、内孔径は上端で5.8cm、底面6.3cm、環体高は1.935cm、底面幅は0.9cmである。外斜面は幅1~2mmの刻線で飾り、側面は1段の凹帯である。外斜面と側面の境には鋭い沈線が1条巡る。内面は外湾気味に内傾する。調整は底面が不整方向の細かい研磨、側面が横方向の細密な研磨、内面には縦方向のやや粗雑な研磨痕が認められる。色調は淡緑灰色で、緑色凝灰岩製と考えられる。

3. 平安時代の遺構と遺物

遺構

弥生時代の遺構面となる堆積層より約0.25m上位、標高11.25m付近に堆積した層が平安時代の遺構面である。この面で確認できた遺構は、北半の河川の跡と、南半の水田である。

水田

水田はほぼ調査区と平行に走る畦畔を伴う。その形状は1ブロックが短辺約6m×長辺約22m(132m²)の細長い長方形である。畦畔の方向は条里の方向を示すと考えられるが、座標北の方向から約30°東へ振れる向きに造られている。

水口

水田は北側の河岸付近では地形上の制約から、1枚の田が8m×8mと、南側に比べて小さな區画に造られている。河に取りつく部分で、河にむかって下がる水口(排水口)も確認された。

洪水砂

水田上面には、粗砂層(洪水砂)が薄く堆積しており、河川の氾濫によって埋没したと考えられる。この洪水砂には平安時代の土器が混じっていることから、水田が使われていた時期もこの頃で、水田は突然の洪水で一瞬にして埋没した可能性が高い。

河川跡

調査区の北半は河川跡で、埋土は極細砂～砂質シルト層と粗砂層の繰り返しである。厚さ2m以上にわたり堆積していることを確認したが、諸般の事情により河底は確認できていない。河川跡の埋土には平安時代および弥生時代後期の土器が混在していた。そのうち弥生時代の土器については後世に流入したもの可能性が高い。

この河川は、平安時代水田の水源であったと考えられる。河の南側で発見した平安時代の水田の形状は、極端に細長い点が特徴的である。先に述べた

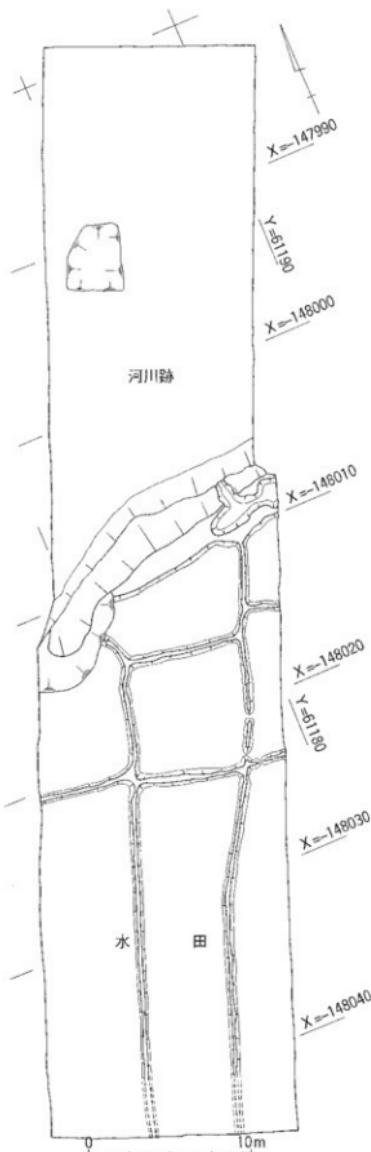


fig.196 平安時代の遺構面

ように、この水田は条里の方向に造られていていると考えられるが、平安時代の条里が確認された例は、市内でも今回が初めてである。

遺物

この遺構面から出土した土器のうち、國化できたものはないが、時期の判別できる破片を見る限りではいずれの土器も平安時代と考えられる。

本調査区では、厳密に時代を特定できる遺物を得ることはできなかつたが、調査区の南に隣接する新方遺跡第44次調査地点Ⅲ区では、水田は平安時代中期とされ、本調査区の河川跡からは平安時代後期の遺物が出土している。以上の点から、平安時代中期から営まれていた水田が、後期に入り洪水で埋没した可能性が高い。

4. 中世の遺構と遺物

遺構

現在の地表面より約1m掘り下げた、標高11.50m付近地点で中世の遺構面を形成する層を調査区全体で確認した。この面で確認された遺構は、土坑1基、溝1条、ピット4基および畦畔状隆起1条である。他に河川跡も発見されている。

S K101 S K101は、直径約1.6mの円形土坑である。

S D106 S D106の周辺に径0.20m、深さ約0.20mのピットを4基検出した。これらのピットの配置に規則性はない。

調査区北半には南北に走る畦畔状隆起がある。周辺に龜溝が多数確認されていることからも、田圃である可能性が高い。

河川跡 調査区のほぼ中央を北東から南西へ調査区内を対角線状に横切る形で幅4.5m程度の河川跡が確認された。この河

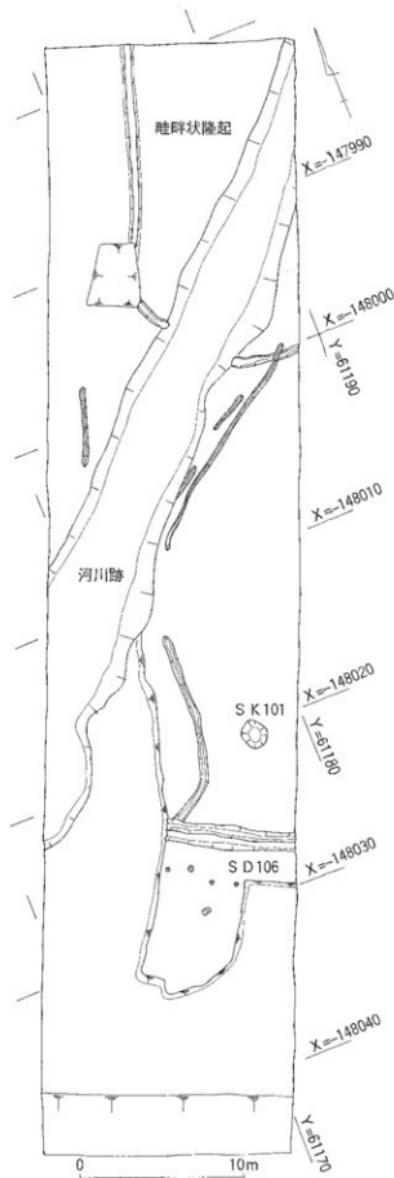


fig.197 中世の遺構面

川跡は、先述の平安時代河川の最終段階の様相である可能性が高い。河川は平安時代から鎌倉時代にかけて存続したものと考えられる。

今回この面で確認した遺構は、明確な機能の判明しないものばかりである。陸畔が確認されていることから、耕作地であったか、それに近い湿地性の土壤だったと考えられる。

遺構からの出土遺物は少ないが、すべて鎌倉時代～室町時代のもので、この時代の遺構と考えられる。

遺物

河の埋土から数点の良好な資料が得られたが、河からの出土品については、下層の河川跡と混在しているため、必ずしも遺構の時期と合致しない。

土師器椀 814・815は遺構面直上に堆積していた中世の耕作土層から出土した土師器椀である。

814は口径が復元径で11.7cm、器高は4.6cmである。底部に回転糸切り痕を有す。内外面全体に回転ナデを施している。815は口径が復元径で11.8cm、器高は5.3cmである。全体に摩滅が著しく調整は不明である。

須恵器椀 いずれも河川の埋土から出土したものである。816は復元した口径が15.6cm、器高は6.7cmである。底部に回転糸切り痕を有す。内外面全体に回転ナデを施している。817は口縁部が欠損している。残存高は4.8cmである。底部に回転糸切り痕を有す。内外面全体に回転ナデを施している。818は復元した口径は16.0cm、器高は6.5cmである。底部は欠損している。内外面全体に回転ナデを施している。

土師器椀 819は河川の埋土内から出土した土師器の椀で、復元した口径は11.8cm、器高は3.5cmである。底部に回転糸切り痕を有す。内外面全体に回転ナデを施している。

須恵器甕 820は河川の埋土内から出土したものである。須恵器の甕の口縁部分で、復元した口径は17.8cm、残存高は3.8cmである。内外面全体にナデを施している。

821も河川の埋土内から出土したものである。須恵器の甕の口縁部分で、復元した口径は30.2cm、残存高は7.7cmである。口縁部から頸部にかけて内外面に、内面は肩部にもナデを施している。外面は肩部にタキ目を有す。

土師器皿 822～825は河川の埋土内から出土した土師器の皿である。822の復元した口径は11.6cm、器高は2.2cmである。底部に回転糸切り痕を有す。摩滅しており調整は不明である。823の復元した口径は9.9cm、器高は2.0cmである。底部に回転糸切り痕を有す。摩滅しており調整は不明である。824の復元した口径は9.2cm、器高は1.6cmである。底部に回転糸切り痕を有す。内外面全体に回転ナデを施している。825の復元した口径は11.6cm、器高は2.1cmである。底部に回転糸切り痕を有す。内外面全体に回転ナデを施している。

土師器鍋 826は河川の埋土内から出土した土師器の鍋で、復元した口径は19.2cm、残存高は10.9cmである。内外面は口縁部から頸部にかけて、内面は体部までナデを施し、体部外面は縱方向に刷毛調整を施している。体部外面は煤が多く付着している。827も河川の埋土内から出土した土師器の鍋で、復元した口径は18.4cm、残存高は6.5cmである。口縁部から頸部にかけて内外面ともナデを施し、体部外面は縱方向に、内面は横方向に刷毛調整を施す。

土師器羽釜 828は河川の埋土内から出土したものである。土師器の羽釜で、復元した口径は30.4cm、残存高は11.0cmである。口縁端部にナデを施し、体部外面は縱方向に、内面は横方向に刷毛調整を施している。

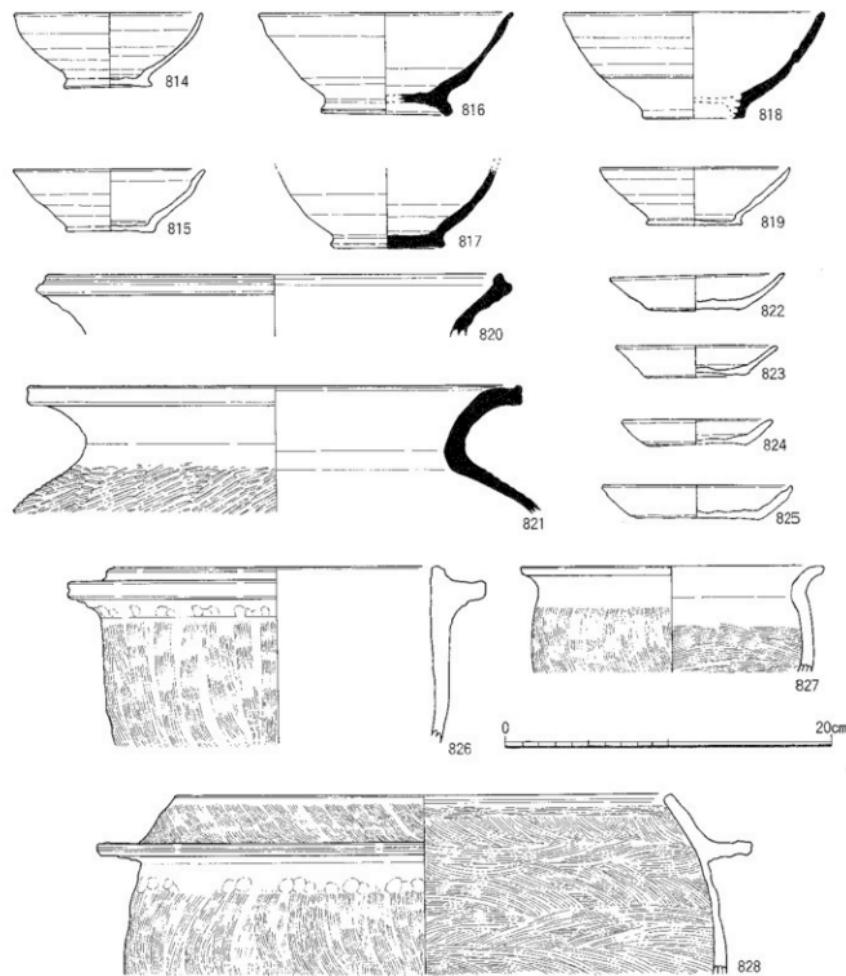


fig.198 中世遺構面および中世耕作土出土の土器

814・815：中世耕作土出土
816～828：中世河川跡出土

5. 小結

本調査区では、弥生時代後期の溝やピット、平安時代中期の水田、平安時代後期の河川、鎌倉時代から室町時代頃の畦畔や土坑など、3層3時期の遺構面の存在を確認した。

今回確認された遺構面は標高10.80m付近から標高12.00m付近までの間に時代順に重なって残されていた。

弥生時代後期

弥生時代後期の遺構面では、遺構は数も少なく、機能も不明な小規模なものであった。平安時代の河の流れによって調査区の北側半分が失われているため、明確な根拠を欠くが、今回の調査で見る限り、弥生時代後期の遺構は北側ほど少なく、南側に密に存在する可能性が高い。

S D 301

今回検出した S D 301と呼ぶ溝状遺構については、底面にピットが並んでいることから、構造的施設の可能性も考えられる。仮に柵であれば、南の遺構が密な地区と北の遺構が希薄な地区を分かつ境界であるとも考えられる。ただし、科学的な証拠は得られておらず、推論の域を出ない。なお、S D 301の溝状遺構以外に南半で確認された遺構はいずれも機能が不明なものばかりである。

これらの遺構の時期については、遺構から出土した遺物から判断して弥生時代後期であると考えられる。出土した遺物は少ないが、いずれもこの時期のものである。

遺物包含層

遺構面の直上には、遺物包含層が堆積していたが、この層自身は純粋な弥生時代後期のものではなく、古墳時代の土器と弥生時代後期の土器が混在しており、包含層自身は古墳時代の堆積層であると考えられる。

平安時代

平安時代の水田については、1ブロックが短辺約6.0m×長辺約22.0m (132m^2) の、極端に細長い長方形である。なぜこのような地割なのかという理由については、今回の調査では科学的な証拠を得ることができず、不明である。

畦畔の方向は条里の方向を示すと考えられるが、座標北の方向よりも、約 30° 東へ振れる向きに造られている。条里にのっとった平安時代中期の水田が発見された例は、神戸市内では初めてである。

水田には河に取りつく部分で、河にむかって下がる水口（排水口）があることも確認された。水田は北側の河からの洪水がもたらしたと考えられる砂で埋まっていたが、水田を覆う洪水砂には平安時代の土器が含まれていた。このことから、水田が使われていた時期もこの頃であると考えられる。水田は平安時代のある時期に、突然河が氾濫して起きた洪水で、一瞬のうちに埋没した可能性が高い。

中世

鎌倉時代～室町時代の遺構面上では、土坑1基、溝1条、ピット4基および畦畔状隆起1条が確認された。

今回この面で確認した遺構は、明確な機能のわからないものばかりである。畦畔が確認されていることから、耕作地であったか、あるいはそれに近いような湿地性の土壤だったと考えられる。

VII. 新方遺跡第44次調査

1. はじめに

第44次調査は、計画道路路線幅員16mのうち、歩道設置予定部分を除く幅約10m、総延長約80mについて全面調査を実施した。

調査区の設定

調査は路線を横切る上水管・污水管の養生を行ったため、3地区に分けて実施した。調査開始順に便宜上南からI区・II区・III区と呼称している。また、掘削残土は順次対象地区内で仮置きしながら調査を実施したが、II・III区については土量が多くなり、北側に続く新方遺跡平松地点第3次調査—I区とはほぼ重複する路線敷に搬出・仮置きし、調査完了後に埋め戻しを行った。

基本層序

基本層序は調査区が分断されたこともあって、うまく把握できていないのが現実である。現地表面から厚い盛上層、耕土層、1~2枚の黄灰色系の旧耕土層の後、鎌倉時代後半の遺構面（第1遺構面）となる。I・II区では柵列・獨立柱建物が確認されたが、II区の北半より北側では畦畔・溝を伴う水田遺構が確認されている。灰色シルト質極細砂の水田層を除去すると、平安時代中期の遺構面となるが、溝とピットを確認した程度で、遺構頻度は低い。この遺構面（第2遺構面）もIII区を中心とする北半のみで確認されている。そして、平安時代中期の遺構面を形成した淡黄色シルト混極細砂層を除去すると、I・II区では第2遺構面、III区では第3遺構面の古墳時代後期の遺構面となり、さらに下層の遺物包含層上面に当たる。集落址を想定できるような遺構には恵まれず、深さ3mを超える流路を確認している。さらに、暗褐色シルト質極細砂～細砂層の遺物包含層を除去した下層の淡黄色シルト質極細砂上面で確認できる遺構面が弥生時代前期～古墳時代前期までに至る遺構面である。この遺構面がI・II区では第3遺構面となり、III区では第4遺構面に当たる。III区ではさらに淡黄色シルト質極細砂～淡青灰色シルト混極細砂～細砂層の基盤層の下層に、無遺物の暗乳灰色シルト質極細砂の土壤化層、淡乳灰色の洪沢砂層を挟み、弥生時代前期の遺物を包含する黒灰色シルト層が堆積する。基盤層は淡黄色極細砂質シルトである。

以上のように、I・II区では同一面で弥生時代前期から弥生時代後期までの遺構が確認されたことは違和感を覚えるが、III区では、弥生時代前期から鎌倉時代後半にわたる5時期の遺構面が確認され、I・II区では3面の遺構面が確認された。

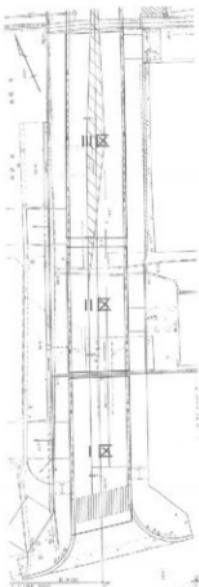
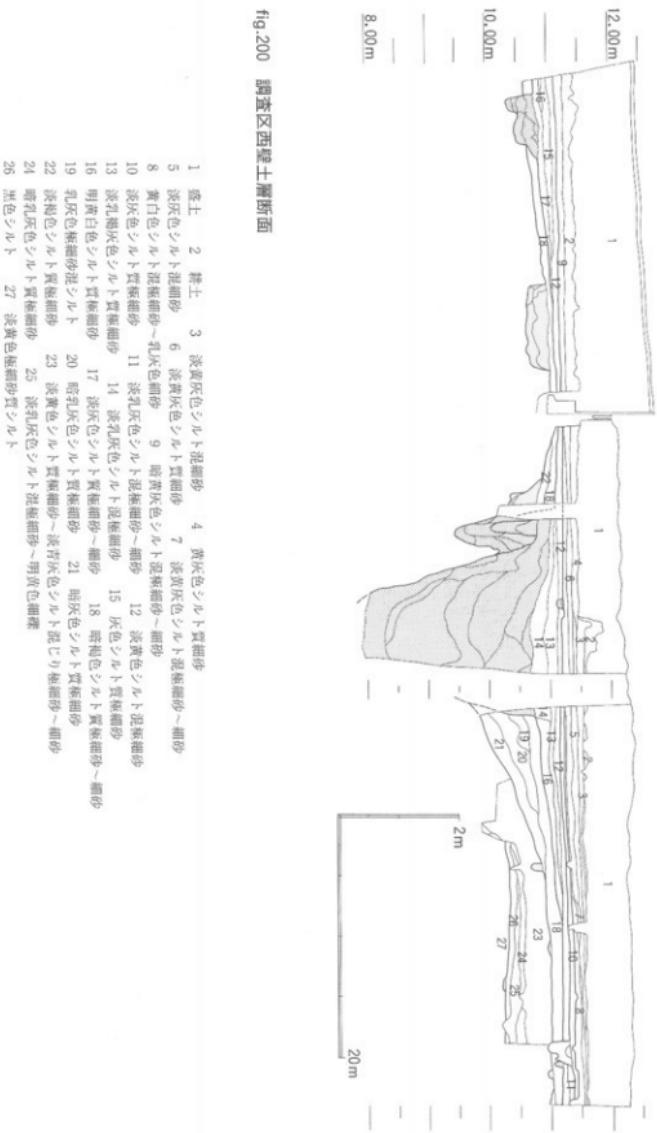


fig.199 調査区の配置
(1/800)

fig.200

調査区西壁土層断面



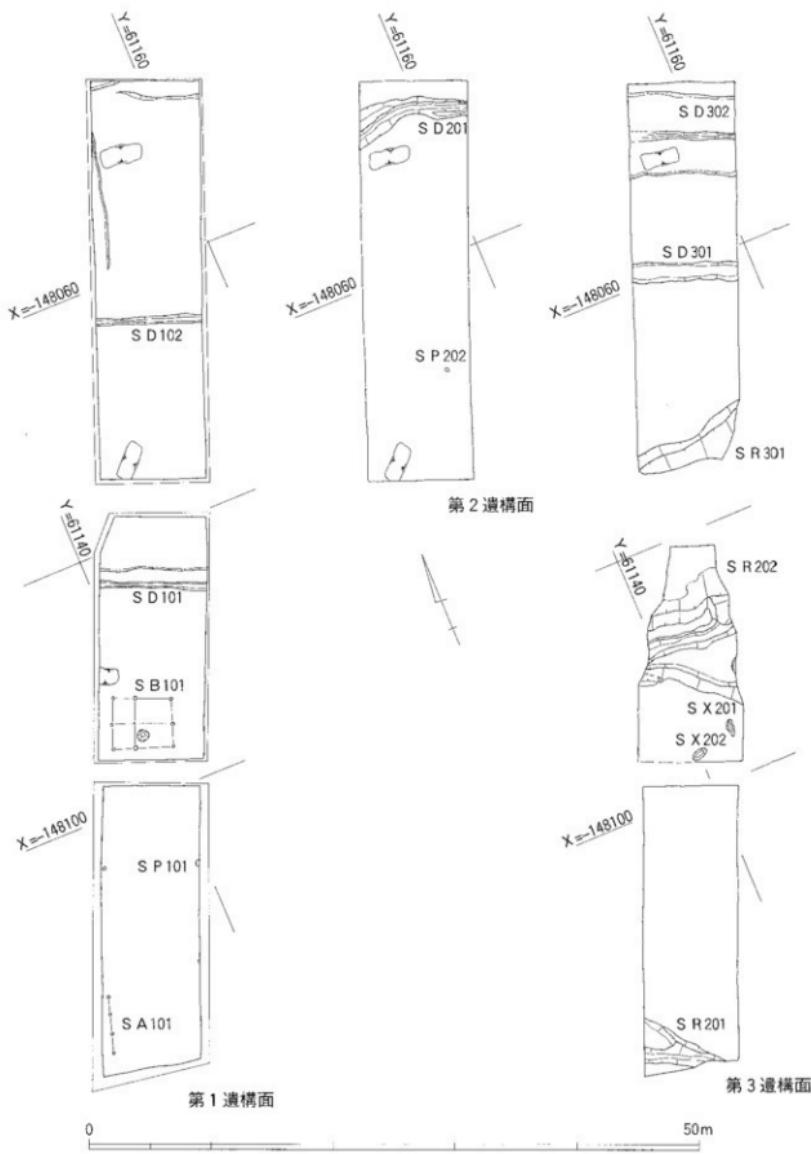


fig.201 調査区の遺構平面(1)

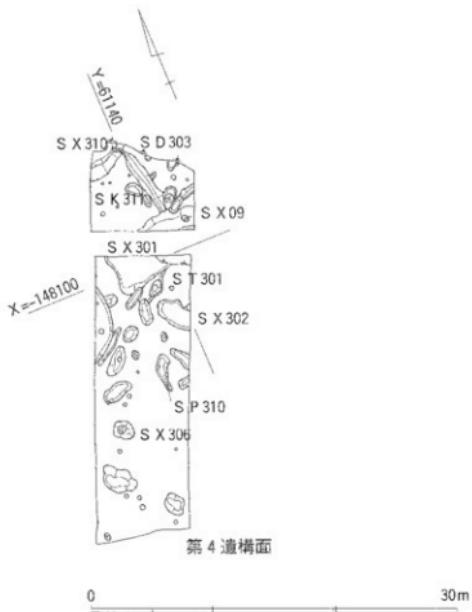
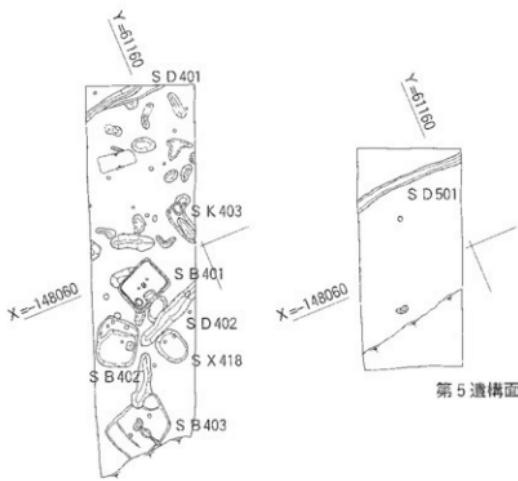


fig.202 調査区の構造平面(2)

2. 弥生時代前期の遺構と遺物

弥生時代前期の遺構面は、Ⅲ区の第5遺構面とI・II区の第3遺構面に当たる。Ⅲ区では遺物包含層を伴う安定した状態で確認している。また、I・II区でも弥生時代後期の遺構と同一面の第3遺構面で、不整形の落ち込み1基を確認しており、遺物包含層からも土器とサスカイト剥片が出土している。

(1) 土坑

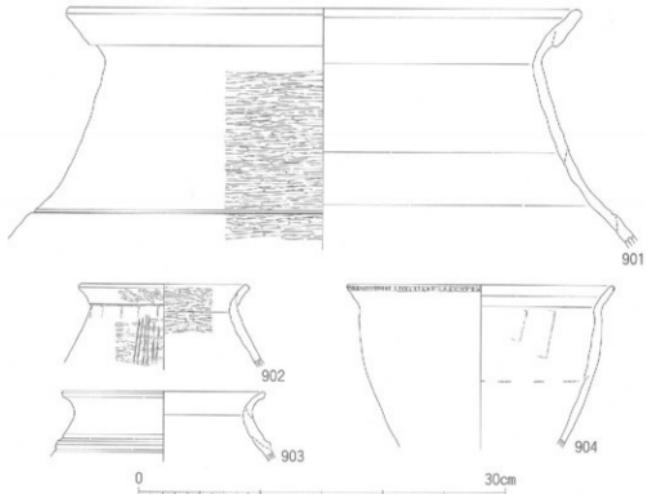
S X 302 東半が調査区外へ延びるため、全容の窺えない不整形の落ち込みで、長径2.7m、短径2.3m、深さ0.13mである。埋土は暗乳灰色シルト質極細砂を主体とする。弥生土器とサスカイト剥片が出土している。

出土遺物 901は大型の壺で、口径41.4cm、残存高19.5cmである。口縁部は斜上外方に延びる厚手のもので、端部は丸く收められる。口頭部界には粘土紐接合痕を段として残す。この段の下位が頸部で最もくびれる部位となっている。頸胴部界はヘラ押沈線1条を伴う段をもつ。器表面はやや磨滅し、調整は単位が明確でないものの、横方向のヘラ磨き調整と考えられる。胎土には直径



fig.203 S X 302

- 1 暗乳灰色シルト質極細砂～細砂
- 2 暗乳灰色シルト質極細砂

fig.204
S X 302出土
の土器

1~5mm前後の白形のチャート粒・石英粒・長石粒を多く含み、2~3mm大のクサリレキ粒をわずかに含むもので、六甲山南麓からの搬入品と想定できる。902も壺で、口径13.4cm、残存高6.7cmである。短く外反気味に延びる口縁部と口頸部界には板ナデで仕上げられた段をもつ。調整は内外面ともに横方向のヘラ磨き調整である。頭部外面にはヘラ描きによる6条の縦線文が施される。胎土には直径1~2mm前後のチャート粒・石英粒を多く含み、1mm大以下のクサリレキ粒をわずかに含む。903も壺で、口径16.4cm、残存高5.6cmである。短く外反する口縁端部は小さな平坦面をもち、頭部には無紋の突帯を作り出す。内外面ともに摩滅が顕著で、調整は不明。904は口径21.6cm、残存高13.3cmの如意形の壺で、口縁端部には小「D」字形の刻み目をもつ。内面には板ナデが一部施される。胎土には1~3mm大のチャート・石英粒を多く含む。902~904は在地産のものと考えられる。

(2) III区包含層出土の土器

905は緩やかに外反して延びる壺の口縁部で、口頸部界にヘラ描沈線を伴う段をもつ。口径は約15cmに復元できる。外面は横方向のヘラ磨き調整である。906と907は同一個体と考えられる壺の頭頸部界で、ヘラ描沈線1条を伴う段をもつ。このヘラ描沈線文を切って、6条1帯のヘラ描斜線文が施される。外面には横方向の丁寧なヘラ磨き調整が施される。908は粘土接合痕に鈍い段をもつ鉢の口頸部界と考えられる。指頭圧痕と横方向のヘラ磨き調整が顕著である。いずれも胎土には1~2mm大のチャート粒・石英粒を多く含む。

fig.205 III区包含層
出土の土器



3. 弥生時代中期の遺構と遺物（II区第3遺構面）

弥生時代中期の遺構はII区の第3遺構面でのみ確認できた。落ち込み1基、溝1条、上坑1基などがあり、弥生時代後期の遺構あるいは古墳時代後期の流路に切られているものがある。

(1) 落ち込み

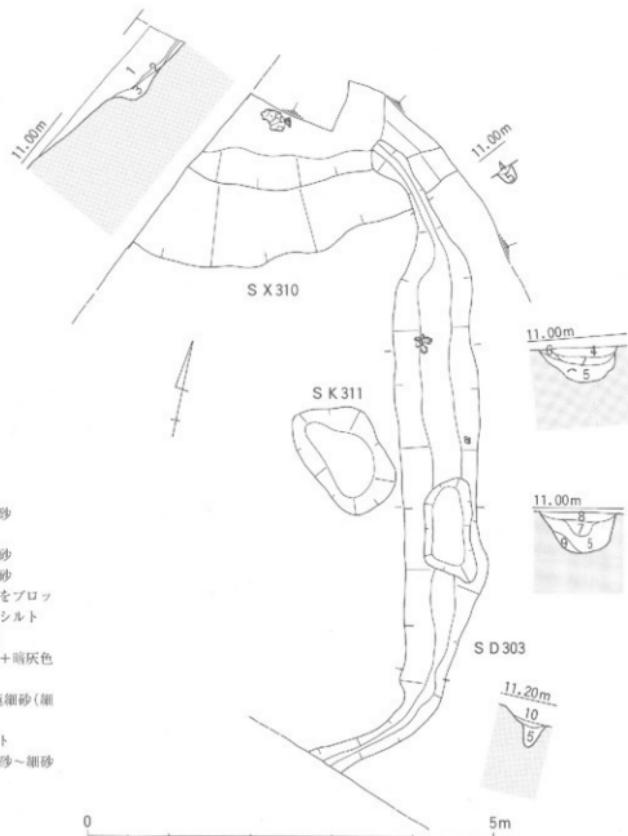
S X310 緩やかな円弧を描く平面形態の落ち込みで、南肩部のみが確認でき、西側は調査区外へ延び、北側はS R 202に切られ、SD 303を切る。肩部は緩やかに落ちた後急に落ち込むもので、最深部で弥生土器の壺が出正在している。最大深さは0.57mである。埋土は3層に分けられる。

出土遺物 909は広口壺で、口径17.8cm、体部最大径27.6cm、残存高23.5cmで、底部を欠く。口縁部はやや開いて緩やかに延び、端部はわずかに上下に拡張し、端面は櫛排列点文で飾る。頭部には無文の断面三角形の突帯が2条巡る。体部は肩部の張らない卵形で、上半には4点1帯の櫛排列点文が2帯施される。調整は体部外面下半がヘラ磨き調整、内面は8条/cmの刷毛調整である。III様式古段階のものと考えられる。

fig.206

S X 310・S D 303

- 1 暗褐色シルト質極細砂
- 2 黒褐色シルト
- 3 淡乳灰色シルト質極細砂
- 4 暗褐色シルト質極細砂
- 5 明黄色シルト質極細砂をプロックで含む暗灰色極細砂質シルト
- 6 雜灰色シルト質極細砂
- 7 淡黄色シルト混極細砂+暗灰色シルト質極細砂
- 8 暗乳黃褐色シルト質極細砂(細粒~小礫混じり)
- 9 暗乳黃灰色極細砂質シルト
- 10 暗乳褐色シルト質極細砂~細砂



(2) 溝

S D 303 北端を S X 310に切られ、南端が弥生時代後期の S X 309に切られた上、さらに延びる溝状構造である。平面形態は南北方向の直線部分と、その両端から円弧を描いて延びるもので、最大幅1.06m、最大深さ0.65mである。埋土は下層が暗灰色シルトを主体とし、一気に埋められたと考えられるのに対して、上層は自然堆積によって徐々に埋没していたものと考えられる。

出土遺物 埋土からの出土遺物には910のほかは弥生土器の小片がある程度である。910は小型の広口壺で、口径10.9cm、体部最大径16.7cm、底径5.6cm、器高20.0cmである。口縁部は短く外反し、端部はやや下方に拡張する平坦面となる。体部は中位で最大径を有するが、やや下膨れの卵形である。調整は体部下半がヘラ磨き調整で、上半は6条/cmの縱刷毛調整である。内面は下半が丁寧なナデ調整、中位が板ナデで、上位は刷毛調整を含む。体部外面

最大径部よりやや上位にはヘラ描刺突文が1条施される。II様式のものと考えられる。

(3) 土坑

S K 311 長径1.47m、短径0.96m、深さ0.26mのやや歪な梢円形の土坑で、埋土は3層に分けられる。遺物はいずれも第2層の黒色極細砂質シルト層から土坑中央に向かって落ち込んだように出土しており、弥生土器の壺の体部片と壺がある。

出土遺物 911は中型の壺の口縁部で、口径27.3cm、残存高13.6cmである。口縁部は「く」字形に折り曲げて外反する。体部は外湾気味に延びるが、下位に粘土紐接合痕を段として残している。調整は体部外面が6条/cmの継刷毛調整で、内面はナデ仕上げである。

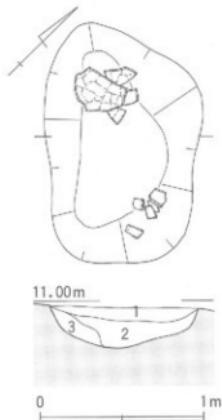


fig.207 S K 311

- 1 暗褐色シルト質施細砂～細砂
- 2 黒色細砂質シルト
- 3 淡黄灰色シルト質極細砂

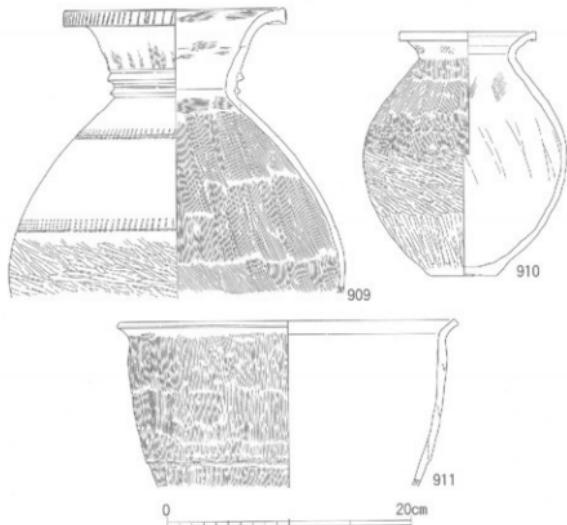


fig.208 S X 310・S D 303・
S K 311 出土の土器

4. 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物

当該期の遺構はI・II区では第3遺構面で、III区で第4遺構面で確認している。竪穴住居4棟のほか、土坑、溝、落ち込み、ピットなど最も遺構密度が高く、遺物量の多い時期である。

(1) 竪穴住居

S B301 I区で確認した円形竪穴住居で、西側は調査区外に延びる。復元径8mで、壁高約0.30mで、床面の標高は11.65m前後である。北半の周壁は傾斜が緩く、南半の周壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は中央に向かってわずかに傾斜しており、検出中央部では深さ0.40mとなっている。床面ではピットを2基確認し、P1は直径0.25m、深さ0.03m、P2は直径0.45m、深さ0.04mで、両者ともに柱穴とは認定できない。なお、周壁溝は存在しない。床面から浮いた状態で、弥生土器甕が1個体出土している程度である。

出土遺物 912は小型の甕で、口縁部を欠く。頭部径9.4cm、体部最大径12.1cm、底径3.3cm、残存高10.9cmである。底部はほとんど突出せず、体部上半に最大径部がある球形に近い形態である。調整は外面下半が4条/cmの平行叩きの後丁寧なナデによるスリ消しで、上半はナデ、内面は上半に板ナデが施される。

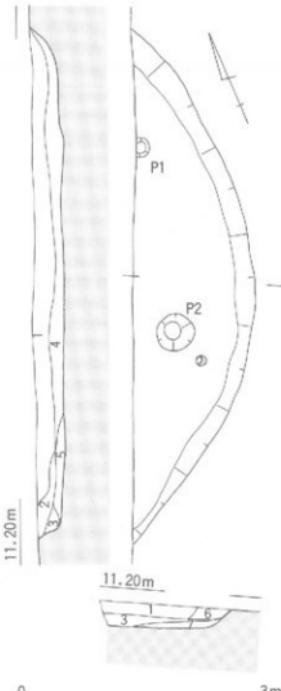


fig.209 S B301

- 1 暗褐色シルト質極細砂
- 2 淡乳褐色シルト質極細砂
- 3 暗灰褐色シルト混極細砂
- 4 暗褐色シルト混極細砂
- 5 淡乳黄色シルト混極細砂
- 6 淡褐色シルト質極細砂
- 7 淡灰色シルト質極細砂

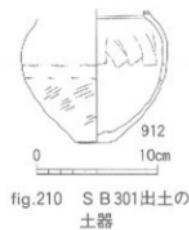


fig.210 S B301出土の
土器

S B401 Ⅲ区中央で確認した長方形竪穴住居で、東西長3.78m、南北長3.05m、壁高0.37mで、S X416・417・419を切る。床面の標高は10.60m前後である。床面では中央に炉、炉を挟むようにして対峙する主柱穴2基、南周壁に取り付く土坑2、南西隅で土坑1を確認している。また、周壁に沿って幅0.10m、最大深さ0.11mの完周する周壁溝がある。

炉 直径0.40m、深さ0.12mで、北西側には図示したように焼土の薄層が張がっている。壁は焼成により赤褐色に酸化している。

主柱穴 P 1は直径0.28m、深さ0.26mで、淡乳黄色シルト質極細砂を埋土とする。P 2は床面の遺物を取り上げて後確認した柱穴で、直径0.25m、深さ0.25mで、淡灰白色シルト質極細砂を埋土とする。両者ともに柱痕は確認できていない。P 1とP 2の心々直線距離は0.99mである。

土坑2 長径0.68m、短径0.55mの小判形の平面形の土坑である。坑底はほぼ平坦で、坑壁は袋状にたちあがり、最大深さ0.38mである。埋土の下半層は土器片でそのほとんどが占められる。貯蔵穴と考えている。

土坑1 東西径1.00m、南北径0.75m、深さ0.27mの2段に掘り込まれた馬蹄形に近い平面形の土坑で、西側肩部中央と北西隅には小さな突起がある。埋土の上半は直径5mm大の炭粒を多く含む暗灰色シルト層で、住居埋土の最下層に当たるが、下半層は黒色炭層が大半を占めることから、炉に関連する土坑と考えている。

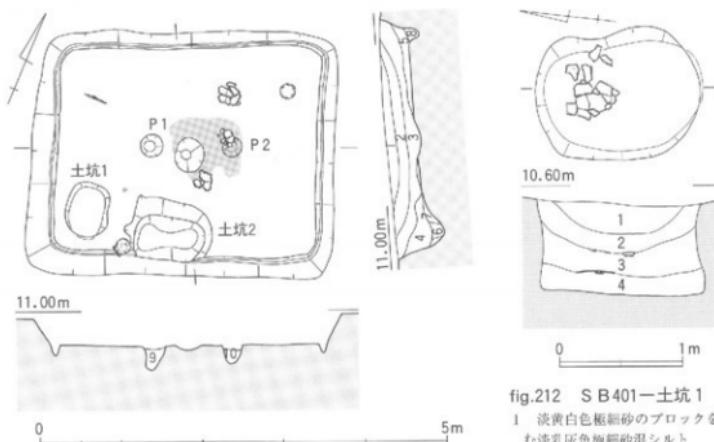


fig.211 S B401

- 1 暗乳褐色シルト質極細砂
- 2 黒褐色極細砂質シルト
- 3 淡乳灰色極細砂質シルト
- 4 淡黄色シルトのブロックを含む暗乳色板細砂質シルト
- 5 暗乳灰色板細砂質シルト
- 6 淡黄色粘土のブロックを含む黒色灰層
- 7 淡乳灰色シルト板細砂
- 8 暗灰色シルト
- 9 暗乳色シルトのブロックを含む淡乳黄色シルト質極細砂
- 10 黑褐色シルトのブロックを含む淡灰白色シルト質極細砂

fig.212 S B401—土坑1

- 1 淡黄白色板細砂のブロックを含む淡乳灰色板細砂混シルト
- 2 暗灰色シルト
- 3 淡黒灰色シルト（土器片多量に含む）
- 4 淡黄色粘土をブロックで含む暗乳色板細砂質シルト（小礫を多く含む）

出土遺物 913~916はいずれも床面に密着して検出したもので、完存する壺を含む。

913はP2上面で出土した完形の土師器壺で、球形の体部から外反する口縁部をもつ。

口径12.8cm、体部最大径15.7cm、器高14.8cm。体部外面は5条/cmの縱刷毛調整、内面は下半が左上がりの板ナデ、上半が刷毛調整である。底部外面器表は被熱のため剥離している。淡乳色～褐色の色調をもつ。

914は口縁部を床面に接して、立ったまま出土した口径14.0cm、体部最大径18.7cm、器高20.0cm。口縁部はやや内湾しながら延び、端部が内側に折り曲げられ、さらにつまみあげられる。915は上坑2の南西隅肩部で押し潰された状態で出土した完存する布留式の土師器壺で、口径13.8cm、体部最大径18.4cm、器高20.2cm。やや厚手の口縁部の壺部内面が水平方向に肥厚する。両個体とも調整は体部外面が6条/cmの縱刷毛調整の後中位のみ横刷毛調整を加え、内面は下半が指押さえ、上半は右上がりのヘラ削り調整である。外面には煤の付着が顕著である。920は炉の南側の個体と土坑1の個体が接合した布留式の土師器壺で、915とほぼ同形同大で、調整も似通っている。口径13.7cm、体部最大径18.2cm、残存高14.6cmで、底部を欠く。916は大型の土師器壺の底部で、炉の北側で出土している。体部径27.2cm、残存高13.5cm。外面は8条/cmの刷毛調整、内面は板ナデ調整か。外面には煤の付着が顕著である。いずれも暗乳色～褐色である。

917~919は上坑1出土の遺物で、山陰系とされる二重口縁の形態をもつ壺の口縁部で、外面には煤の付着が認められる。918では口縁端面に擬凹線が1条巡るほか、内面には円形竹管刺突文が12方向に施される。919では内面のヘラ削り調整が顕著である。いずれも乳色の色調で、焼成がやや堅緻である。

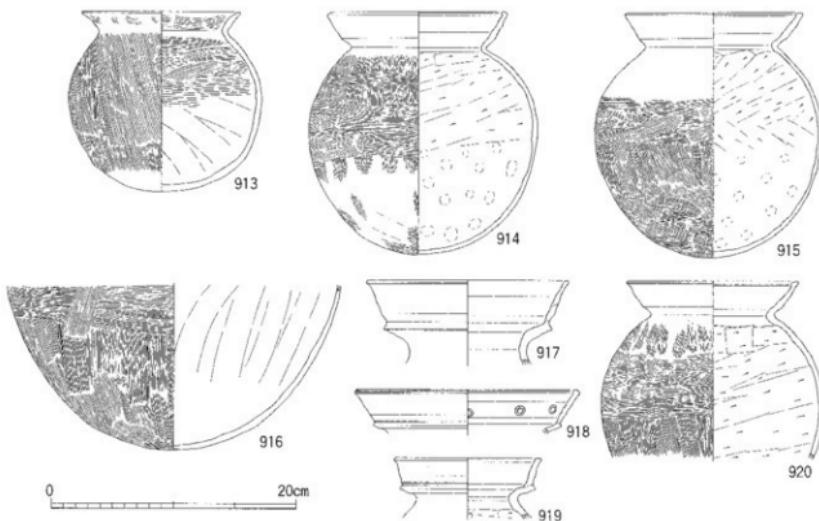


fig.213 S B 401出土の土器

S B 402 北東辺が鈍く突出するため、平面形が五角形となる堅穴住居で、長軸4.31m、短軸3.32mで、S P 419を切っている。最大壁高は0.37mで、床面の標高は10.35m前後である。床面では柱穴1基と土坑1基を確認し、北西辺に削り出されたベッド状遺構上にはピット4基を確認している。周壁溝は存在しない。

遺物は床面に密着するものがほとんどで、ほぼ中央で砥石、西隅には台石、南周壁に沿って砥石が乗った状態で弥生土器高杯が伏せられ、東隅では壺・壺が潰れた状態で出土している。また、床面からやや浮いた状態で、砥石、磨石のほか、最大幅0.15m、長さ約1.2mの大型のものをはじめとする炭化材も確認している。遺存状態の良好な炭化材については試料を採取し、樹種同定を行った結果、カヤ・ヤブツバキ・シイ属・ヤナギ属と同定されている（第Ⅳ章）。

P 1 長径0.24m、短径0.19mのピットで、東南に偏して直径0.14m、深さ0.10mの暗乳灰色シルト質細砂を埋土とする柱痕が確認された。

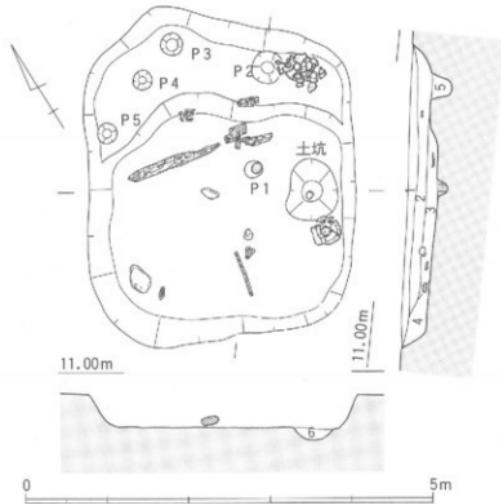
土坑 1 南周壁に取り付く土坑で、長径0.75m、短径0.60m、深さ0.16mである。埋土は暗乳灰色極細砂質シルトである。

ベッド状遺構は最大幅0.89mで、床面からの高さ0.12mである。P 2は直径0.40m、P 3～5は直径0.25～0.30m、深さは概して0.12m前後で、柱痕は確認できていない。埋土はいずれも暗乳灰色シルト質細砂である。

出土遺物 921は大きく突出する底部に無花果形の体部と大きく外反する口縁部からなる広口壺で、口縁端部はわずかに下方に拡張される。口径13.9cm、体部最大径19.6cm、底径5.0cm、器高22.8cm。口縁部外面と体部外面下半には疎らにヘラ磨き調整が施され、体部内面上半には8条/cmの刷毛調整が施される。体部外面の中位から下位にかけて煤が付着する。

fig.214 S B 402

- 1 淡色シルト質細砂
- 2 淡乳黄色シルト質細砂
- 3 指頭大の黄色シルトのブロックを含む暗乳灰色極細砂質シルト（直径5mm大前後の炭粒を多く含む）
- 4 暗乳黄色シルト質細砂質シルト
- 5 淡色シルト質細砂
- 6 暗乳灰色極細砂質シルト



922は突出する底部と無花果形の体部から、長く延びる頸部と大きく外反する口縁部をもつ長頸壺で、口縁端面には凹線が1条巡る。また、頸基部にはヘラ描刺突文が1条施される。口径14.5cm、体部最大径15.5cm、底径4.8cm、器高23.6cm。体部外面の一部には6条/cmの刷毛調整が施され、頸部外面と体部内面には8条/cmの刷毛調整が施される。体部外面下半には煤の付着が顕著である。

923は体部最大径を中位よりやや上半にもつ中型の壺で、口径16.7cm、体部最大径21.3cm、底径5.0cm、器高27.3cmである。口縁端部は外方へわずかに拡張され、端面には鈍い凹線が巡る。体部外面は左上がりの2条/cmの平行叩きの後8条/cmの刷毛調整で部分的にスリ消す。内面は左上がりで単位の不明瞭なヘラ削り調整が施される。外面のほぼ全面に煤の付着が認められる。

924は円孔スカシを3方向に持つ「ハ」字形に開く脚部と大きく開く壺体部から屈曲して外反しながら立ちあがる口縁部をもつ高壺である。口縁端部は丸く收められ、上面には沈線が1条巡る。口径29.0cm、底径14.9cm、器高16.8cm。壺部底部は円整充填で、内・外面ともに6条/cmの刷毛調整の後ヘラ削り調整が加えられる。

925は長さ26.0cm、幅11.9cm、厚さ9.0cm、重さ3.704kgの花崗岩質砂岩製の砥石で、2面に使用痕が明瞭である。926は長さ12.3cm、幅20.0cm、厚さ9.9cm、重さ3.558kgの砂岩製の砥石で、上面にのみ使用痕が明瞭である。927は下半部を欠損する閃緑岩製の磨石である。長さ9.0cm、幅11.4cm、厚さ7.9cm、重さ0.726kgで、2面に使用痕が明瞭である。

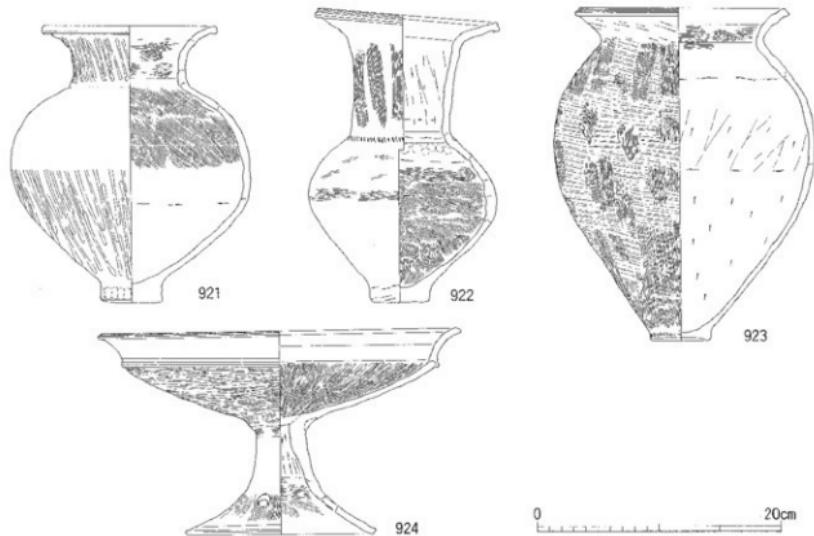


fig.215 SB402出土の土器

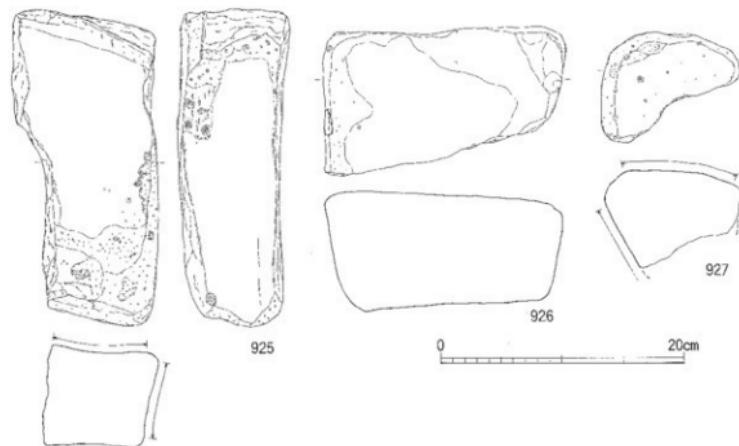


fig.216 SB 402出土の石製品

S B 403 III区の南端で確認した平面形がやや歪な長方形の堅穴住居で、北から南へ傾斜する遺構面に営まれている。北辺から北東隅がS X420に切られているほか、南西隅が後述するS R301によって切られている。

東西長5.89m、南北長3.81m、最大壁高は北辺で0.39mで、床面の標高は9.80m前後である。西辺には最大幅1.10m、高さ0.02~0.08mのベッド状遺構が削り出される。また、北東隅部にも高さ0.08mのベッド状遺構が削り出される。床面では中央土坑とそこから発する排水溝、これらを挟んで対峙する主柱穴2基が確認された。遺物は南辺周壁に沿って弥生土器壺(928・929)・鉢(936)がまとまって出土しているほかは散在的で、砥石・磨石様の円錐形や軽石も埋土から出土している。

主柱穴 P 1は直径0.45m、深さ0.20mの円形のピットで、柱痕は確認できていない。底面には直径0.12mのくぼみがあり、柱当たりであろうか。P 2は直径0.42m、深さ0.17mの円形のピットで、柱痕は確認できていない。弥生土器壺の上半部が2個体(931・933)出土している。P 1-P 2間の心々距離は2.34mである。

中央土坑 長径1.03m、短径0.53m、深さ0.09mの歪な楕円形の土坑で、埋土は最下層に炭層が堆積し、その他は暗灰色シルト混極細砂~細砂である。弥生土器小片と磨製石器?(940)が出土している。

排水溝 中央土坑の南西隅から発し、途中で土坑状の拡がりをもつ部分があるものの、幅0.15~0.51mで、深さを徐々に増しながら南辺の周壁外まで延びている。深さは周壁外で最大0.23mとなっており、断面は鈍い「V」字形である。

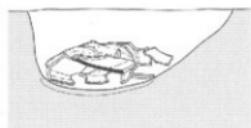
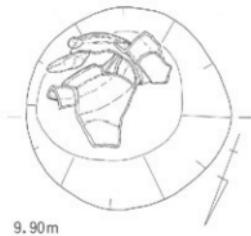
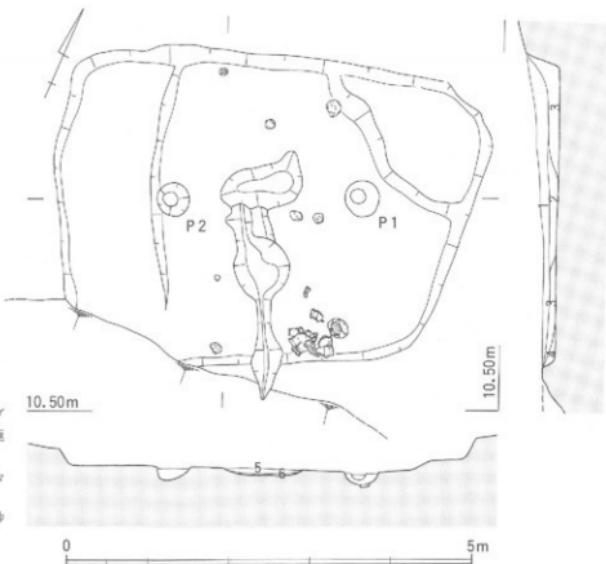


fig.218 S B 403-P2

0 50cm

出土遺物 928は口縁部を欠き、扁球形の体部をもつ壺で、頭基部径11.1cm、体部最大径25.9cm、底径4.8cm、残存高24.5cmである。体部下半は2.5条/cmの平行叩きの後ヘラ磨き調整によってスリ消される。体部上半は2.5条/cmの平行叩きの後10条/cmの刷毛調整によるスリ消しの後ヘラ磨き調整を加え、内面は下半が左上がりの板ナデである。肩部にはヘラ描沈線による弧線文が施される。体部中位には煤の付着が認められる。929も口縁部を欠く壺で、

体部最大径16.8cm、底径4.7cm、残存高16.5cmである。体部外面は3条/cmの平行叩きの後6条/cmの刷毛調整で、内面は左上がりの板ナデ調整である。また、底部外面にも平行叩きが施される。930は長頸壺の頸部～体部上半片で、体部最大径17.0cm、残存高16.8cmである。体部外面は2条/cmの横位あるいは左上がりの平行叩きの半スリ消し、内面は8条/cmの刷毛調整である。頸基部にはヘラ搔刺突文が巡り、頸部外面は10条/cmの刷毛調整が施される。体部の中位以下には煤の付着が認められる。

931は縱長卵形の体部から「く」字形に延びる口縁部をもつ壺で、口縁端部はつまみ上げられ、端面には2条の凹線が巡る。口径13.4cm、体部最大径18.2cm、残存高18.9cm。体部外面が3条/cmの平行叩きの後下半が8～10条/cmの縱刷毛調整、上半のうち下位は横位の10条/cmの刷毛調整で、上位はナデ調整である。内面は10条/cmの横位主体の刷毛調整である。932は口縁部が体部から鋸く「く」字形に外反する壺で、口縁端面は凹状に仕上げられる。口径15.0cm、体部最大径17.0cm、残存高14.0cm。体部の調整は2条/cmの横位の平行叩きの後、8条/cmの刷毛調整である。内面は右上がりのヘラ削り調整である。口縁端部と体部中位には煤が付着する。933は頸部内面に棱をもって口縁部が屈曲して延びる壺で、口縁端部には凹線が1条巡る。口径13.6cm、残存高6.6cm。体部外面には2条/cmの平行叩きの後10条/cmの横位あるいは縦位の刷毛調整が施される。内面は板ナデ調整が頸著である。

934は口径18.8cmの高坏壺部で、口径18.8cm、残存高5.1cmである。坏体部から屈曲してたちあがる口縁部はわずかに外反し、端部は丸く取め、外面は6条の凹線文で施される。調整は内外面ともにヘラ磨き調整で、坏底部は円盤充填である。935は口縁部がなだらかに延びる高坏で、口径21.0cm、残存高11.8cmで、円孔スカシをもつ脚部は欠損する。口縁部外面には2条の凹線が巡る。調整は坏部が内外面ともヘラ磨き調整で、脚部の外面もヘラ磨き調整である。

936は口縁部に1方向の片口部をもつ大型鉢で、口径33.8cm、底径6.4cm、器高20.7cmである。突出する大きな底部から内溝しながら延びる体部と、鋸く「く」字形に外反する口縁部をもつ。口縁端部は大きな平坦面をなす。体部上位には大型の耳状の把手を片口部と直行する方向で対向して2箇所に貼り付ける。調整は概してヘラ磨き調整で、把手の外側周辺のみ8条/cmの刷毛調整が遺存する。特に片口部内面はナデによって平滑に仕上げられる。また、底部外面には木葉压痕がみられる。

937は閃綠岩の砥石で、長さ16.9cm、幅10.9cm、厚さ7.6cm、重さ2.350kgである。3面が使用されたようである。938は長さ10.8cm、幅8.2cm、厚さ7.4cm、重さ1.036kgの斑レイ岩の磨石と考えられる。939も磨石で、長さ5.6cm、幅4.1cm、厚さ3.7cm、重さ112.3gの砂岩である。940は研磨痕が認められる石材小片で、長さ2.5cm、幅5.5cm、厚さ0.9cm、重さ8.7gである。再加工を施した磨製石器の断片であろうか。941は長さ7.1cm、幅6.8cm、厚さ4.1cm、重さ34.0gの軽石である。上面に直径0.7cm、深さ1.6cmの円錐形の孔が2個並列するものである。何らかの工具先端を研磨したのであろうか。

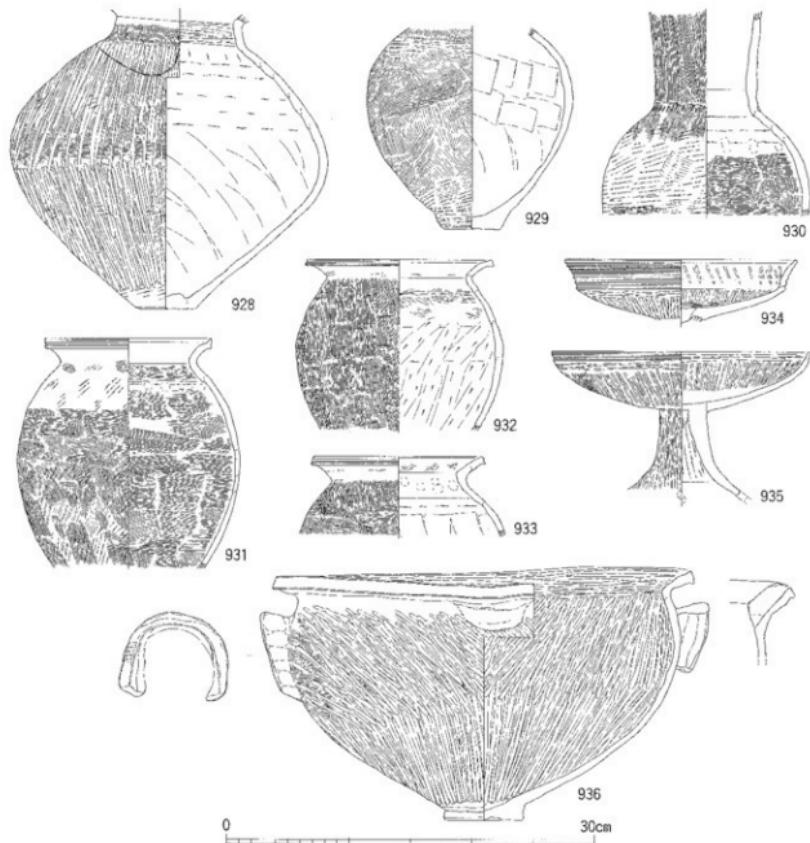


fig.219 SB 403出土の土器

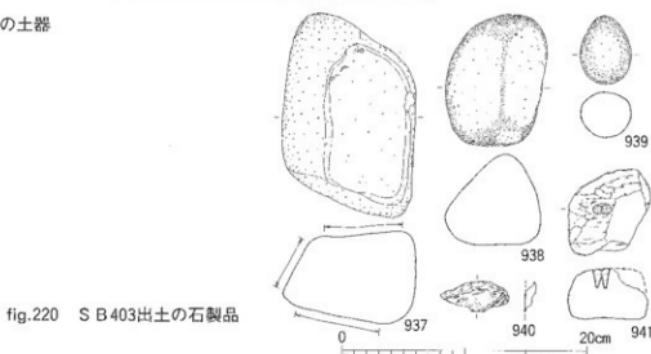


fig.220 SB 403出土の石製品

(2) 溝

S D 401 III区北端で確認した東西方向に走る溝で、S K401を切る。最大幅1.24m、最大深さ0.13mで、検出長は7.15mである。埋土は上半層が淡乳灰色極細砂質シルトで、下半層は暗灰色シルト質極細砂である。出土遺物には小片の弥生土器がある。

S D 402 III区南半で確認した北東から南西方向に走る溝で、S X417を切る。南に向かって傾斜する第4 遺構面の傾斜変換ラインと平行してほぼ重なる位置にあたる。流末は一端収束するものの、本来は折れ曲がった後傾斜に直交して S X420に統いていたものかもしれない。断面「U」字形で、最大幅1.32m、最大深さ0.27mで、検出長7.01mである。埋土中位から完形の弥生土器高坏が1点出土しているほかは、概して土器小片がある程度で、遺物量は少ない。

942は小型の高坏で、口径13.9cm、底径11.4cm、器高12.2cmである。坏部は内湾しながら延びる楕型で、口縁端部は内傾し、丸く取められる。脚部は裾部が急に広がるもので、罐部には凹線1条が巡り、下位には円孔スカシを5方向に穿つ。坏底部の円盤充填は明確でない。調整は6条/cmの刷毛の後ヘラ磨き調整である。

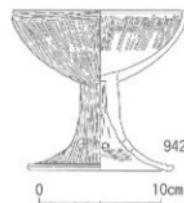
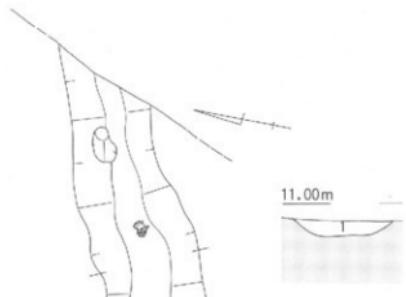


fig.222 S D 402出土の
土器

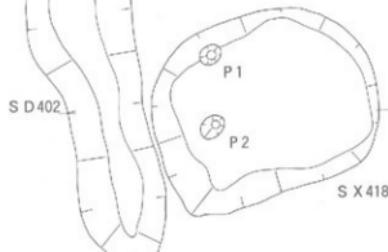
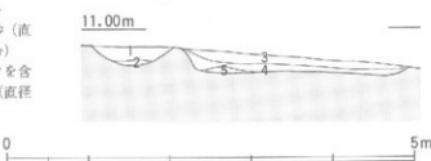


fig.221
S D 402・S X418

- 1 暗乳灰色極細砂質シルト
- 2 淡乳灰色極細砂混シルト
- 3 暗乳灰色シルト質極細砂（直徑5mm大の炭粒を多く含む）
- 4 淡黄色極細砂のブロックを含む暗灰色シルト質極細砂（直徑3~5mm大の炭粒を含む）
- 5 暗灰色シルト混極細砂



(3) 土坑

S K 306 長径2.13m、短径0.97mの平面形が瓢箪形の土坑で、深さは最大で0.11mである。埋土は暗乳褐色シルト質板細砂～細砂で、北半底部で弥生土器がまとまって出土している。

出土遺物 943は短く外反する口縁部をもつ壺で、端部は上下に拡張され、平坦面をもつ。口径12.4cm、残存高5.7cm。体部外面は3条/cmの平行叩きで、頸部外面には8条/cmの刷毛調整が施される。945は壺の突出する底部で、底径4.5cm。945は口縁端部に擬凹線がめぐる壺で、口径13.4cm、残存高6.9cmである。外面は3条/cmの平行叩き、内面は5条/cmの刷毛調整。946は輪台成形による壺の底部。947は完形に復元できる小型壺で、口縁端部はわずかに上下に拡張する。口径12.4cm、体部最大径12.3cm、底径3.9cm、器高13.4cm。体部は3条/cmの平行叩きで、中位でその方向が大きく変わる。948は3条/cmの平行叩きで仕上げられた壺の底体部で、中位付近は6条/cmの縦刷毛調整が加えられる。949は口縁部が大きく外反する鉢で、端部はわずかに垂下する。口径23.9cm、残存高4.7cm。内面はヘラ磨き調整で仕上げられる。950は丸みをもつ小さな底部と内湾して延びる体部と緩やかに外反する口縁部をもつ鉢である。口径18.8cm、器高9.0cm。内外面ともに摩滅が顕著。

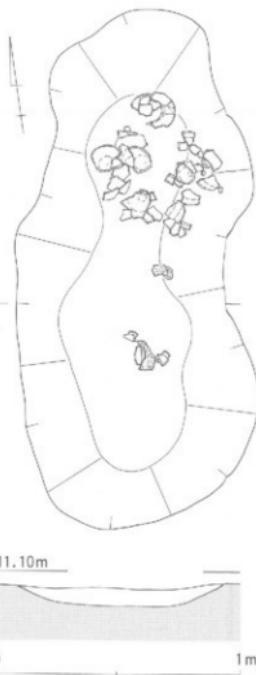


fig.223 S K 306



fig.224 S K 306出土の土器